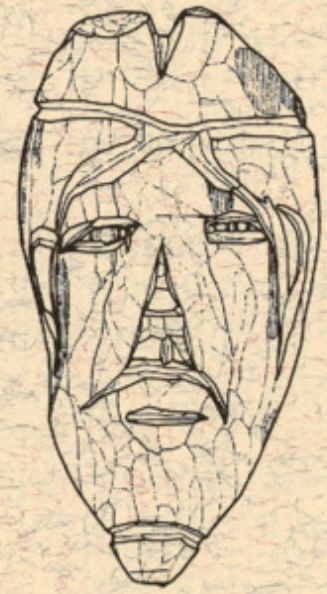
昭和57年度

平城宮跡発掘調査部
発掘調査概報



1983

奈良国立文化財研究所

凡　例

1. 本書は、奈良国立文化財研究所平城宮跡発掘調査部が、昭和57年度に行なった平城宮跡および平城京内遺跡の概要報告である。各章の執筆は各現場の担当者が行なった。
2. 朱雀大路(第141－25次)、外京二条六坊十一坪（第144－1次）、左京四条四坊九坪（第141－9次）、平城京東掘河（第141－23次）、左京九条大路（第141－37次)、および法隆寺については別途報告書を発行したので、本書には収録していない。
3. 遺構図に付した座標値は、平城宮内遺構の場合が平城方位に基づいた座標値平城京内遺構の場合が国土座標値、薬師寺境内の場合が伽藍中軸に基づいた座標値である。平城方位とは第二次内裏内郭をめぐる築地回廊の北面北雨落溝の方位に基づくもので（『平城宮発掘調査報告』Ⅶ)、宮内各所に設けた基準点を（0.0)とし、東西南北をＥＷＳＮとして正数（単位m） で表示。
4. 遺構図には、遺構ごとに一連の番号を付し、その前にＳＡ；築地・塀、ＳＢ；建物、ＳＤ；溝・濠、ＳＥ；井戸、ＳＦ；道路、ＳＫ；土壙、ＳＳ；足場ＳＸ；その他などの分類番号を示した。

目　次

Ⅰ　平城宮の調査　P

1　内裏北外郭東北部の調査　第139次 …… 1
2　南面大垣－朱雀門西－の調査　第143次 …… 9
3　推定第一次朝堂院地区の調査　第140次 …… 12
4　第一次朝集殿推定地の調査　第146次 …… 29

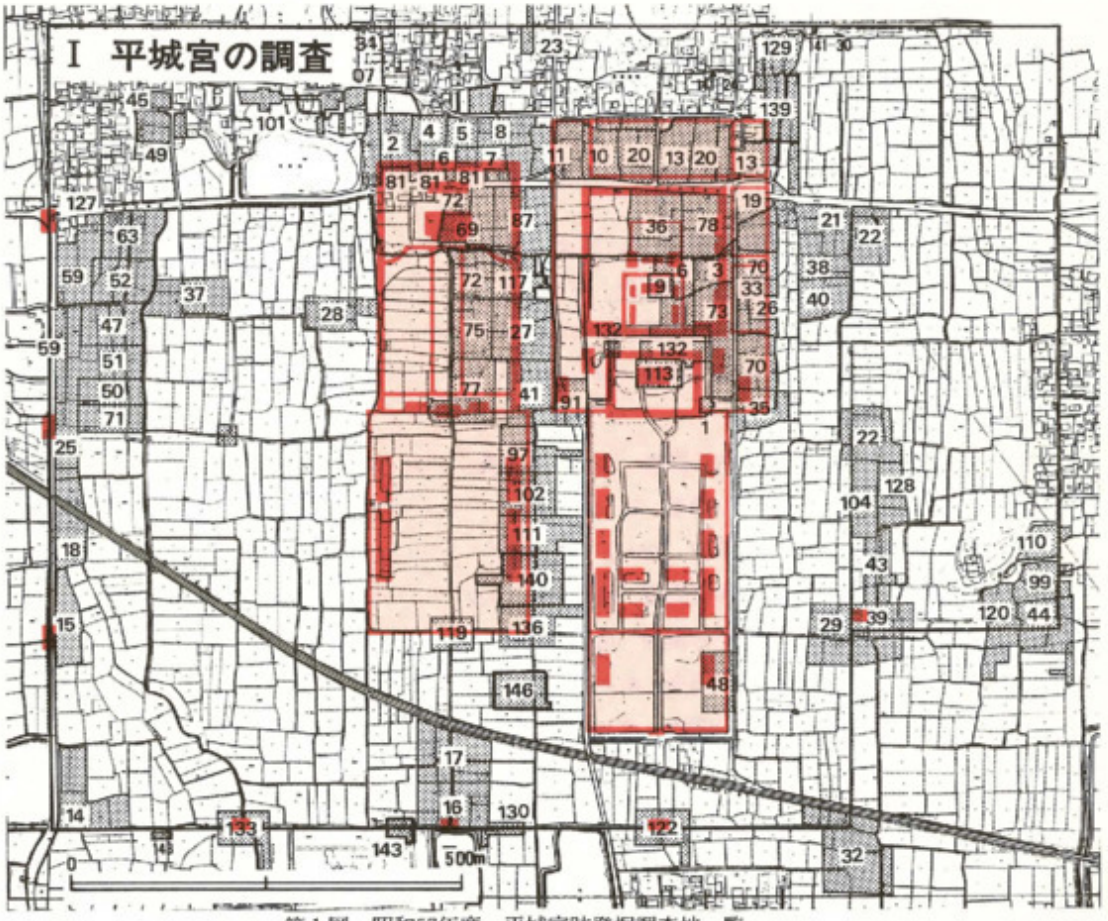
Ⅱ　平城京の調査　36

1　左京一条二坊・三坊の調査　第141－13次 …… 38
2　左京一条三坊二坪の調査　第141－2次 …… 39
3　左京一条二坊内の調査　第141－15・19次 …… 40
4　左京二条二坊十三坪の調査　第141次－5次 …… 41
5　左京二条三坊十六坪の調査　第141次－17次 …… 43
6　左京三条二坊七坪の調査　第141－35次 …… 45
7　左京三条三坊七坪の調査　第141－28次 …… 47
8　左京（外京）三条五坊四坪の調査　第141　7次 …… 48
9　左京四条二坊三坪の調査　第141－31次 …… 49
10　左京四条二坊十五坪（田村第推定地）の調査　第145次 …… 51
11　左京四条三坊十二坪の調査　第141－29次 …… 55
12　左京九条三坊三坪の調査　第148次 …… 56
13　九条大路および京南辺部の調査　第141－8次 …… 58
14　右京一条二坊六・十一坪の調査　第142次 …… 59
15　右京一条二坊三坪の調査　第141－14次 …… 60
16　右京三条一坊八坪の調査　第141－4次 …… 61
17　右京三条三坊五坪の調査　第141－26次 …… 62
18　右京六条三坊十坪の調査　第147次 …… 64

Ⅲ　京内寺院の調査

1　薬師寺中門の調査 …… 65
2　薬師寺旧境内の調査　第141－22次 …… 73
3　法華寺旧境内の調査　(1)　第141－1次 …… 74
4　〃　(2) …… 75
5　〃　(3)　第141－3次 …… 76
6　〃　(4)　第141－6次 …… 76
7　東大寺旧境内の調査　第141－32次 …… 77

未記載調査一覧 …… 78



第1図　昭和57年度　平城宮跡発掘調査地一覧

平城宮内調査地一覧

次　数	調　査　地　区	面積㎡	期　間	備　考	担当者
第139次	内裏北外郭東北部 6AAA・B	3800	'82 3.29～7.12		佐藤　信
第140次	推定第一次朝堂院地区 6ABH・I・U・V	5600	'82 8.19～ '83 1.13		龔淳一郎 岩永省三
第143次	南面大垣　朱雀門西 6ABY	810	'82 7.7～8.20		今泉隆雄
143補	〃　若犬養門西 6ACU	75	'83 2.14～2.21		松井　章
第146次	第一次朝集殿推定地 6ABJ・K・W・X	3100	'82 12.7～ '83 5.2		杉山　洋
第141 24次	第二次内裏北方官衙地区 6AAN	7	'82 11.4～11.8	今川徳治	清田善樹
第141 30	北面大垣　6AAA 佐紀町字水上1193－8	11.3	'82 12.14～ 12.16	佐紀町水利組合	金子裕之
第141 11	宮北辺　6AGU 佐紀町3535	13.5	'82 7.1	西口弘一	千田剛道
第141 34	〃　6AGU 佐紀町3046	5	'83 3.8	城田依則	森　郁夫
第141 38	〃　6AGU 山陵町古所33	10.2	'83 3.29	山本義晴	森　郁夫

1　内裏北外郭東北部の調査 第139次

調査区は平城宮内裏の東北部、内裏北外郭の東北隅をふくむ地区で、南は1963年の第13次調査区、北は1981年の第129次調査区に接する。第13次調査では内裏北外郭東部の官衙建物群とその東を限る築地を検出し（『平城宮発掘調査報告』Ⅶ）、また第129次調査では宮北面大垣のすぐ南側に整然と配置された官衙建物群と内裏東方を南流する幹線排水路SD 2700（東大溝）の北端部などを検出した（『昭和56年度平城宮跡発掘調査部発掘調査概報』）。なおSD 2700は古く1928・32年の奈良県技師岸熊吉氏による調査（『奈良県史蹟名勝天然記念物調査報告』12・13）や、南方の第21次調査（1964～65年）（『奈良国立文化財研究所年報』1965）でも確認している。今回の調査では、内裏北外郭東北隅およびSD2700を確認するとともに内裏北外郭東北部の性格を明らかにすることを目的とした。

なお、発掘面積は3,800㎡、調査期間は1982年3月29日から7月12日までである。

遺　構

調査地は内裏の占地する南へのびる丘陵の東斜面に位置し、宮造営にともない大規模な整地を行なっている。土層は旧耕土・床土（20～40cm）の下に灰褐色砂質土、黄灰褐色粘質土などがあり、現地表下40～120cmで黄褐色粘質土の地山となる。傾斜する地形に応じ、西方の地山を削って東方に盛土整地しており、主な遺構はこの整地土（黄灰褐色粘質土）および地山面で検出した。なお調査区西方には前方後円墳市庭古墳があり、整地土中には円筒埴輪片がふくまれていた。

今回検出した主な遺構は掘立柱建物8棟、築地2条、掘立柱塀3条、溝13条、土壙10基などである。遺構の重複関係はあまりみられなかったので、以下内裏北外郭部、北外郭北部、南北大溝SD 2700、SD 2700以東に地区を分けて各地区ごとの遺構の状況をみる。

内裏北外郭地区　南北築地SA 705と東西築地SA 10500の交わる内裏外郭東北隅を検出した。SA 705は築地基底部の版築（最高20cm）および西側の築地寄柱柱穴列を検出した。寄柱の柱間は10尺等間であるが、東側の寄柱柱穴列は削平の

ため検出できなかった。SA 10500は基礎地業の版築をわずかに残すのみで、寄柱のものと思われる柱穴が南北1個ずつみられた。これらの築地による区画の内側には宮造営後の整地層と思われる炭混り茶褐色土の層があり、軒瓦（6311 ― 6664D・F、6313― 6685、6225― 6663型式の組合せが多い）をふくむ多数の瓦や凝灰岩切石片が出土した。

宮造営前の遺構として、内裏外郭内からその北方にかけて8基の焼土壙SK10504～10511を検出した。これらの土壙は平面が長さ1.2m、幅0.8 mほどの隅丸長方形で、深さは15cm前後残る。粘土を貼った壁面は焼け、壁面に沿って炭・灰がつまっていた。土壙周辺部には土壙内よりかき出した炭・灰の薄層がみられ、その上を宮造営時の整地土が覆っていた。出土遺物は無く、用途・性格は不明である。なお同様の焼土壙を第13次・第129次調査でも検出している。

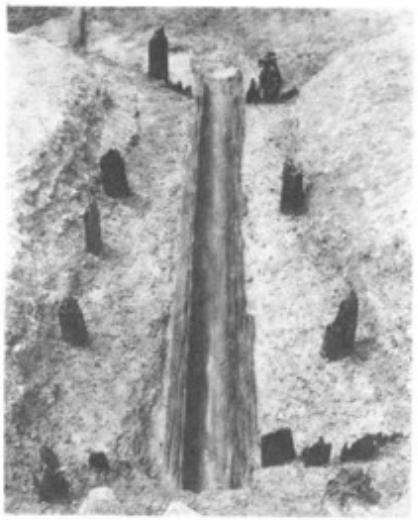
内裏北外郭北方　調査区北端部では、第129次調査で検出した官衙建物群の南を限る施設が明らかになった。東西溝SD 9797と、その北の掘立柱の棟門SB 9810A・Bであり、門SB 9810A・Bの棟通りの東延長上には後述のようにSD 2700に木樋暗渠施設SX 10560があることから、SB 9810A・Bをはさんで東西に走る築地が存在した可能性がある。築地をこの位置に想定すると、南の内裏外郭の北面築地心との距離は54m（180尺）を測ることになる。

この北端の遺構と南の内裏北外郭との間の遺構としては、まず宮造営前の遺構としてSK 10582・SX 10575・SX 10588・SD 10578がある。土壙SK 10582は平面が長さ1.5 m、幅0.8 mの隅丸長方形で、深さは25cmまで残る。底に7世紀後半の土師器杯を埋置しており、土壙墓と考えられる。SX 10575・SX 10588は宮造営に際して埋めたてられた旧地形の地山の凹み、SD 10578は東南に流れる斜行溝である。平城宮時代の遺構としては、SB 10565・SX 10580・SB 10590がある。SB 10565は桁行5間以上・梁間2間以上の南北棟の掘立柱建物で、柱間は桁行が7尺（北端のみ6尺）、梁間が6尺を測る。SX 10580は1本柱の掘立柱掘形で径40cmの柱根が遺存するが、性格は不詳である。SB 10590は桁行2間・梁間1間の小規模な東西棟掘立柱建物で、柱間は桁行6尺・梁間8尺。柱の

規模から、第129次調査で平安時代初め頃に比定した小規模建物群と一連のものと推定される。北端の東西溝SD 9797と内裏外郭北面築地 SA 10500の間には上記の遺構のほかには顕著な遺構はなく、広場的な空間 SH 10570であったと思われる。

南北大溝SD 2700　SD 2700は上幅2.0 m・底幅0.9 m・深さ 1.4 mの規模で、人頭大の玉石（三笠安山岩）を6～7段積んで護岸とした石組溝である。溝の築成順序としては、まず断面V字形の素掘りの溝（掘形）を掘り、最下層に礫混り灰色砂の堆積（約30cm）を経たのち、粘質土を裏ごめとしながら人頭大の玉石を積み上げ石組溝として完成している。SD 2700の堆積層は石組の底面から上がさらに5層に分けられ、その最下層から養老7～天平4（723～732）年、下から2層めに神亀3～天平9（726～737）年、4層めに天平宝字4～6（760～762）年の紀年木簡が出土しており、最上層からは「天応」（781～2年）の銘をもつ墨書土器が出土した。SD 2700が奈良時代を通じて順次埋まっていったことが知られるのである。このSD 2700の中に、北から SX 10560・SX 10556・SX10555・SX 10535の諸施設を検出した。SX 10560は全長5.6 m・外径0.5m・内径0.3 mの断面U字形の一木の木樋である。側部の上面には雇い柄の柄穴が南北3箇所あるので、上に蓋がかぶる暗渠であったことがわかる。木樋の東西のSD 2700岸

第2図　東大溝SD 2700　南から

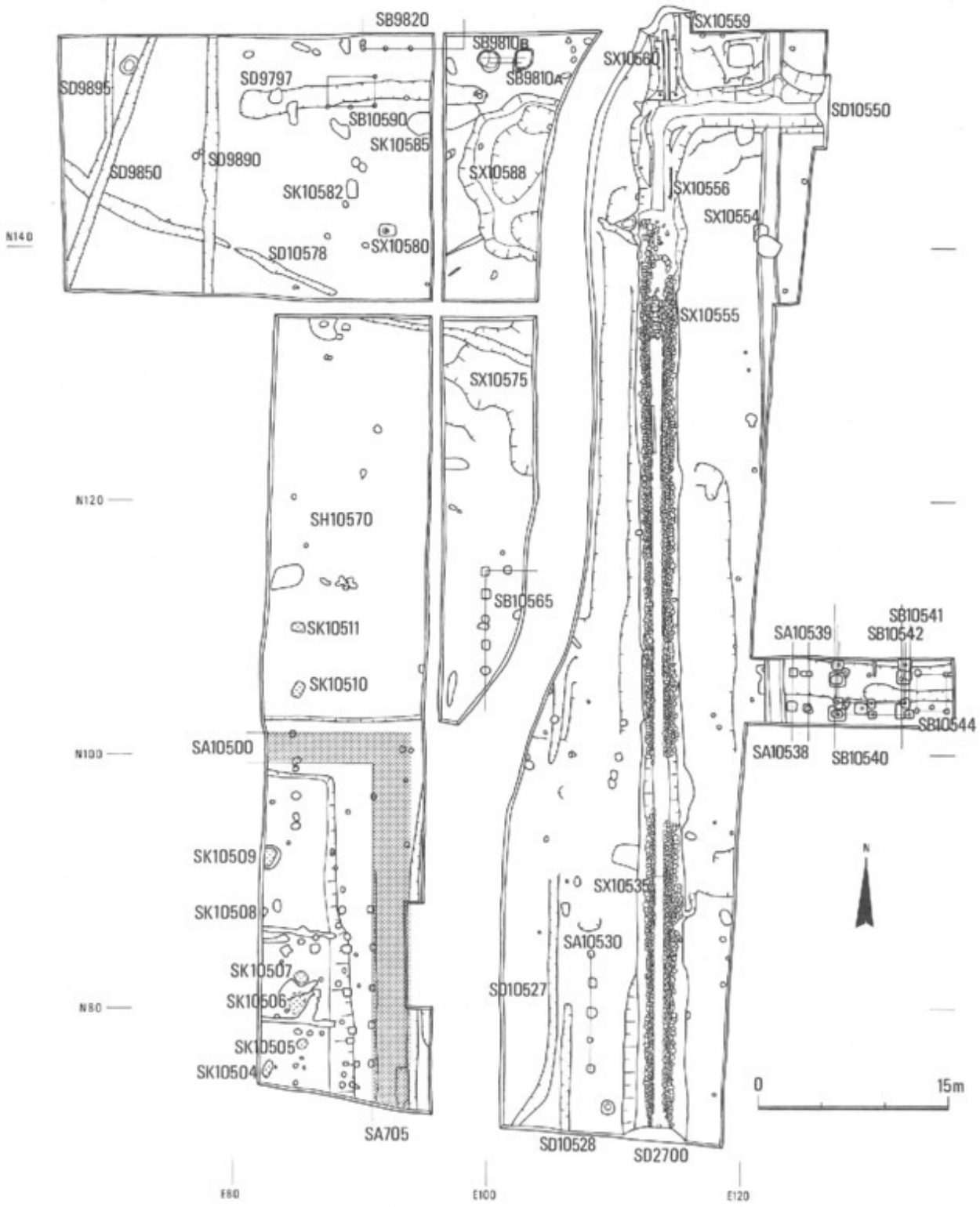


第3図　大樋SX 10560　北から

際には相対する4本の柱根が残っており、木樋暗渠の上にSD 2700を横断する何らかの構造物が設けられたことを推測できる。この木樋はSD 2700に土層が3層堆積したのちに築かれたものである。SX 10556は木杭を打ち込んで横板（残存最大長2.7 m・幅0.2m・厚さ0.15 m ）をとめた護岸施設で、SD 2700をわたる橋があった可能性もある。ただしこの遺構はSD 2700がほとんど埋まった時期のものである。SX 10555はSD 2700の溝底を一段低く下げて玉石を敷きつめた石敷施設。この部分のみ護岸石組の積み上げ方も技法が他と異なり、また底を下げていることから、すべての石組に先だってこの石敷施設が築かれたことになる。このSX 10555のすぐ北側でSD 2700の護岸石組は終わり、それ以北は北方の第129次調査区をふくめてSD 2700は素掘りのままである。SX 10535はSD2700が3層ほど埋まった時点で設けられた堰である。先端を尖らせた径5 cmの杭を7本東西に打ち込んでいた。この堰にせきとめられたように遺物が出土している。なお、今回発掘したSD 2700の範囲に、1928・32年の岸熊吉氏によるトレンチが3箇所みられた。調査区南部で護岸の玉石が抜き取られている部分はその一つである。

SD 2700以東　調査区北端でSD 2700の東に接続する東西溝SD 10550を検出した。SD 10550は上幅2.7 m・底幅1.0・深さ1.7mの素掘りの溝である。堆積はSD 2700とほぼ同じであり、下層の2層から天平元(729) 年・天平6 (734) 年の紀年木簡、最上層から「天応元年」（781年）の墨書土器が出土した。SD 10550の位置は北の官衙ブロックの南を限る東西溝SD 9797と軸をあわせており、またSD 2700 に並ぶ規模でもあって、この地区の区画割りを決める基本的な東西溝といえよう。

東に一部拡張した調査区においては、掘立柱建物4棟・掘立柱塀2条を検出した。SB 10540は一辺1 m強の方形柱掘形をもつ南北棟掘立柱建物で、柱間9尺で桁行3間以上。妻の部分は検出できなかったが、柱間9尺とすると梁間2間となる。このSB 10540の柱掘形を切って掘立柱建物 SB 10541 ・ SB 10542 が建てられている。SB 10541は桁行2間以上（柱間9尺）・梁間2間（柱間9.5尺）



第4図　内裏北外郭東北部発掘遺構図

の南北棟で、南妻を検出した。また SB 10542 も南北棟建物で、桁行 2 間以上（柱間10尺）・梁間 2 間（柱間 9 尺）であり、南妻を検出した。SB 10541・SB 10542の新旧関係は今回の調査区内では判明しない。SA 10538 は上記の南北棟建物の西を画する掘立柱南北塀で、柱間は 7 尺を測る。小規模な掘立柱建物 SB 10544と掘立柱南北塀 SA 10539 は奈良時代以降のものと考えられる。調査区北部の SX 10554 は単独の掘立柱掘形で、西方の SX 10580 と似ているが、同じく性格不詳である。

遺　物

SD 2700・SD 10550を中心として木簡・瓦・土器・木製品・金属製品が多数出土した。また内裏北外郭地区からは大量の瓦・土器が出土した。

木簡　計 258 点で、SD 2700から 194 点、SD 10550から63点、SD 10545 から 1 点出土している。SD 2700にSD 10550 がとりつく付近から特に多量の木簡が出土した。両溝からは養老 7（723）年から天平宝字 6（762）年までの紀年木簡が23点出土した。木簡の特徴としては、(1)紀年木簡が堆積の順にみられること、(2)隠伎国の荷札木簡が集中する（15点）こと、(3)新しく税目（正丁作物）や木簡製作法が知られる例があること、(4)削屑が少ないことなどがあげられる。以下主な釈文をかかげておく（1 ～ 4 は SD 2700、5 は SD 10550出土）。

1・　　歳後天恩母倉□□□(入カ)□

・「□□□□　次□□□□□」　　333 ×18×10　011 型式

2・駿河國志太郡正丁作物布乃里□□籠

・　　天平勝寶六年十月　　（148）×14× 3　019 型式

3　隠伎國海部郡佐吉郷日下マ止々□
調鮑六斤養老七年　　156 ×32× 7　031 型式

4・　参河國播豆郡大御米五斗

・□□□□　□マ(小カ)□鳴□□」（側面、天地逆）　　135 ×15× 4　031 型式

5　獺肝二具　　65 ×21× 5　032 型式

瓦　出土した軒瓦は軒丸瓦 252 点、軒平瓦 214 点の計 466 点におよぶ。そのうち 255 点が内裏北外郭地区から出土しており、平城宮軒瓦編年第Ⅱ期（養老 5 年

～天平17年）の6311 － 6664 D・F型式、6313 － 6685 型式、第Ⅲ期（天平17年～天平勝宝年間）の6225 － 6663型式のセットが多くを占める。SD 2700からは179点の軒瓦が出土した。また珍しい鳳凰紋のものをふくめ鬼瓦が3点出土している。なお内裏北外郭地区からは凝灰岩切片も多数出土した。

土器　SD 2700・SD 10550を中心に土師器・須恵器が大量に出土した。また円面硯・転用硯・土馬なども出土している。土器の中には約130点余の墨書土器がふくまれ、墨書銘としては「大膳」「内薬□」「官」「人給所」「□〔女嬬カ〕□厨」など官司関係のもの、「天応元年」「天応」といった年紀、「烏賁」「酒」「菓」などの物品名のほか、「供養」「上番」「真勝」などが認められる。なお内裏北外郭地区からは「中宮安　中宮」という墨書土器が出土した。

木製品　人形・削り掛け・刀形などの祭祀具、曲物・折敷・飾鋲付漆塗木櫃片などの容器類のほか、木彫面（表紙参照）や「㊞」の陰刻文をもつ木印、糸巻き・工具柄・杓子・横櫛・木針・桧扇などが主としてSD 2700から出土した。

金属製品　和同開珎16点・万年通宝4点・神功開宝13点、寛永通宝4点などの銭貨のほか、金銅製垂飾・金銅製飾鋲・帯金具（丸鞆3点・巡方3点）・鉄釘28点などがSD 2700を中心に出土している。

ま と め

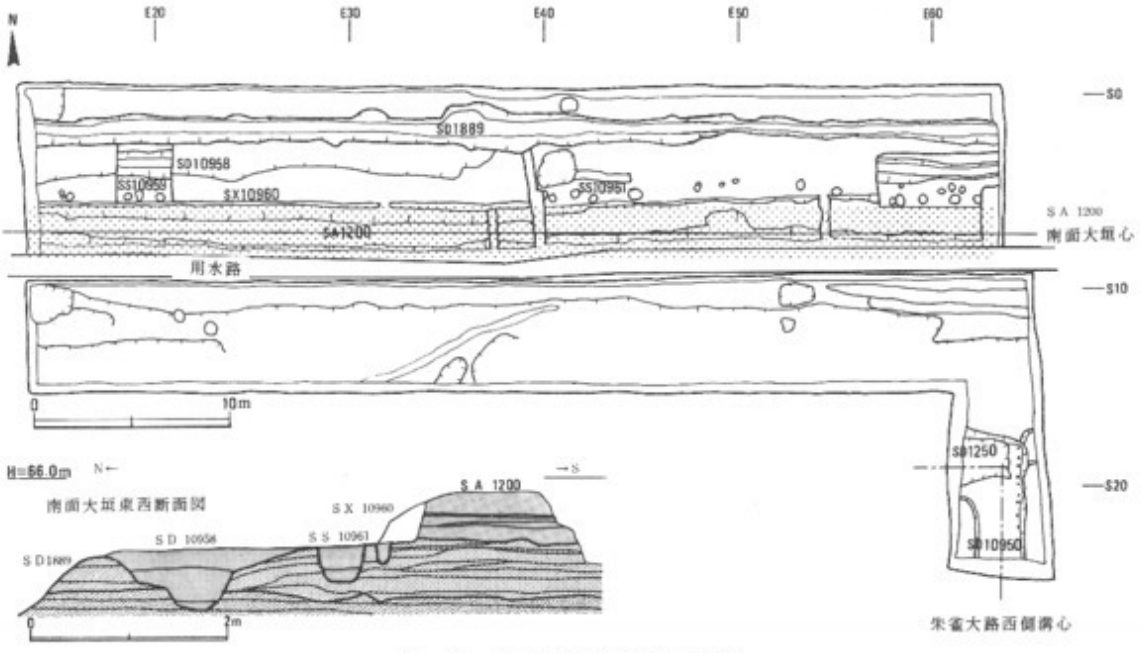
今回の調査により、内裏北外郭東北部の様相をかなり明確にすることができた。まず、築地に囲まれた内裏北外郭の東北隅を確認した。内裏外郭の北面築地の検出ははじめてであり、これにより内裏外郭の規模が明らかとなった。すなわち、内裏外郭の南北距離はほぼ1260 尺となることが判明したが、これは築地回廊に囲まれた内裏内郭の南北距離630尺の2倍にあたる。次に、平城宮東部の幹線排水路である南北大溝SD 2700を90mにわたって検出し、その規模と構造を明らかにするとともに豊富な遺物を得ることができた。また、新たにSD 2700につながる東西溝 SD 10550を検出し、この地区の区画割りに関して新知見を得た。そして、内裏北外郭の北、第129次調査で知られた官衙建物群との間が、南北180尺にわたる広場的空間 SH 10570であったことが明らかになった。

2　南面大垣―朱雀門西―の調査　第143次

調査地は朱雀門跡の西方の南面大垣である。これまで南面大垣については、第14・16・32・122・130・133次の6次の発掘調査を行ない、掘込地業を行った基底幅9尺の築地塀であることが明らかになっている。今回の調査地は、第16次調査区と一部重複してその西に当り、また朱雀門を中心として第130次調査区と東西対称の位置にある。この調査は、同地の南面大垣復原整備に先だつもので、大垣に関する詳しい資料を得ること、遺構の残存状況を確認し、さらに朱雀門近辺の条坊遺構を確かめることを目的とした。

調査区は、東西用水路を間にして北区・南区の二区を設けた。北区は南北9m東西50mで、大垣の検出のために設けた。南区は大垣の墻地の状況の把握のために、南北6m、東西52mのトレンチを設け、さらに二条大路北側溝と朱雀大路西側溝との交点の確認のために、トレンチ東端で南へ鍵の手にのびる東西5m、南北9mの拡張区を設定した。発掘総面積は約810㎡である。なお両区とも新しい客土によって埋めたてられているが、旧表土面では、北区が南区より50cm高い。

北区　旧表土下約40cmが奈良時代の遺構面である。南面大垣、大垣構築に伴なう堰板を据えるための溝・添柱列、東西溝2条などを検出した。南面大垣SA 1200は調査区南辺に東西50m分を検出した。調査区南辺に接して走る用水路によってその南辺が破壊され、幅1.5～2.0m、高さ50cmの基底部が遺存する。他の調査区の南面大垣とは異なって、掘込地業は確認できなかった。地山の上に、3～5層（厚さ30～50cm）の整地を行ない、その上に築地を築く。築地は厚い層（15～20cm）と薄い層（2～4cm）との互層の版築である。大垣基底部の北裾を東西に走る溝状遺構SX 10960、それに北接する東西柱列SS 10959・10961、さらにその北側に東西溝SD 10958を検出した。これらはいずれも整地層から掘りこまれ、築地の構築に伴なうものと考える。SX 10960は幅15～40cm、深さ20cmの溝状の遺構であるが、水流の痕跡はなくすぐに埋めもどされている。西半26mの範囲で検出し、東半では、後述する拡幅の築土におおわれているので断ち割り調査



第５図　南面大垣地区発掘遺構図

で確認した。SS 10959はSX 10960に北接する東西柱列で、調査区西端で4個東端で4個の計8個を検出した。柱穴は直径40cmほどの円形の掘形で、柱間間隔は不揃いで、50～150cm。SS 10959は、第130次調査でも検出した築地構築時の堰板を押える添柱列で、SX 10960は堰板を据えるための溝（堰板溝と仮称する）と考える。堰板溝の検出は今回が初めてである。築地南辺は全体にわたって破壊されているが、SX 10960が築地基底部の北辺に当るから、これまでの調査による基底幅9尺として、大垣築地の位置を復原できる。

東半24mの範囲では、基底部北裾に最大幅60cmの暗黄色粘土の堅固な築土を検出した。これはSX 10960・SS 10959をおおっているので、後に築地を拡幅した築土と考える。この築土の北に接して東西柱列SS 10961を検出したが、これは拡幅の際の堰板の添柱柱列であろう。SD 10958は、SX 10960から北1.8m（溝心々距離）に位置する東西溝で、調査区東端で6m、西端で3mの範囲で検出した。深さ50～60cmで、幅は一定せず0.8～1.4mである。水流の痕跡はみられず、築地築土と同類の土で埋めたてられており、築地の雨落溝とは考えにくい。その機能ははっきりしないが、同溝を境にして南・北で整地層に相違のみられることから、築地構築に伴なう溝状の掘りこみではないかと推定する。なお第130次調査でも、掘りこみ面が地山面であるという相違はあるが、ほぼ同位置に東西溝SD 9487を検出した。築地の寄柱は、従来の調査と同じく検出できなかった。

SD 1889はSX 10960の北3.2mに位置する東西溝で、幅1.2～1.4m、深さ40cmである。すでに、第16次調査でも検出し、SA 1200の北雨落溝であるとともに北にある宮内道路SF 1880の南側溝に当る溝である。

南区　旧表土下約80cmが奈良時代の遺構面である。調査区東端の拡張区に、T字状に接続する東西溝SD 1250と南北溝SD 10950を検出した。SD 1250は南面大垣中心から12mに位置する素掘りの溝で、二条大路北側溝で、かつ宮の南面外濠に当る。幅3.4m、深さは60cmでSD 10950よりも20cmほど深い。ただし、SD 10950より東へ伸びて朱雀大路を横断する部分は、幅が1.6mで狭く、深さも30cmと浅くなっている。この状況は東側の第130次調査でもほぼ同じである。SD

10950は朱雀大路西側溝に当る。当初幅2.5 m、深さ40cmの素掘り溝であるが、のちに東岸を杭と細枝のしがらみで護岸する。しがらみと岸の間には裏込めのために大量の瓦をつめこんでいた。SD 1250・SD 10950の堆積土は同じで4層にわかれ、第2層以下は水流による堆積土で、第1層は埋めたてた土である。ただSD 1250の朱雀大路の部分は埋土が異なり、他の部分と埋め戻しの時期が異なる。

第130次と今回の調査によって、平城京条坊制の基点となる二条大路北側溝と朱雀大路の東・西側溝の交点を確認し、朱雀大路の幅員が73.80 m（側溝心々距離）であることが明らかとなった。この数値は六条で確認した同幅員72 mより少し広いことになる。

南区の東西トレンチ部分は、大垣の壇地に当り、大垣に近い北辺部には3層の整地層があり、SD 1250に向って緩く傾斜する。

遺物は、瓦が主にSD 1889とSD 10950のしがらみ裏ごめから大量に出土した。軒瓦はほぼ9割が藤原宮式で、他の大垣地区の調査と同一の結果である。ほかにSD 1889から太刀の鞘尾金具、SD 10950から「阿波国麻殖郡川嶋郷少椿里」の庸米荷札など木簡2点や人形が出土した。

まとめ　北区では、南面大垣が、南辺を破壊されていたが、比較的良好な状況で遺存していた。今回新しく築地の構築に伴なう堰板溝を検出し、築地の北端を確認した。東半では後に築地幅を拡幅していることが明らかになった。さらに他の調査区とは異って、掘りこみ地業を行なわない場合もあることが明らかになった。

南区では、第130次調査とあわせて、朱雀大路の東・西側溝が二条大路を横断して二条大路北側溝に接続し、さらに同北側溝が規模を小さくしながらも、朱雀大路を横断していることが明らかになった。そして何よりも、条坊制の基点となる朱雀大路東・西側溝と二条大路北側溝の交点を確認し、朱雀大路の路肩が明らかになったことが、今回の調査の大きな成果である。

補足調査　南面大垣の整備に伴う事前調査。調査地は南面西門西の約80 mの大垣壇地。第133次調査検出の園池SG 10240の排水路の有無を探るため発掘。顕著な遺構はなく、SG 10240の排水路は南面西門西12mのSD 10250が唯一と判明。

3　推定第一次朝堂院地区の調査　第140次

調査経過・調査目的

推定第一次朝堂院地区（以下推定を略す）の調査は、昭和42年度以降継続的に進めている。昭和42度の第41次調査、昭和47年度の第77次調査では北面の様相を明らかにし、昭和51年度から53年度にかけての第97・102・111次の各調査では東第一堂・東第二堂北半部および東面を画す施設を検出、昭和54年度の第119次調査で南門および南面を画す施設を確認し、昭和56年度の第136次調査では、この地区の東南隅の様相を明らかにした。これらの調査結果から、第一次朝堂院の規模は東西が約214m（720尺）、南北が約284m（960尺）に復原できる。今回の調査は、第111・136次の両調査区にはさまれる約5600㎡の区画で、東第二堂の規模・東第二堂の南側の状況・第一次朝堂院と第二次朝堂院とにはさまれる地域の状況などを明らかにする目的で実施した。

地形および遺構の概要

本調査区は、南北にのびる奈良山丘陵の1小支丘の東南部にあたる。その支谷から下った谷筋の堆積土の上面に古墳時代の包含層が乗る。この包含層の上面が宮造営時の地山面で、東・南になだらかに傾斜する。調査区における高低差は東西方面向約40cm、南北方向で約30cmで、宮の造営に際し整地している。整地後の傾斜は整地土が大部分後世の削平を受けており不明である。すでに第111次調査までに大きくみて4層の整地土が確認されており、本調査区でもそれらに対応する整地土がある。下から順に第1次整地～第4次整地とする。第1次整地は灰色砂礫土を主体とし、東第二堂SB 8550の東に広がりをもつ。第2次整地は黄白色粘土を主体とする。第2次整地後に、第一次朝堂院の東を画す塀SA 5550を作る。SA 5550の西側では、第2次整地層上に第3次整地の暗灰色砂土を積み、その上面から東第二堂SB 8550の掘込地業をおこなう。第4次整地は第一次朝堂院廃絶後のもので、SB 8550とSA 5550の両基壇にはさまれる窪みを、瓦片を多量に含む暗灰色砂礫土で埋める。

本調査地区のうち南半部は後世に削平を受け第1次整地土が部分的に残るのみであり、上から順に旧耕土・床土・瓦器片を包含するバラス層があり、その下の古墳時代遺物包含層暗褐色土層上面で奈良時代の遺構を検出した。北半部でも削平を受けSA 5550の東側には第1次整地層のみが残る。

横出した遺構は、その重複や配置関係などから以下の9期に区分できる。

A期　第1次整地以前の時期。古墳時代の竪穴住居跡5棟・土拡2基・自然流路3条および宮造営直前の道路側溝1条がある。

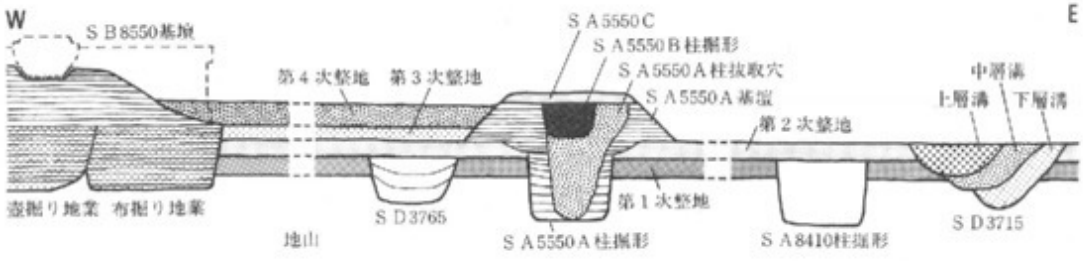
SB 10762・10798・10799 A・10799 B・10803は古墳時代の竪穴住居跡である。SB 10798は長辺6.6 m・短辺5.8 mの矩形で、南辺中央に貯蔵穴を有す。5世紀前半の土器・滑石製有孔円板が出土した。SB 10799 Aは長辺5 m・短辺3.8 mの矩形である。SB 10799 BはSB 10799 Aをほぼ同位置で建て替えたもの。長辺5 m・短辺4 mの矩形で、SB 10798と同時期。SB 10762とSB 10803は規模不明で土器も出土していないが、他の住居跡と近い時期であろう。

土拡SK 10811からは5世紀末～6世紀初頭の埴輪が多量に出土した。古墳の周溝の一部の可能性がある。土拡SK 10810からも埴輪が出土したが量は少ない

SD 10797・10804・10805は古墳時代の自然流路で、SD 10805からは多量の土師器が出土した。SD 1860は大和盆地を南北に貫く下ッ道の東側溝で、幅約0.6 m・深さ約0.1 m。

B期　第1次整地後から第2次整地以前の時期。第一次朝堂院区画の建設前にあたり、溝1条・塀1条がある。

南北溝SD 3765は、この時期における宮中央部の基幹排水路である。素掘りで幅約1.7 m・深さ0.7 m。3層の堆積が認められたが、遺物は出土しなかった。



第6図　調査区北部の整地土と遺構の関係　模式図

南北塀SA 8410は、SD 3765の東約17.5 mに位置する柱掘形列である。掘形の大きさは一様でなく、1辺1.0 ～ 1.6 mの矩形で、間隔は約3 m。26間分を検出した。柱掘形には柱痕跡がなく、掘形を掘った直後に、埋めもどしたと考える。

C期　第2次整地後から第3次整地以前の時期。第2次整地によってSD 3765・SA 8410を埋め、南北塀SA 5550 Aをつくり第一次朝堂院を区画し、東に南北溝SD 3715を掘削する。

南北塀SA 5550 Aは第一次朝堂院の東を画す掘立柱塀である。今回26間分を検出し、過去の調査分と合わせて全体の規模が96間と判明した。掘形の掘削は第2次整地層上面のSA 5550建設予定位置に、幅約2.2 m・深さ約0.2 mの浅い溝を南北に掘り、掘形を揃える目標としたのち行っている。掘形は長辺約1.6 m・短辺約1.4 mの矩形で、柱間は約2.96 m等間である。柱を建てたのち、幅約4.4 m・高さ約0.25 mの基壇を構築する。

南北溝SD 3715は、SA 5550の東約17.5 mにある。第一次朝堂院と第二次朝堂院の間を流れる基幹排水路で、SD 3765の付け替えである。2回の改修の跡があり上層・中層・下層の3時期に分れる。下層溝は、西肩が中層溝で切られ当初の溝幅は不明。深さ約0.6 m。出土した土器は平城宮Ⅲを下限とし、奈良時代中頃まで存続した。中層溝は、下層溝を埋めたのち、下層溝より約1.2 m西に偏して掘削する。西肩が上層溝で切られ当初の溝幅は不明。深さ約0.4 m。出土土器は平城宮Ⅴを下限とし、奈良時代末まで存続した。上層溝は、中層溝を埋めた後に掘削する。調査区北辺部では下層溝とほぼ同位置だが、それより以南では中層溝より約1 m西に偏す。幅約1.4 ～ 2.4 m。深さ約0.4 m。平城宮Ⅶの土器を出土し平安時代初頭まで存続する。

D期　第3次整地以降、奈良時代末までの時期である。D期の遺構はさらにD_1 ～ D_4の小期に区分できる。ただしこの期の遺構が集中する調査区南半は後世の削平を受けており、整地層を基準にした区分が不可能なため、遺構の重複関係や出土遺物に基づいて区分した。

D_1期　第一次朝堂院内郭に第3次整地をおこない、東第二堂SB 8550を築く。

東第二堂 SB 8550 は、礎石建ち東西廂付南北棟建物である。基壇を検出した。基壇積土が南北40m・東西14mの範囲に残っている。基壇の南辺部・西辺部では、後世の削平のため積土は残っていないが、基壇の範囲に掘込地業を行っているため、基壇規模は判明する。基壇積土上面で礎石据付跡を検出した。建物規模は今回桁行9間分検出し、第102・111次調査検出分を合わせて桁行21間・梁間4間と判明した。

基壇の復原規模は南北長約97m・東西幅約18m。残存高は約0.5 mである。基壇外装は残っておらず、地覆石に接して基壇の周囲にめぐらした礫敷 SX 10795 が一部に残る。礎石はすべて抜き取られていたが、礎石据付跡が12ケ所あり柱間寸尺がわかる。柱間寸法は、桁行約 4.4 m（15尺）等間、梁間約 3.2 m（11.0尺）等間で、桁行総長が92.4m（315尺）、梁行総長が12.9 m（44尺）となる。礎石据付け手順は、基壇築成がある程度まで進んだ段階で皿状に掘り込み、川原石を詰めて根固めし、その上に礎石を据える。

SD 8555はSB 8550建設の際の足場穴である。柱位置の四周・棟通り・軒先に1辺約40cmの方形の掘形がある。抜取穴はみられない。

この基壇の掘込地業部分は東西幅約19mで、第3次整地層上面より掘り込む。非常に複雑な工程をとっており、まず基壇の予定範囲のうち、その南端部を除いた範囲の東西両端に幅1～2 m・深さ約 0.4 ～ 0.5 mの南北方向の布掘りを行う。

この2本の布掘りの間に深さ約0.3 ～ 0.4 mの東西方向の布掘りを中間をとばして梯子状に行う。基壇南端部には、長さ約19m・幅約3 m・深さ約 0.4 mの東西方向の布掘りを行う。この布掘りと北接する布掘りとの間には、半月形に地山を掘り残した部分が東西に1つづつあるが、これはちょうど柱位置にあたる。第102・111次調査区では、東西方向の布掘りの幅が約2.6 m、布掘り間の間隔が約2mで一定していたが、本調査区では布掘りの配置間隔が北から4本目より乱れている。布掘り施工事の縄張りの誤りであったのか、特別の事情があったのか理由は明らかでない。さらに、その東西方向の布掘りの間にも、その両脇に側柱と入側柱2本分をカバーする坪掘りを行っている。坪掘りの東西長は4.7 ～ 5.4

mあり、南北幅は最小のもので1.8 m、最大のもので3.1 m、深さ約0.4 mである。坪掘り地業・布掘り地業の位置と基壇上面の柱位置とは一致しない。

SX 9015は、SB 8550の掘込地業の西肩から西約0.2 mに位置する南北方向の杭列で、間隔が大小交互に反復し、基壇版築を行う時の堰板止めと考えられる。

東西溝 SD 10790と斜行溝10800は、SB 8550の掘込地業部分から出る溝で、掘込工事に際して排水用に掘った溝である。いずれも軒先の足場穴より古く、掘込地業完了後すぐに埋めもどした。SD 10790は幅約0.9 m・深さ約0.9 mで、SA 5550 Aの基壇を切り、SD 3715下層溝に注ぐ。溝底はSB 8550の掘込地業の底面より約0.4 m深い。SD 10800は幅約0.6m・深さ約0.2 mで、掘込地業の東南隅からはじまり、SA 5550 Aの西雨落溝SD 8392におよぶ。SD 10790から平城宮Ⅰないし Ⅱの土器が出土し、SD 10800から軒丸瓦 6303B 型式が出土した。

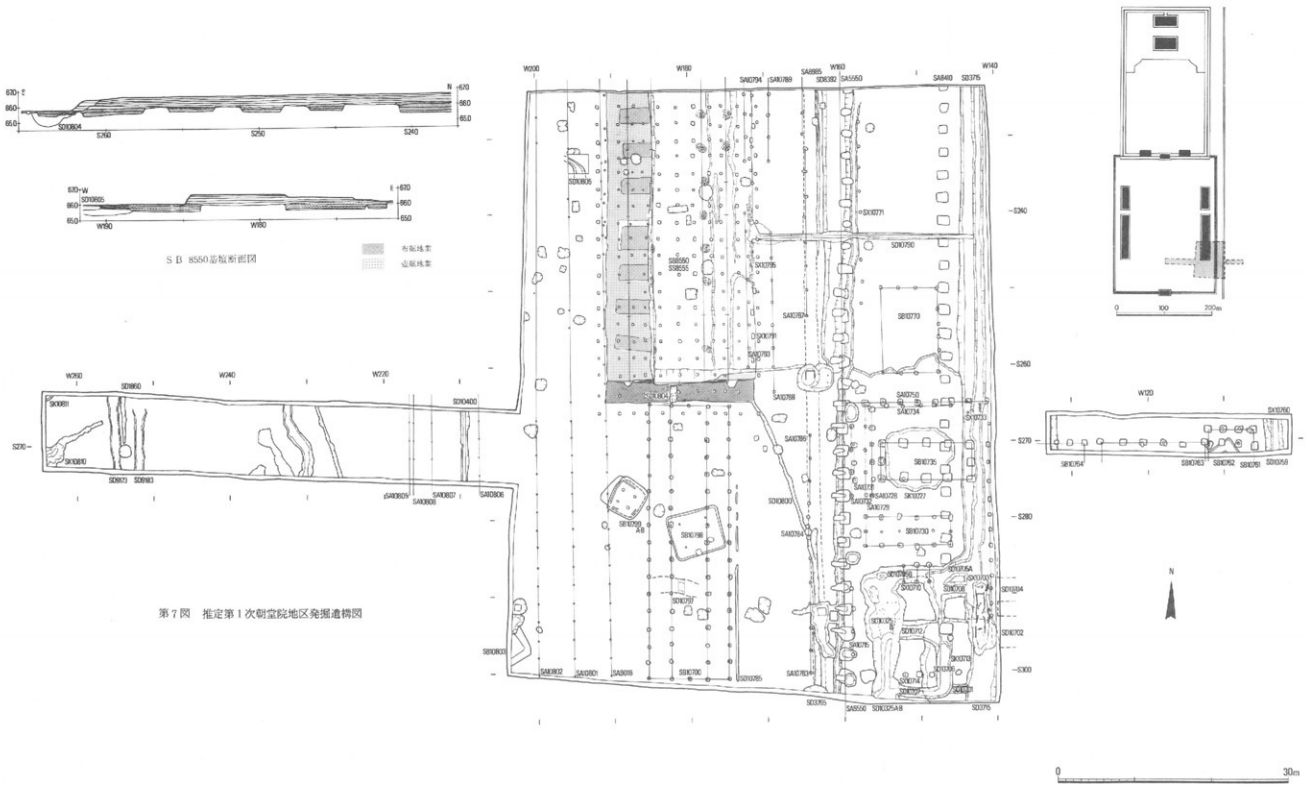
南北溝 SD 8392はSA 5550 Aの西側雨落溝で、第3次整地面にあり、幅約0.6 m・深さ約0.2 mである。

東西溝 SD 10701は、SD 3715から西に分岐する。幅約1.2 m・深さ約0.4 m掘削後すぐ埋めもどす。埋土より平城宮Ⅱを下限とする土器が出土した（第8図1） SD 10707に切られ西方での流路は不明。

D_2期 東第二堂に変化はないが、東第二堂の南に仮設建物を建て朝堂院を画する塀に改修を加える。また、東外郭に官衙を設ける。

SA 5550を改修する。SA 5550 Aの柱を基壇上面より抜き取り、ほぼ同位置に掘立柱塀SA 5550 Bをつくる。SA 5550 Bは2.96 m等間であるが、柱掘形が1辺約0.7 m・深さ約0.6 mと小さく仮設的なものと考える。SA 5550 Aの抜取穴より平城宮Ⅲの土器が出土したことからみて、SA 5550 AからSA 5550 Bへの改修は奈良時代中頃である。

SB 10700はSB 8550の基壇のすぐ南に接して建つ掘立柱の二面廂付南北棟建物である。桁行16間約2.2 m（7.5尺）等間、梁間4間約2.6 m（9尺）等間で、SB 8550と東側柱筋を揃える。平面規模にくらべて柱掘形が極端に小さいことか



第７図　推定第１次朝堂院地区発掘遺構図

らみて仮設建物と考える。SD 10785 は SB 10700 の東雨落溝で、幅約 0.3 m、深さ約 0.1 m。SB 10700 の柱掘形から平城宮Ⅲの土器が出土し、SD 10785 からは平城宮第Ⅳ期の軒平瓦 6801 A型式が出土した。したがって、SB 10700 の年代は、奈良時代中頃を上限とし後半に及ぶ時期に収まる。

SA 9016 ・ 10801 ・ 10802 は、SB 8550 ・ SB 10700 の西側にある、南北方向の杭列である。約 4.6 m間隔で 3 条が平行して並び、柱筋を揃える。柱間は約 2.4 m（8 尺）。南端は SB 10700 の南妻とほぼ揃い、北端は未確認だが第 102 次調査区にものび、南北長は 170 m以上となる。平安時代の絵巻物をもとに考えると、宮中での競馬や騎射の行事に用いた馬場の柵の可能性がある。

SA 10806 ・ 10807 ・ 10808 ・ 10809 は SA 10802 のさらに西に位置する南北方向の杭列である。平行して並び柱筋をほぼ揃えるが、杭列間の間隔は不揃いである。SA 9016 ・ 10801 ・ 10802 とほぼ同じ機能をはたしたと考えるが、同時に用いたかどうかは、一部を検出したのみであり断定できない。

第一次朝堂院東外郭には、掘立柱建物 1 棟・掘立柱塀 2 条を設け、SD 3715 から西に屈曲した枝溝を掘削する（第 8 図 2）。SD 3715 の東側にも掘立柱建物を 3 棟つくる。

SB 10735 は掘立柱の東西棟建物で、桁行 4 間、約 2.95 m（10 尺）等間・梁間 2 間約 2.4 m（8 尺）等間である。東妻の柱掘形が SD 3715 中層溝に切られ、SD 3715 下層溝と併存する。したがってD期以前に遡る可能性もある。

SA 10728 は SB 10735 の西約 1.2 m（4 尺）にある掘立柱の南北塀で 5 間分検出した。柱間は約 2.2 m（7.5 尺）等間。S A 10731 は SA 10782 の西約 2.4 m（8 尺）にある掘立柱の南北塀で 2 間分検出した。柱間は SA 10728 と同じ。

SD 10705 は SD 3715 から西に枝分れする東西溝で、幅約 2 ～ 3 m・深さ約 0.5 m。上下層 2 層に分れ、下層溝 SD 10705 A は出土土器が平城宮Ⅲを下限とすることから本期に属す。

SD 10706 は SD 10705 が南へ折れ曲った南北溝で、北半は幅約 1.2 m ・深さ約 0.5 m、南半の幅約 2.2 m ・深さ約 0.9 m。溝の堆積は 3 層に分かれ平城宮第

Ⅲ期を下限とする軒瓦（6225C・6691A）が出土。

SD 10707はSD 10706がさらに西へ折れた東西溝で、幅約1.8 m・深さ約0.5 m。出土土器は平城宮Ⅲを下限とする。

SD 10325 Aは第136次調査ではじめて検出した南北溝で、幅約3～4 m・深さ約0.7 m。第136次調査域では平城宮Ⅳ・Vの土器を出土し、SD 3715中層溝を切るので、この溝の年代を奈良時代末と考えたが、上記の3条の溝との関連から平城宮Ⅲの時期にはすでに存在していたと考える。

SD 10702は幅約4 m・深さ約0.6 mの東西溝で、発掘区東壁でその存在を確認した。遺物は出土していないが、埋土がSD 3715中層溝に併存する南北塀SA 10726に切られ、溝底の高さがSD 3715下層溝と等しいため、SD 3715下層溝と併存すると考える。

SX 10714はSD 10707の北側にあり、柱掘形が3基、約1.8 m（6尺）間隔で並ぶ。位置がSB 10375の西から2間目の正面にあたり、SD 10707にかかる橋の可能性もあるが、南岸には見合う柱穴がない。

D期の期間中にSD 10705 Aを埋めやや南の位置にSD 10708を設け付け替える（第8図3）。SD 10708は幅約2 m・深さ約0.3 mの東西溝で、SD 10705 Aの埋土を切る。SD 10704はSD 3715をはさんでSD 10708の対岸にある東西溝で幅約3 m・深さ約0.4 m。発掘区東壁でその存在を確認した。遺物は出土していないが、埋土がSD 3715中層溝に併存する南北塀SA 10726に切られ、溝底の高さがSD 3715下層溝と等しいのでSD 3715下層溝に併存すると考える。

SD 3715とこれら2本の東西溝との交点のやや南には、溝底を横断して約1 mの堰SX 10703を置く。堰から南6 mの区間の両岸には堰と同幅の護岸用側壁を設ける。

SD 3715東方のSB 10761は掘立柱建物で、総柱ないし北廂付になる。東西方向3間、柱間約1.9 m（6.5尺）等間。南北方向の柱間は約1.8 m（6尺）。

SB 10763は掘立柱の東西棟建物で、桁行5間約2.7 m（9尺）等間。

SB 10764は掘立柱建物の北側ないし北妻で、柱間は約1.8 m（6尺）。

SB 10763 ・ SB 10764 は SB 10735 と柱筋を揃え同時期であろう。SB10761 は SB 10763 に切られていることからみて、D期以前となる。

SD 10759 は素掘りの南北溝で、幅 3.2 m以上、深さ約 0.3 m。西岸には抗列 SX 10760 を置く。第91次調査で検出した南北道路SF 8950（第二次内裏西外郭の南門に通ず）の西側溝SD 8947 は、この溝の西方約 4 mに位置しており、SD10759 がSF 8950の東側溝の可能性がある。

D_3期　東第二堂に変化はないが、朝堂院を画す塀を改修する。東外郭官衙の北を画す塀を作り、官衙内を改造する（第 8 図 4）。

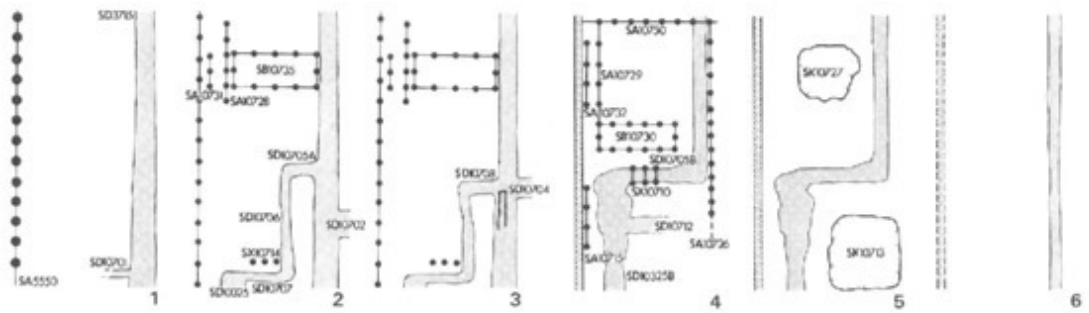
SA 5550を再度改修する。SA 5550 Bの柱を抜き取り、築地SA 5550 Cを作る SA 5550 Cの盛土は、本調査区では厚さ 5 cmほど残るにすぎない。

SD 9173は第 119次調査で検出した南北溝で、朝堂院南門SB 9200の基壇東側に達す。幅 1.5 m・深さ約 0.1 m。

SD 10400 は第 136次調査で検出した南北溝で掘削年代は不明である。第一次大極殿院の東隣SB 7802の東妻と位置がほぼ一致し、C期ないしD期に遡る可能性もあるが、平城宮Ⅳ・Ⅴの土器を出土したことからみてD期に埋めている。

朝堂院外郭の SA 10750 は掘立柱の東西塀で 8 間分検出した。柱間は約 2.2 m（7.5 尺）等間。SB 8550の基壇南縁とほぼ同位置にある。西端はSA 5550に接し、東端はSD 3715東岸に及ぶ。柱掘形がSD 3715下層溝の埋土を切り、上層溝に切られているので、中層溝と併存する。

SX 10733はSA 10750 と SD 3715中層溝との交点のすぐ南に接して作られた



第 8 図　第一次朝堂院東外郭官衙変遷図

施設で、東西両岸に長さ 1.5 mにわたり凝灰岩を並べる。石列の間隔は 0.8 m。暗渠の可能性がある。

SB 10730 は掘立柱の東西棟建物。桁行 5 間約 2.2 m（7.5 尺）等間、梁間 2 間 1.9 m（6.5 尺）等間で棟通りに床束があって床張り。SA 10750 と柱筋を揃え、約15m（50 尺）離れる。

SA 10729 は掘立柱の南北塀で、SA 10750 と SA 10730 をつなぐ。5 間あり柱間は約 3 m（10 尺）等間。

SA 10715 ・ SA 10732 は SA 5550のすぐ東にある掘立柱の南北塀で、ともに 3 間分あり中間 4 間分があく。柱間は約 3 m（10尺）等間。SA 5550 A の柱抜取穴を切り、SA 5550 C と併存する。

SA 10726 は SD 3715中層構の東岸にある掘立柱の南北塀で北端は SA 10750 に接す。14間分検出したが、南端は土拡 SK 10713 に切られ不明。柱間は不揃いで約 1.6 ～ 2.6 m。

SD 10705 B は SD 10705 A を西方に延長した素掘りの東西溝で、SD 3715中層と一連のもの。幅約 2.5 m・深さ約 0.4 m。平城宮Ⅳ・Ⅴの土器と平城宮第Ⅲ期の軒瓦（6225 A ・ 6663 C ・ 6732 C）が出土。

SX 10710 は SD 10705 B にかかる橋で、桁行 1 間・梁間 2 間・柱間は桁行が約 2.1 m、梁間が約 1.7 m。橋の中心は SB 10730 の東から 3 本目の柱筋に揃え SA 5550と SA 10726 の中間に位置する。柱痕跡より平城宮第Ⅲ期の軒瓦(6133 ・ 6282 Bb)が出土。

SD 10325 B は SD 10325 A を北に延長した素掘りの南北溝で、幅約 2.4 ～ 5 m・深さ約 0.5 m。4 層に分れる。平城宮Ⅴを下限とする土器が出土。

SD 10712 は素掘りの東西溝で、東端は土拡 SK 10713 に切られ不明。幅約2.4 m・深さ 0.4 m。掘削後短期間で埋めもどした。埋土より平城宮Ⅳ・Ⅴの土器が出土した。

SD 3715中層溝は、D_3・D_4期には SD 10705 との交点以南には及ばず SD10705B → SD 10325 B への流れがこの期の水路本流になる。第 136 次調査区では、S D

10325 Bが再び東へ曲がりSD 3715中層溝の埋土を切ってもとへもどる。

D_4期　朝堂院内郭に変化はなく、東外郭に大きな土拡を掘る（第8図5）。宮の廃絶に近い時期。

SK 10727は隅丸方形の土拡で、東西約9 m、南北約8 m、深さ約0.3 m。埋土より平城宮Ⅳ・Vの土器が多量に出土した。

SK 10713は隅丸方形の土拡で、東西約10m、南北約10m、深さ約0.3 m。SD 3715 中層溝・SD 10712の埋土を切り、SD 3715上層溝に切られる。埋土は上下2層あり、下層出土土器は平城宮Ⅳを下限とし、上層出土土器は平城宮Vを下限とする。これらの土拡は採土のために掘ったもので、SK 10713の掘削はD期に上る可能性もあるが、ともに奈良時代末に埋められている。

E期　SB 8550・SA 5550 の存否は不明であるが、存在しない可能性がある。SD 9173の東約2.5 mにSD 9183を掘削し、東外郭に建物SB 10770 を作り、SD 3715上層溝を掘削する。

SD 9183は等119次調査で検出した南北溝で、幅約1.2 m・深さ約0.1 m。

SB 10770は桁行5間・梁行3間の南北棟建物で、北・東・南・の3面の掘立柱のみ検出した。身舎の柱位置を直接に示す痕跡はないが、礎石建ちと考える。身舎は桁行柱間約1.8 m（6尺）、梁間柱間約2.2 m（7.5尺）と考えられるのに対し、廂の出は大きく約2.8 m（9.5尺）。

F期　朝堂院廃絶から第4次整地がなされるまでの時期。

SX 10791は、SB 8550の掘込地業の東肩上に並ぶ円形ないし隅丸長方形の土拡群である。埋土に炭化物がまじり、第111次調査で検出した鋳造工房に関係する遺構と考える。

SA 10793・SA 10794はSX 10795 の西約0.6 mにある掘立柱の南北塀で、柱間寸法は不揃いである。SA 10788・SA 10789はSA 10793・SA 10794 の東約3 mにある。柱立柱の南北塀でSA 10793・SA 10794 と柱筋を揃える。ともに第111次調査では検出していない。これらの塀は柱掘形の埋土中に炭化物がまじりSX 10791と併存すると考えられる。

G期　SB 8550とSA 5550間の窪みを、大量の瓦片・礫を含む暗灰砂質土で埋む。

時期不明　SA 10783・SA 10786はSA 5550の西約4.2～4.5 m にある南北塀SA 10786が3間分、SA 10783が5間分あり、中間が約7 m（24尺）あく。ともに約3 m（10尺）等間。東外郭のSA 10715・SA 10732にともない中央のあいている部分が東外郭から内郭への通路となる可能性がある。SA 10784は、SA 10783・SA 10786の間にあり、目隠塀の可能性がある。

SA 10787はSA 5550の西約4.5～4.6 mある南北塀で7間分ある。柱間は約3.1 m（10.5尺）等間。SA 8985はSA 5550の西約5～5.2 mにある掘立柱の南北塀で、第111次調査の検出分と合わせて10間分となる。柱間は不揃い。これら2条の塀はSA 5550と併存しC～D期に属す可能性がある。

SX 10771はSA 5550の東約2.3 mにある柱穴列で、SA 5550の柱位置の中間に柱掘形がある。SA 5550建設の際の足場SS 10771の可能性がある。

遺　物

奈良時代の遺物は木簡・瓦塼類・土器・木製品などがある。そのほか古墳時代土器・埴輪など宮造営前に属する遺物や、平安時代に降る遺物もある。

木簡　総数757点出土した。内訳はSD 3715 下層溝より417 点、SD 10705 Aより1点、SD 10706より39点、SD 10325 Bより300点である。以下に主な釈文を掲げる。2は弾正台関係のものである。第136 次調査ではSD 3715・SD 10325より「弾正」「刑省」と記した墨書土器や弾正台の官人名と考えられる木簡が出土しており、弾正台の位置を考える資料となる。

1.　民部省移　　（SD 3715）

2.　（表）山　京橋造不状

□□　少疏倉人

〔巨勢朝ヵ〕
□□□□臣

（裏）　□□□□　□□□

又十二日宣受史生土

十九日弾正台□宣□□

東宮南道　　表裏大地逆

□　　SD 10706

3. （表）　西大宮正月佛　御供養雑物買□銭

（裏）　一貫五百六十文油五升□□　正月十六日添石前

4. 中衛府

5. 衛門府

6. 左兵衛府奏　□□□

□□　　□□　　（SD 10325）

瓦塼類　内訳は軒丸瓦（353点）、軒平瓦（194点）、丸・平瓦（1500袋）、鬼瓦（4点）、熨斗瓦（2点）、面戸瓦（14点）、塼（9点）である。軒瓦の大半は、朝堂院内郭ではSA 5550とSB 8550の空閑地を埋める第4次整地層、外郭ではSD 3715と枝溝群から出土した。時期別の内訳は第8図の通り。

内郭では第Ⅱ期の瓦が多いが、軒平瓦は少なく、軒丸瓦6313　型式が93点あるそのほか第Ⅰ期の6284　（16点）－6664　（D・F以外、32点）の組み合わせ、第Ⅲ期の6225　（33点）－6663　（10点）　の組み合わせが多い。外郭では第Ⅰ期の6284　（30点）－6664（D・F以外、19点）の組み合わせ、第Ⅲ期の6225（60－6663　（28点）の組合わせが多く、第Ⅱ期の軒丸瓦6311　（44点）・6304（12点）も多い。

土器・土製品　奈良時代の土器は、朝堂院内郭からほとんど出土しない。これはこの地区の性格と関連しよう。SD 3715と枝溝群からは多量に出土した。東外郭官衙からの廃棄物を含むのであろう。墨書土器はSD 10705 A・SK 10713などから計11点出土。判読できるものは5点。「是」「足」など多数の字を記したもの1点、他は「大」「方」「十」など一字を記す。蹄脚硯はSD 3715と枝溝群およびSK 10713から計17点出土。

古墳時代の土器は、SB 10798・SB 10799・SD 10805より多く出土し、多

少の幅はあるものの平城宮第二次朝堂院東朝集殿下層の古墳時代溝上層出土土器の時期に収まる。須恵器は含まないが、他地域ですでに須恵器の出現している時期にあたる。

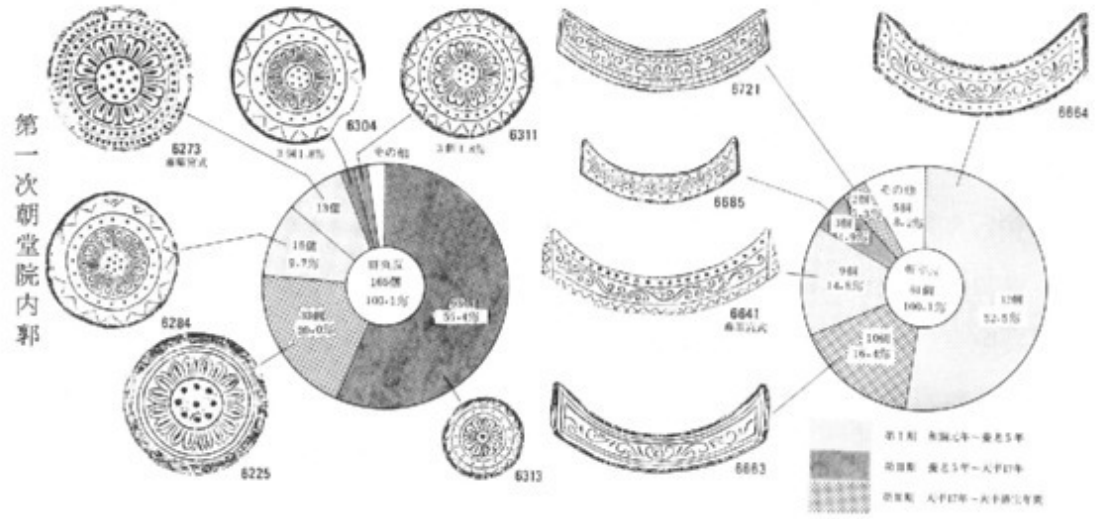
木製品　木製品はSD 10325 Bより木箱の身・蓋各1、皿2、人形1が出土。

ま と め

今回の調査の成果と問題点は以下の通り。

①　第一次朝堂院東第二堂の規模が判明した。

②　東第二堂の南側には基壇建物がなく、第一次朝堂院には長大な南北棟を東西に各2堂合計4堂配置していることが確定した。これは難波宮・藤原宮・平城宮第二次・長岡宮・平安宮の各朝堂院が、朝堂を8堂ないし12堂配置するのと異なる。平城宮の第1次朝堂院・第二次朝堂院が併存するとすれば、東側に12堂を有す1院・西側に4堂を有す1院が併存することになり、平安宮の朝堂院・豊楽院の配置と似る。したがって第一次朝堂院の性格を平安宮における豊楽院相当のものとする見解も成立し得る。しかしこの問題については第二次朝堂院地区が未調査で同地区の成立年代が確実でないため、今後の同地区の調査成果と合わせて検討することが必要である。



第9図　第一次朝堂院地区の軒瓦

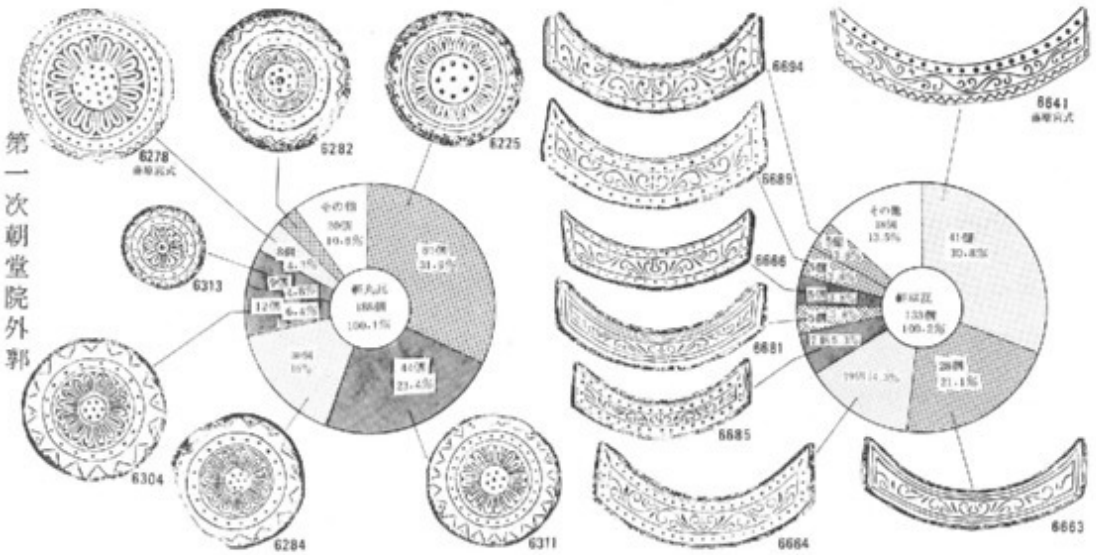
③　東第二堂の南に、第二堂と東側柱筋を揃える掘立柱の仮設建物を検出し、仮設建物および第二堂の西側で3条の杭列を南北170m以上検出した。これらの遺構は、平安宮の事例を参考にすると、宮中で催された競馬や騎射の行事に用いられた施設の可能性がある。

④　第一次朝堂院東外郭にあらたに官衙域を検出した。この官衙の性格については今後の検討を要するが、SD 3715・枝溝群出土の木簡・墨書土器に弾正台関係のものがあり、この官衙の性格を考える上で重要である。

⑤　5世紀前半代の古墳時代集落の存在が明らかとなったが、範囲は確認できなかった。

今回の調査で第一次朝堂院地区東半部の調査は終了し、この地区の全貌をほぼ明らかにすることができた。従来からの調査成果の一部に再検討を加えたのちに奈良時代におけるこの地区全体の変遷を概観しよう。

第119次調査では、朝堂院の南面を画す塀について、SA 9199→SA 9201A・SA 9202A→SA 9201B・SA 9202B→築地塀の変遷を考えた。しかしSA9199は第136次調査の成果からみて、SA 9201Aにともなう布掘地業、SA 9201A・SA 9202AはSA 8410と一連で柱痕跡のない柱掘形列と考えた方がよい。第119



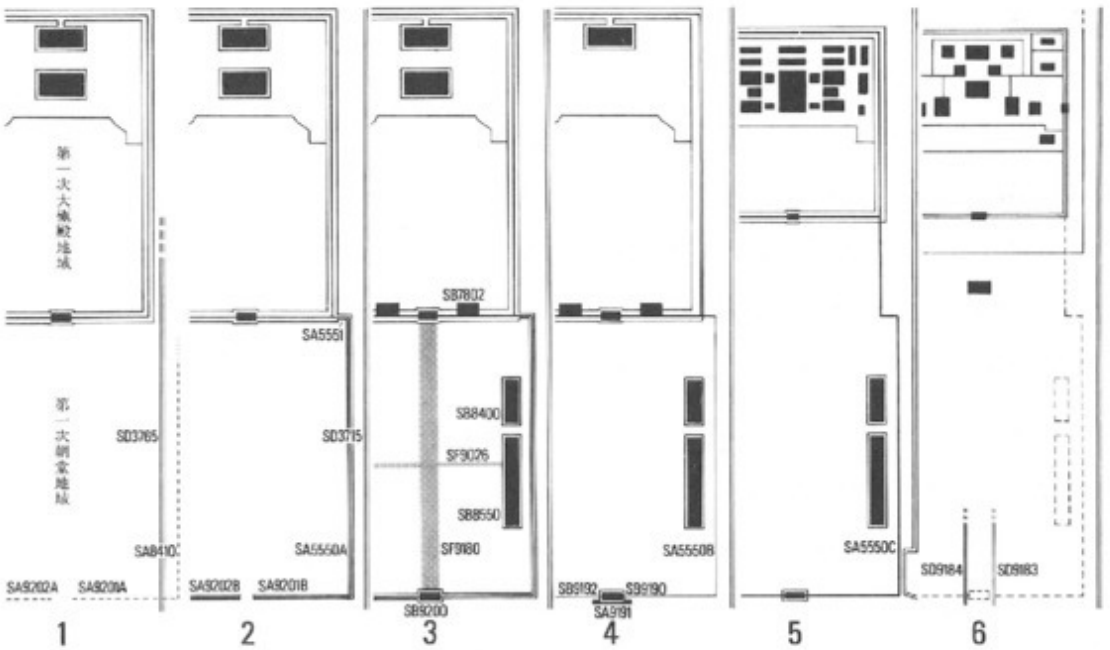
次調査では、朝堂院南門SB 9200の掘込地業下で検出した柱穴をSA 9201 A・SA 9202 Aのものとしたが、これには柱抜取痕跡があるため、SA 9201 B・SA 9202Bのものとした方がよい。そう考えると当初SA 9201 B・SA 9202 Bの間に閉塞施設がなく、後にSA 9201 Bの西2間分、SA 9202 Bの東2間分を撤去してSB 9200を建てたことになる。

A期　和銅創建当初の短期間の時期。第97・111次調査区西寄りに細い東西溝4条がある。造営に先立つ地割のための溝の可能性がある。

B期　（第10図1）　第一次整地をおこない最初の造営が始まった時期。第一次朝堂院区画の建設前にあたり、第一次大極殿地域の第Ⅰ－1期に相当する。基幹排水路としてSD 3765がある。この溝は、第一次調堂院の中軸線の東約102m、（348尺、大 290尺）にある。朝堂院の東面・南面を画す施設としてSA 8410・SA 9201 A・SA 9202 Aの柱掘形を掘削するが、いずれも柱痕跡がなく造営途時で埋めもどした。なおSA 8410の北限は未確認であるが、第一次朝堂院の中軸線より東へ約120 m（408尺、大340尺）離れた位置にあり、朝堂院の幅を約240 m（816尺、大680尺）とすれば藤原宮朝堂院の幅よりやや大きい。

C期（第10図2）　第二次整地をおこない、SD3765・SA 8410・SA 9202 A・SA 9202 Aを埋めたて、推定第一次調堂院の区画（SA 5551・SA 5550・SA 9201 B・SA 9202 B)を作り、基幹排水路SD 3715を掘削する。朝堂建物はまだ作っていない。朝堂院区画の規模は東西約214 m（720尺、大600尺）・南北約284 m（960尺、大800尺）である。東面のSA 5550の柱間は約2.96 m（10尺）等間で96間ある。SD 3715は、朝堂院の中軸練の東約124.5 m（420尺、大350尺）にある。南面のSA 9201 BとSA 9202 Bの間には15mの間隔があき閉塞施設は検出していない。

D_1期（第10図3）　第3次整地後に東第一堂（SB 8400）・東第二堂（SB8550）を造営する。SA 9201 B・SA 9202 Bの間に朝堂院南門SB 9200を造営し第一次大極殿院に東楼SB 7802を増築したのもこの時期と考える。第一次朝堂院地区が完成した時期で、第一次大極殿地域第Ⅰ－2期に相当する。C期とD期とは整地



第10図　第一次大極殿・朝堂院地区変遷図

層の違いによって区分したが、同一工事期間中の工程差の可能性がある。

SB 8400はSB 8550と梁行を揃え、桁行10間約4.4 m（15尺）等間、梁間4間約3.2 m（11尺）等間で、SB 8550と一連の掘込地業をおこなう。SB 9200は、掘込地業が東西26m・南北16mで桁行5間（柱間は中央3間15尺、両脇間10尺）、梁間2間15尺等間と想定できる。SB 9200から北へ南北道路SF 9180が延び第一次大極殿地区南門に通じる。途中から東西道路SF 9026が延び東第二堂西正面北から6間目に入る。SF 9026の位置は朝堂院の南北2等分線のやや南にあたる。

第一次朝堂院内郭の建物配置を調べよう。SB 8400・SB 8550の棟通りはSA 5500の西約21.8 mにあり、この距離は小尺の72尺、大尺の60尺に近く、朝堂院東西幅の10分の1である。またSB 8550の南妻はSA 9201 Bの北約70.4 m、SB 8400の南妻はSA 9201 Bの北約177.9 mあり、この距離はそれぞれ小尺の240尺・600尺、大尺の200尺・500尺にあたる。大宝大尺でラウンドナンバーを得られることは遷都当初に造営された第一次大極殿地域と一致する。第一次朝堂院が第一次大極殿院より一時期遅れて造営されたことは確実であるが、上記のこ

とからみて、遷都当初に四堂配置する計画で縄張りがなされていた可能性がある。

D_2期（第10図4） SB 8400・SB 8550に変化はない。東面ではSA 5550Aを、SA 5550Bに改修する。南面では南門SB 9200の前面に仮設の目隠塀SA 9191とその両脇に接して結所SB 9190・9192が建つ。この期にSA 9201B・9202 Bが存続するのかSA 5550Bのような掘形の小さな塀に改修するのかは、削平のため不明である。第一次大極殿地域の第Ⅰ－3・4期に相当する。東外郭官衙の初現は確実にはD_2期であるが、D_1期に遡る可能性もある。

D_3期（第10図5） SB 8400・SB 8550に変化はない。東面ではSA 5550Bを築地塀SA 5550Cに改修する。SA 5550CにはSB 8550の北から5間目に対応する位置に門SB 8980が開く。南面では南門SB 9200の前面の仮設目隠塀とその両脇の結所を撤去する。SB 9200の東西にはSA 5550Cに対応する築地塀があったと考えるが、削平を受け未検出である。南門基壇の両側に南北溝SD 9173・SD9174があり、築地塀の北側雨落溝としてSD 9171・SD 9172がある。第一次大極殿地域の第Ⅱ期に相当する。東外郭官衙の北限を画す塀を建て内部を改造する。

D_4期 第一次朝堂院内郭に変化はない。東外郭に大きな土拡を作る。第一次大極殿地域第Ⅱ期に相当する。

E期（第10図6） SB 8400・SB 8550・SA 5550の存否は不明であるが、存在しない可能性がある。第119次調査の成果からみて南門SB 9205やそれにとりつく築地塀等の施設は廃絶しており、SD 9183・SD 9184がある。東外郭にはSB 10770を作り、SD 3715上層溝を掘る。第一次大極殿地域第Ⅲ期、すなわち平城上皇の遷都の時期に相当する。

F期・G期 朝堂院廃絶後には、SB 8550とSA 5550間の空閑地を一時鍛冶工房として使用し、その後第四次整地で埋めつくす。第4次整地は平安時代末に行ったと考える。

4　第一次朝集殿推定地の調査　第146次

推定第一次朝堂院地区については、これまでの各調査によって本概報Ⅰ－3に述べられているような建物配置と変遷が明らかとなった。調査は、推定第一次朝堂院東朝集殿の検出を目的として、第136次調査区の南50mに調査区を設定して行なった。

調査区は推定第二次朝堂院地区に伸びる丘陵から派生した、小支丘の東南部に位置する。そのため調査区の旧地形は全体に東南に向ってゆるやかに傾斜している。現状では、調査区の東が旧農業用水路を境に一段低くなっている。

遺　構

調査区の基本層位は、上記の段差を境に、東西で大きく異なる。東では、奈良時代に2回の整地が行なわれており、上から耕作土、床土、暗褐色砂質土、黄褐色粘質土（第2次整地層）、暗灰褐色粘質土（第1次整地層）、暗灰色粘質土、青灰色シルト（地山）の順となる。各整地層上面で奈良時代の遺構を検出するとともに、地山上で古墳時代の遺構を検出した。西では、耕作土、床土、灰褐色粘質土、暗褐色粘質土の順になる。暗褐色粘質土は古墳時代の遺物を含み、暗褐色粘質土上面で奈良時代と古墳時代の遺構を検出した。検出した主な遺構は、掘立柱建物、5棟、南北溝4条、竪穴住居跡8棟、周溝1条、堰状遺構1基、土壙12基などである。これらは大きく奈良時代と古墳時代に分けることができる。

奈良時代の遺構　A、B、Cの3期に分けることができる。。

A期　推定第一次朝堂院の建設前の時期である。SD 3765はこの時期における宮中央部の基幹排水路である。素掘りの溝で幅約2.0m、深さ約1.0mである。埋土は3層に分かれ、中、下層がA期に属する。SD 3765以東に第1次整地が行なわれる。

B期　第1次整地層上にSD 3715と掘立柱建物SB 01が造営される。SD 3715は素掘りの南北溝で、幅約3.0m、深さ約0.4mである。SD 3765に代わる宮中央部の基幹排水路として機能するが、SD 3765も完全に埋られず、上層がこの時期に相当する。SB 01は5間×2間、9尺等間の南北棟掘立柱建物である。

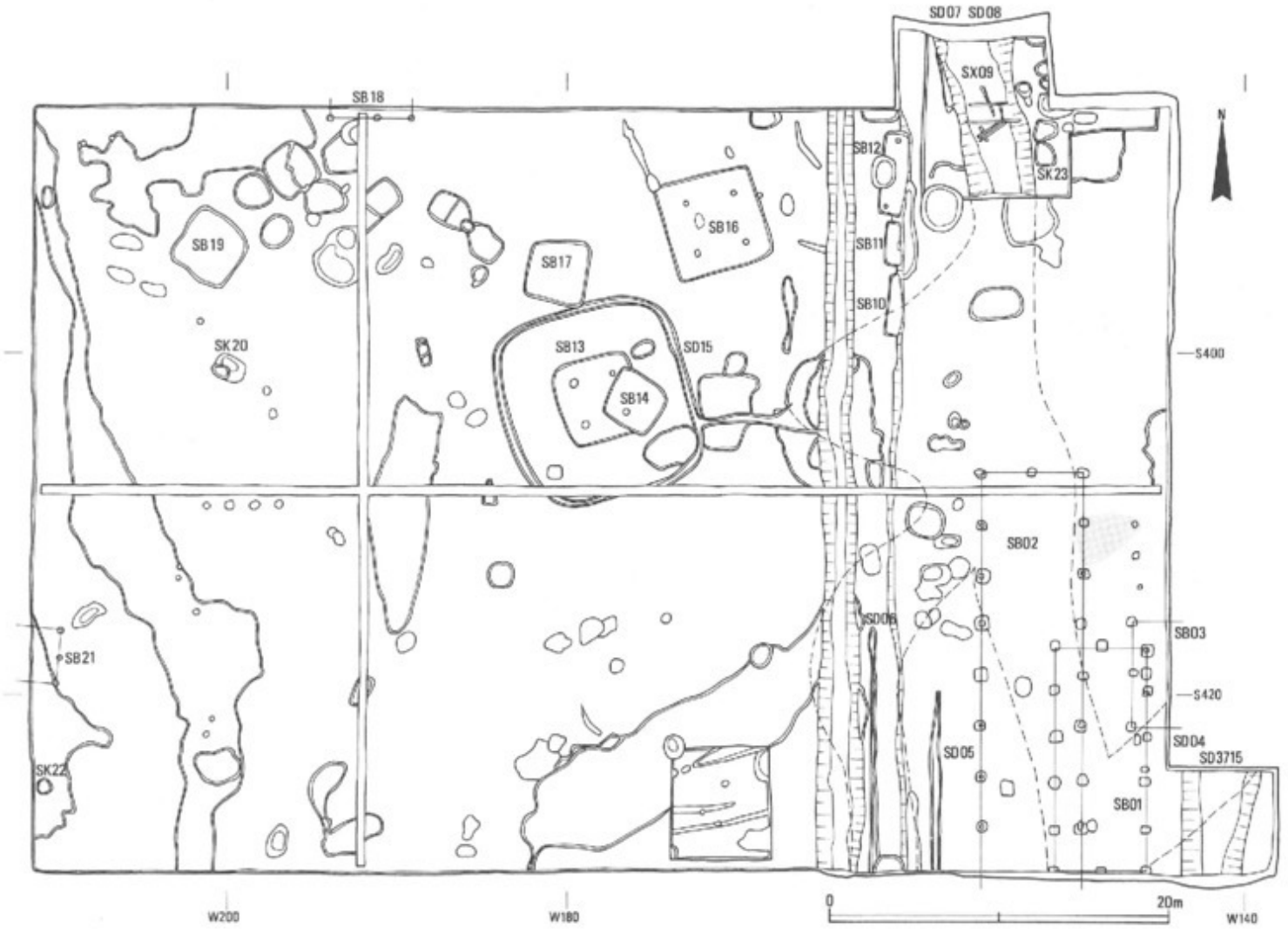
C期　第2次整地が行なわれ、掘立柱建物SB 02が造営される。SB 02は7間以上×2間、10尺等間の南北棟掘立柱建物である。第2次整地に伴って、SB 01廃絶後、その北方に須恵器甕を中心とする土器が大量に廃棄され、南北5m、東西4mの範囲に散乱している。SD 3765、SD 3715はこの時期には溝として機能しておらず、SD 3715は第2次整地によって埋立られている。第140次調査区におけるSD 3715の付け替え状況を参考にすれば、本調査区でも、さらに東へ付け替えられている可能性がある。なお梁間2間の掘立柱建物SB 03、SB 15、SB 17は方位が振れており、C期以降のものである。

古墳時代の遺構　南北溝SD 07、08は南北8mの長さにわたり発掘した。SD 07は、調査区をN10°Wの方向でほぼまっすぐに流れる。SD 08は、SD 07に一部重なり大きく蛇行しながら流れるSD 07より新しい。SD 07は幅4.0m、深さ1.1m、SD 08は幅3.4m、深さ0.8mである。SD 04については、SD 3715と重複しており、幅8.0m、深さ1.5mである。

SD 07からは、大量の土器、木器が出土した。埋土は、おおきく灰黒色粘土（上層）、暗灰色砂（中層）、灰色粗砂（下層）の3層にわけることができる。土器はいずれの層からも出土したが、灰色粗砂からの出土が多い。全体に溝の西半分に多く、東半分に少ない傾向が見られた。西方の住居跡群からの投棄と見ることができる。木器は、灰色粗砂から出土した。SD 08からは遺物の出土は少ないが、SD 07に見られなかった須恵器が少量出土している。

SD 07の底には堰状遺構SX 09が築かれる。SX 09は、両岸に掘り込まれた半円形掘り形におとし込まれた横木4本などによって構成される。SX 09周辺からも、土器、木器が大量に出土した。

竪穴住居跡は、いずれも隅丸方形である。SB 10、11、12は半分以上が削り取られている。SB 12には柱穴2個が残る。SB 13、14は重複しSB 13が古い。いずれも残りが悪く、深さは約10cmである。SB 13には、柱穴が4個残っている。周溝SD 15はSB 13に伴なうもので、東でSD 08にそそいでいる。SB 16は、最も大きな住居跡で一辺6mを計る。4個の柱穴にはいずれも柱根が遺存しており、



第11図　第１次朝集殿推定地発掘遺構図

床面から柱根の下端まで約70cmを計る深いものである。SB 17は、東南隅でSD 15と重複し、SD 15が古い。住居跡内からは、人頭大の石が投げ込まれたような状態で出土している。SB 19は、最も残りが良く床面まで60cmを計る。住居跡内からの遺物の出土は少なかったが、住居跡の重複や配置によって、大きく二時期に分けることができる。A期にはSB 11、13、19の3住居跡が、B期には、SB 10、12、14、16、17の4住居跡が属する。

遺　　物

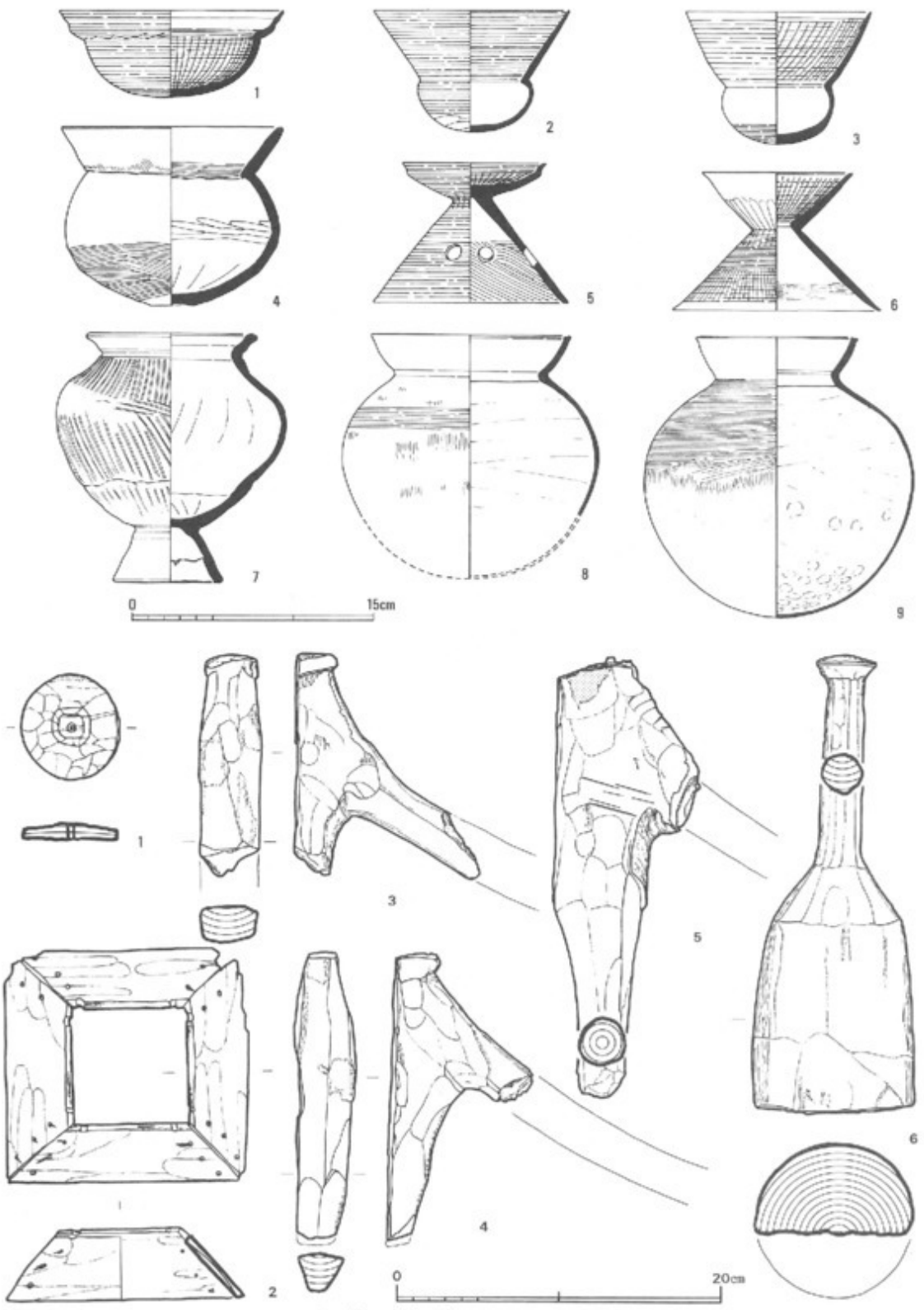
奈良時代の遺物　2条の南北溝や整地層などから遺物が出土したが、全体に量は少ない。

SD 3765からは、土器はほとんど出土しなかった。瓦は淡灰色砂（中層）、暗灰色粘土（下層）から軒丸瓦6273型式、6278型式、6282A型式、6284型式が出土している。灰褐色砂質土（上層）からは軒丸瓦6225型式が出土している。

SD 3715からは土器、瓦が出土している。土器には「菜料」「内大炊口人」と記す墨書土器2点がある。瓦では、灰色砂（中層）から軒丸瓦6225型式、6284型式、6311型式と、軒丸瓦6664型式が出土している。

SB 01北方の土器群には須恵器甕15個体、須恵器坏B蓋1個体、土師器皿A13個体以上がある。

古墳時代の遺物　3条の南北溝SD 04、SD 07、SD 08や竪穴住居跡、土壙などから、古墳時代の遺物が出土した。なかでもSD 07出土の遺物が質、量ともに豊富である。SD 07からは土師器、埴輪、木器が出土した。土師器は「布留式土器」の範疇に属するもので、第48次調査で検出したSD 6030出土土器と同じ様相をもつ。埴輪は円筒埴輪を主体とするが量は多くない。木器には、ナスビ形農具、農工具柄、砧、縦杵、直刀の鞘、槽、籠、紡錘車、腰掛、こて状木製品などがある。工具柄の内1点は完形で、全長89.4cmを計る縦斧である。直刀の鞘は3点あり、内1点は全長をとどめる。長さ56.5cm。この他用途は不明であるが、4枚の台形板を樺皮でとじ合せた、方錐台形木製品1点がある。樹種は鞘がスギ、ナスビ形農具がアカガシ、農工具柄がサカキ、砧がサカキ、腰掛がヒノキである。



第12図　古墳時代の遺物　3はSD15　他はSD07出土

第13図　古墳時代の木製品　　SD 07 出土

住居跡や土壙から出土した遺物は少ない。このなかでSD 15からは、小型丸底壺2個体や壺・甕の破片が出土し、SB 19からは、壺の口縁部片が出土している。いずれも本調査区内では古式に属する土器である。土壙では、SK 20、23から不明土製品が、SK 22から土師器の壺4個体、鍋1個体が出土している。

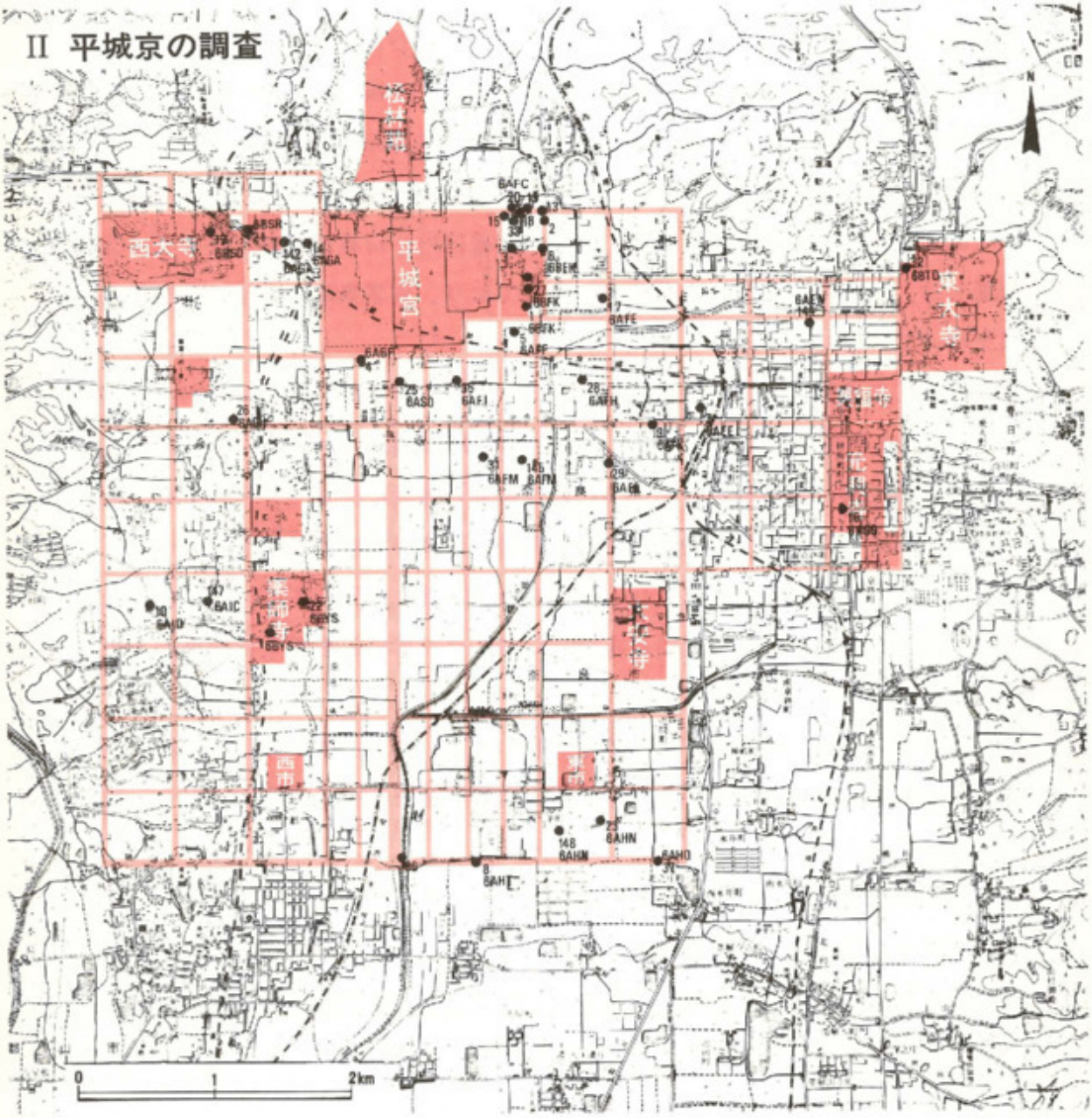
ま と め

今回目的とした東朝集殿については、本調査区内では検出し得なかった。当調査部では、次年度以降周辺の調査を予定しており、東朝集殿の存否はそれらの結果を待って判断したい。

奈良時代の遺構は、3時期に区分される。このうちA期、B期については、SD 3765、3715の時期が参考になる。これまでの調査成果により、SD 3765から3715への付け替えは、霊亀年間（715～716）に朝堂の建設に伴なって行われたものと考えられる。したがってA期を奈良時代初期、B期を奈良時代前半におくことができる。ただし今回の調査により、SD 3715掘削後も、SD 3765の南部は溝としての機能をとどめていた可能が大きい。C期については、B期との関係から奈良時代後半におくことができる。

B期とC期の掘立柱建物については、第136次、第140次において検出された掘立柱建物と同様な規模である。推定第一次朝堂院東外郭官衙群に連なる、何らかの官衙であろう。

古墳時代の遺構は、いずれも4世紀後半から5世紀にかけての年代を与えることができる。推定第一次朝堂院地区にのびる小支丘上には、この時期の遺構が点在しており、近くでは第140次調査で同じ時期の竪穴住居跡4棟を検出している。今回の調査では竪穴住居跡群およびそれと同時期の遺物群が、まとまって出土した点が注目される。



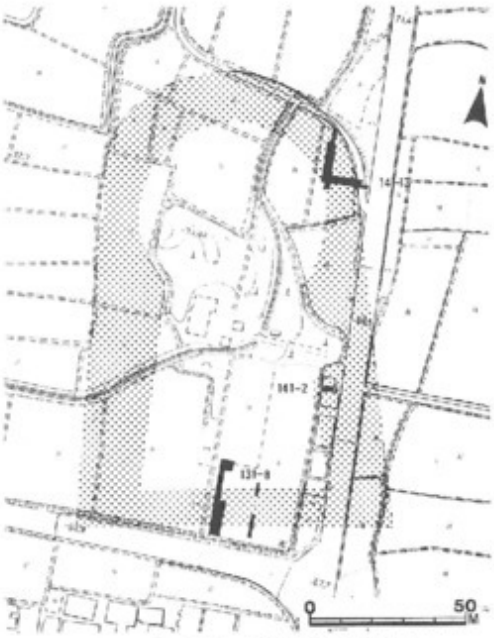
第14図　昭和57年度　平城京内発掘調査地一覧　※は未収録　未収録は巻末参照

昭和57年度　平城京内発掘地一覧

次数	調査地区	面積㎡	調査期間	備考	担当者
141－13	左京一条二坊・三坊	法華寺町1170－21	72	82' 7.6－7.12	岡本茂雄 木村光夫宅	千田剛道
141　2	左京一条三坊二坪	法華寺町1136－6	12	82' 4.8－4.12	黒文雄宅	山本忠尚
141－19	左京一条二坊内小路上	法華寺町1095－9	17	82' 8.16－8.22	川崎裕久宅	工楽善通
141－20	*左京一条二坊九坪	法華寺町988－2	7.5	82' 8.16－8.22	土方常孝宅	工楽善通
141－15	左京一条二坊坊間路	法華寺町中ノ段988－25	7.5	82' 7.20－7.22	直地貢二宅	工楽善通
141－18	*左京一条二坊十坪	法華寺町988　28	8	82' 8.11　8.12	阿部博宅	工楽善通
141－33	*左京一条二坊坊間路	法華寺町988－4	10	83' 2.9	野呂共栄宅	加藤允彦
141－25	*朱雀大路	二条大路南3　1－　193	140	82' 11.8－11.16	奈良市	宮本長二郎
141　5	左京二条二坊十三坪	法華寺町中町五双田	275	82' 5.10－5.26	塚本宗敬 杉本繁次郎宅	松村恵司
144－1	*外京二条六坊十一坪	北魚屋西町	550	82' 6.24－8.24	奈良女子大学	上野邦一
141　17	左京二条三坊十六坪	法華寺町5番地	270	82' 7.28　8.18	浅川滋	藤澤芳樹
141　35	左京三条二坊七坪	二条大路南1丁目108　1	356	82' 3.11－4.12	武田保宅	松井　章
141－28	左京三条三坊七坪	大宮町6－26	53.6	82' 12.3－12.10	第百生命	立木　修
141　7	左京三条五坊四坪	大宮町1　64－1,4,5,6	300	82' 5.27－6.12	大同建設	西　弘海
141　31	左京四条二坊三坪	四条大路南1－9	250	83' 1.10－1.27	山形病院	毛利光俊彦
145	左京四条二坊十五坪	尼ケ辻町田村川	600	82' 10.8－11.9	三和住宅	立木　修
141　29	左京四条三坊十二坪	三条検町410　1	160	82' 12.13　12.21	辻マンション	宮本長二郎
141－9	*左京四条四坊九坪	三条宮前町3－6	600	82' 6.24－7.10	白藤学園	工楽善通
148	左京九条三坊三坪	西九条町4－1－9,1　12,13	900	83' 2.22－3.30	植田又治	毛利光俊彦
141－23	*左京九条三坊十・十一坪	東九条町419　1	180	82' 10.4　10.27	岡野十二郎	金子裕之
141－36	*羅城門北方	大和郡山市	80	83' 3.15－3.25	県道城廻線	森　郁夫
141－37	*左京九条大路	奈良市北之庄町	220	83' 3.22－4.1	奈良山都市計画局	亀井伸雄
141－8	左京九条大路南辺	大和郡山市下三橋	500	82' 6.14　6.29	北和木材	山本忠尚
142	右京一条二坊六・十一坪	西大寺栄町2314　1	900	82' 4.15－5.13	紙谷昭義宅	山本忠尚
141－14	右京一条二坊三坪	二条町二丁目60の1	113.7	82' 7.12－7.15	河村正治	藤澤芳樹
141－4	右京三条一坊坊間路	二条大路南四丁目5－15	25	82' 6.10　6.11	下垣内勝友	山岸常人
141－26	右京三条三坊五坪	宝来町90　4・91－1	626.5	82' 11.11－12.4	松田真一 喜多徳恵	金子裕之
147	右京六条二坊十坪	六条西町1－421－27	996	83' 1.24　3.16	財務局	森　郁夫
141　10	*右京六条四坊七・十坪	六条町	57	82' 6.28－6.30	奈良市民生局	千田剛道
次数外	薬師寺中門	西ノ京町460	670	82' 8.23　10.4	薬師寺	本中　真
141－22	薬師寺旧境内	西ノ京町283－1	24	82' 9.16－9.23	増田伊佐男宅	千田剛道
141－1	法華寺旧境内	法華寺町446－1	110	82' 4.7－4.22	清水彦一宅	山岸常人
141－3	法華寺旧境内	法華寺町870	6	82' 4.26　4.27	塚本宗敬宅	西　弘海
141　6	法華寺旧境内	法華寺東町409	11	82' 5.18　5.19	増田有紀宅	山本忠尚
141　27	*法華寺旧境内	法華寺中町五双田	6.67	82' 11.25	中谷義雄宅	内田昭人
次数外	法華寺旧境内	法華寺横笛墓跡地	17	82' 7.2　7.3	法華寺	千田剛道
141－32	東大寺西面大垣	手貝町53・雑司町87・88	230	83' 1.27－2.18	東邦生命	亀井伸雄
141　12	西大寺旧境内	西大寺小坊町6・7	5	82' 7.1　7.2	岡本保司宅	今泉隆雄
141　21	西隆寺旧境内	西大寺本町勘定219－1	96	82' 9.13　9.17	木下創介	上野邦一
141　16	元興寺旧境内	芝突抜町1	113	82' 7.26	宮本幸正宅	工楽善通
次数外	*法隆寺旧境内		155	82' 7.2－7.3	防災関連調査	

*印は本文未収録　未収録については巻末参照

1　左京一条二坊・三坊の調査　第141－13次



第15図　木取山古墳周辺調査地点

第16図　左京一条二坊発掘遺構図

本調査は住宅建設にともなう事前調査である。調査地はコナベ古墳の南200ｍで、56年度の131－8次調査で検出した木取山古墳の東周濠推定地にあたり、東二坊大路関係の遺構の存在も予想された。

調査地は、水田床土の直下が地山面（バラス混り黄褐粘土）であり、奈良時代及びそれ以降の遺構面は削平されているらしい。検出した遺構はすべて地山面から確認した。主な遺構として東西溝と落ちこみがある。

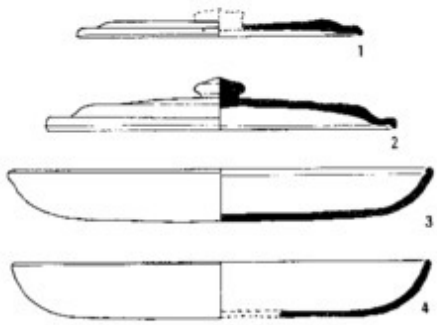
東西溝SD 01は幅1ｍ、深さ0.5ｍで、上下2層（上層：灰褐粘質土・下層：灰色砂）の堆積層が認められ、8世紀の土器が出土した。

落ちこみSX 02は、深さ1.5ｍで調査地の北および東へ広がる。落ちこみ内埋土には8世紀の土器を含む。

その他、調査地南端に地山の低い高まりとそれに沿う細溝を検出した。細溝内には遺物がない。削平前の地形の起伏を留めているかもしれない。

東西溝SD 01溝心の座標はＹ＝－17486.0の位置でＸ＝－145077.8で

ある。この数値からするとこの溝は、左京一条二坊一・二坪の坪境付近にあたる。このことから、道路側溝の可能性も考慮して調査を進めたが、北12m、南9mの間には対になる溝は存在しないことがわかり、条坊との関連はなお明確にしえなかった。一方、落ちこみSX 02は、埋土には埴輪は全くみられないなど、昨年度調査の木取山古墳南周濠SD 2251の状況とは異なる。したがって現時点ではなお、古墳周濠であるか否かは即断できない。東西溝との関連も不明である。



第17図　東西溝SD 01出土土器　½
須恵器1,2　土師器3,4

ところで、この付近における東三坊大路の位置には、海竜王寺以北では東に寄る説もあり、この説にもとづけばこの落ちこみが東二坊大路の西側溝である可能性も残っている。また、先の東西溝もこの説によれば、条坊の番付が変わり、左京一条二坊十五・十六坪付近となることも付記しておく。

2　左京一条三坊二坪の調査　第141－2次

住宅新築に伴う事前調査。対象地は左京一条三坊二坪に位置し、東二坊大路を海竜王寺東限線の北延長上に求めるならば、大路西側溝にかかる可能性があり、また56年に発見された木取山古墳の東裾ないし周濠西端にあたると推定された。

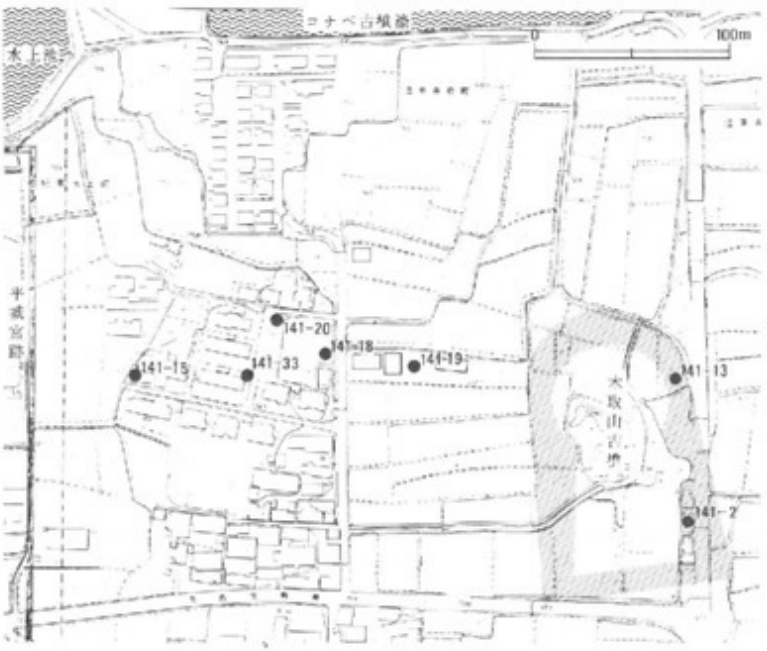
調査の結果、発掘区東端で南北溝1、西南で隅丸方形の土壙1を検出した。南北溝は西半分を発掘したのみだが、深さ1.1mあり上下の2層に分れる。上層はごく最近の陶磁器類を含むが、下層からは瓦器に伴って石製五輪塔および地蔵像片が出土した。発掘区西寄りから東北に向って地山が傾斜する。斜面上には厚く整地土が盛られ、隅丸方形土壙も整地土と同質の土で埋められていた。この土壙埋土および整地上には奈良時代の土器・瓦が包含されており、整地は奈良時代に行なわれたものと判断できる。この地山の傾斜はあるいは木取山古墳の墳丘裾部の名残りかもしれぬ。

3　左京一条二坊内の調査　第141－19・15次

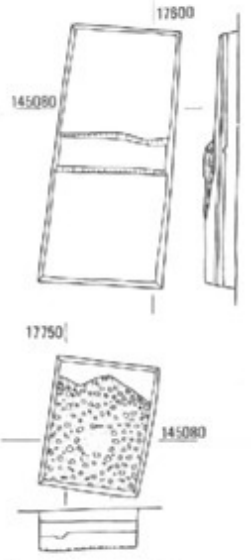
1982年度には表記条坊内で5カ所の発掘調査をおこなった。法華寺旧境内の北方にあり、通称一条通りを北へ約100ｍ余入ったところに位置し、いずれも住宅の改築や新築に伴なうもので、小面積の調査である。

第141－19次は十五坪と十六坪の坪境付近にあたり、何らかの境界施設が予想された。調査では3ｍ×6.5ｍの南北トレンチのほぼ中央に、幅約2ｍにわたる東西方向の瓦堆積があった。この瓦堆積の北側は旧耕作土下約10㎝で茶褐色粘質土の平坦な地山面があり、南側ではさらに20㎝下ったところで同様の地山面となる。瓦堆積下には、北寄りに幅約1ｍ、深さ20㎝程の東西方向の溝状落ち込みがあった。今回の調査では、この溝に側した築地等の有無は不明であった。

第141－15次は二坊々間路に東接したところにあたる。現地表面下約60㎝で中世以降と思われる南北方向の小溝一条を検出した。その下部には厚さ約40㎝の黄褐色粘土の整地層が堆積しており、その下面で拳大の礫を敷きつめた遺構を検出した。礫面で奈良時代の土器片が出土したことから、同時代の遺構とみられる。



第18図　法華寺周辺調査地点



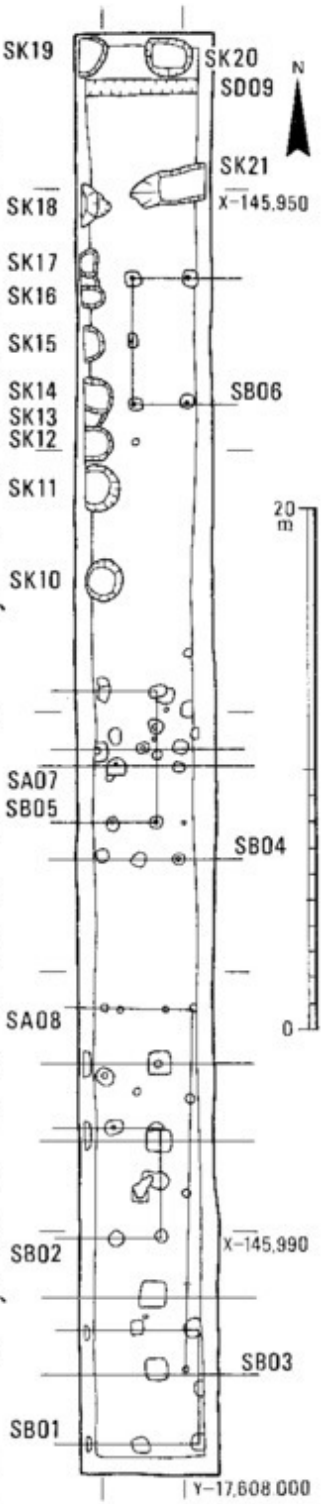
第19図　発掘遺構図

4　左京二条二坊十三坪の調査　第141－5次

本調査は宅地造成に伴なう事前調査である。調査地は平城宮東院の南東0.3kmに位置する水田で、平城京の条坊では左京二条二坊十三坪の西南部にあたる。調査地の南端付近に二条大路北側溝の存在が予想されたため、調査地南寄りに東西5m、南北55mの発掘区を設定して調査を行なった。調査地の基本的な層序は、現水田耕土・床土下に菟川の氾濫による灰茶褐色砂層が厚く堆積し、地表下1.2mで奈良・平安時代の遺物を包含する暗灰色粘土層に達する。遺構はこの層直下の灰黄褐色地山面で検出した。検出した遺構には掘立柱建物、掘立柱塀、溝、土壙の他に、多数の中世の耕作溝がある。

掘立柱建物は6棟を検出したが、すべて部分的な検出にとどまり、全体の規模を知り得るものはない。SB 01・02・05の3棟はいずれも梁行2間、桁行2間以上の東西棟建物の東妻部分にあたる。柱間寸法はSB 01が梁・桁行とも7尺等間、SB 02が梁行7尺等間で桁行6尺、SB 05が梁行8尺等間で桁行6尺である。SB 06は梁行2間、桁行2間以上の東西棟建物の西妻部分である。一辺0.6m前後の方形掘形の中に径約20cmの柱根が遺存する。梁行は8尺等間で、確認した桁行1間分が7尺の規模をもつ。SB 03・04は東西棟建物の南北両側柱列の一部を確認した。SB 03は南北二面廂付東西棟で一辺1mに近い方形掘形を6箇検出した。身舎の梁行は20尺、廂の出ならびに柱間が10尺を測る大形の建物で、十三坪南半部における中心的建物と考えられる。

掘立柱塀は2条を検出した。SA 07は東西方向の塀で、1間分（8尺）を確認した。西側の柱穴には柱根の周囲を挙大

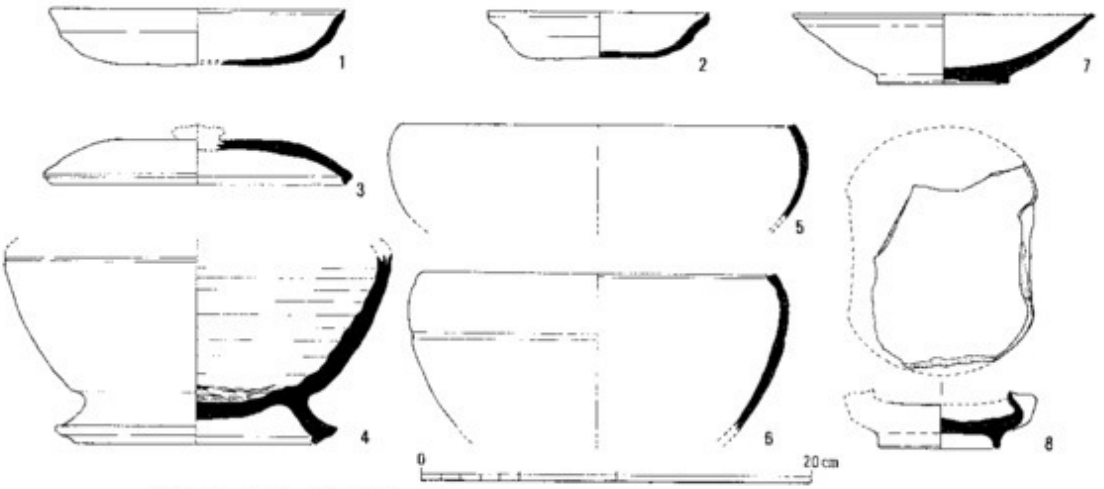


第20図　十三坪発掘遺構図

の礫で固めた工作がみられる。SA 08は南北4間分、東西1間分を確認した12尺等間の逆L字形の塀である。柱穴の形状、振れから時期が下る遺構と考えられる。

溝は1条を検出した。SD 09は幅0.6 mの素掘りの東西溝で、埋土中に少量ながら奈良後半の土器と瓦を含む。この溝は、本調査地の2筆東の水田で昭和52年度に行なった第131—31次調査で検出した道路状遺構の南側溝の西延長部にあたる。土壙は12基を数えるがすべて調査区の北半部から集中して検出された。 SK 21は、幅1.3 m、長さ3 m以上、深さ0.5 mの土壙で、他と形態を異にしている。埋没途上に焚火がなされ埋土中位に木炭・木屑層がレンズ状に堆積する。SK10 ～ 20は、いずれも径1 ～ 1.8 mの不整円形を呈する土壙で、深さは0.7 m前後。 埋土中から曲物の側板片を出土する例もあり、多くは井戸として使用された可能性がある。SK 18・21から接合する緑釉埦（7）が、SK 15から灰釉耳皿（8）が、SK 16からは13世紀末の土師器（2）が出土した。

調査では発掘区の関係から当初予測した二条大路の北側溝を検出することはできなかったが、数期にわたる遺構を検出し、十三坪の土地利用状況の一端を明らかにすることができた。中でもSD 09は十三坪を南北に二分する東西小路の南側溝に相当し、調査地南半で検出した大形建物SD 03の存在とともに、奈良時代後半期に½坪利用の宅地割を想定させるものとなっている。また、平城京廃都後も宅地として利用された可能性があり、周辺地域の調査の進展が待たれる。

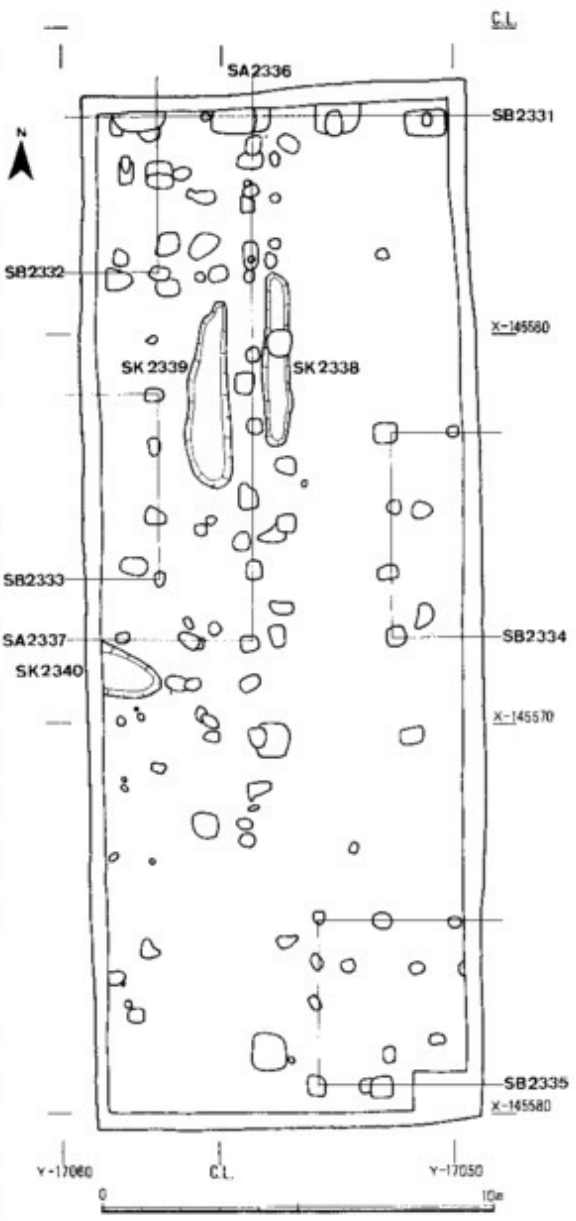


第21図 土壙 出土土器 SK 10 1・3－6, SK 16 2, SK 18・21 7, SK 15 8

5　左京二条三坊十六坪の調査　第141－17次

当該地は平城京左京二条三坊十六坪の中央やや南寄りを占めており、福山敏男氏等によって阿閦寺の存在が推測されていた。東西10m、南北27mの発掘区を設定し、調査した。

上層の状況は上から旧耕土、旧床土、灰砂、淡褐土、赤褐土の順で、黒色粒混赤褐砂地山、あるいは、明黄褐細砂地山に至る。地表からの深さは、総じて0.7mである。淡褐土上面で足跡を多数検出した。ヒトと小型偶蹄類のそれであるが、組み合わせや方向性などの規則性は認められない。淡褐土は瓦器を包含するので中世以降の所産である。赤褐土面には縦横に走る耕作溝がある。出土遺物は、ほとんど奈良時代のもので、廃都直後に造成された水田に伴う可能性もある。奈良時代の遺構は赤褐土を除去した段階で検出した。建物5・掘立柱塀2・土壙3であり、大きく2時期に区分できる。



第22図　左京二条三坊十六坪発掘遺構図

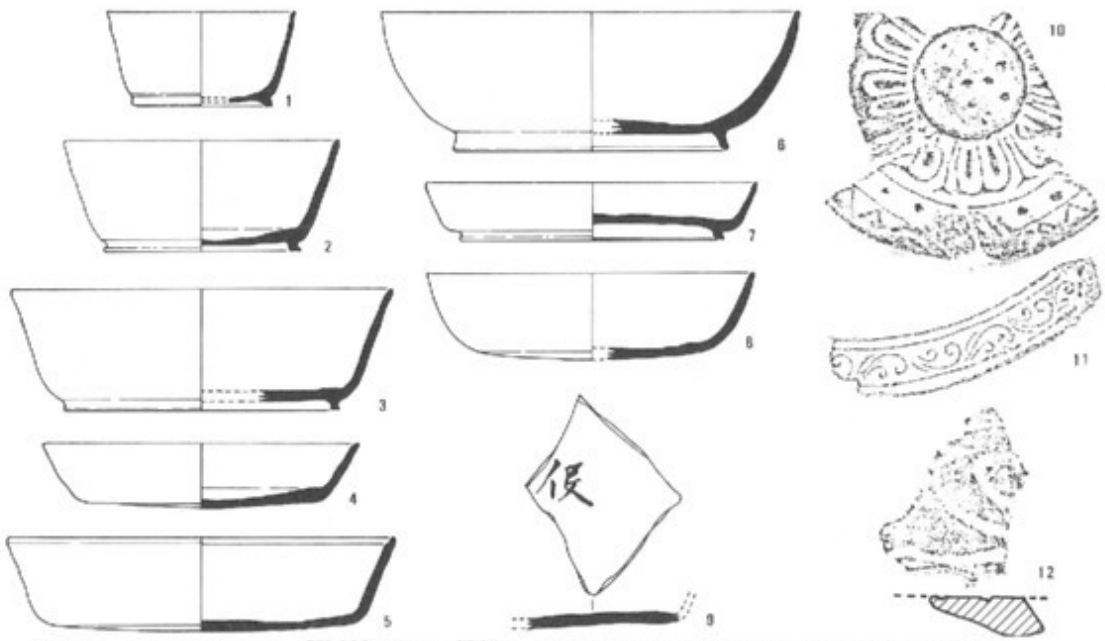
A期　一辺1.2m四方の方形掘形をもつSB 2331（東西3間以上2.4m等間）がある。当十六坪の南北2分割線は、仮に1尺を0.296mに換算すれば、SB 2331の柱筋の南約8尺に位置する。東西2分割線は15′41″西に振れるため、Y=−17056

のあたりを通過する。この換算法を用いれば、SB 2331は当十六坪のほぼ中央に位置する。

B期　南北塀SA 2336（7間以上1.8 m等間）とそれに鍵の手状にとりつく東西塀SA 2337（3間以上1.8 m等間）が設けられる。二つの木塀に囲まれた内側に東の柱筋を合わせた2棟の建物SB 2332（2間以上×1間以上、柱間2.4 m）とSB 2333（3間×1間以上、1.5 m等間）があり、外側には建物SB 2334（3間×2間以上、1.8 m等間）とSB 2335（2間×3間以上、南北3.4 m東西1.8 m等間）が建つ。塀SA 2336はほぼ当坪の東西2等分線上にのる。塀の内外に土壙SK 2339、SK 2338、SK 2340がある。

遺物は主に土壙、耕作溝、包含層から出土した。いずれの土壙からも奈良時代前半の土師器、須恵器が比較的多く出土した。これに共伴して、SK 2338でベッコウ、SK 2339で軒丸瓦6301（新）型式、SK 2334で墨書土器を検出した。また耕作溝と包含層から琥珀、「小君」と陰描した須恵器、緑釉波文塼、軒丸瓦6311型式と軒平瓦6719 A型式が出土している。

当発掘区と阿閦寺との関係はいまだ明瞭でない。周辺の調査を含めた今後の検討をまちたい。



第23図　十六坪出土遺物　SK 2338 1－5　須恵器　SK 2339 6－7、須恵器　10　軒丸瓦6301（新）型式
SK 2340 8・9　須恵器　11軒平瓦6719 A型式　12緑釉波文塼（12のみ縮尺½　他は¼）

6　左京三条二坊七坪の調査　第141－35次

駐車場建設にともなう事前調査である。当坪内では西隣（第103－1次）と東隣（第118－23次）等を調査しており、南には大宮通りをへだてて六坪の宮跡庭園が位置する。第103－1次調査では宮跡庭園への導水路や建物群を検出しており、今回の調査でもその関連遺構が予想され、東西約9m、南北39mの発掘区を設け後に一部拡張した。

層序は耕土、床土の下に厚さ10cm前後の遺物包含層があり、更に遺構検出面である暗黄色粘質土の整地層と黄褐色シルト質地山がある。

検出遺構は掘立柱建物10、流路8以上、塀1、井戸2、土壙2などがある。それらは平城京造営以前（A期）と奈良時代（B期）に大別される。A期では自然の流路が数条ある。埋土は発掘区北部では暗褐粘質土であるが、南部では灰色砂やバラスとなり、磨耗した古墳時代の土師器片、流木などを含む。B期は遺構配置および切り合いから少なくとも以下の4期の変遷が考えられる。

B－1期　自然の流路が残り、これを切って土壙（SK10）が掘られる。埋土から平城I期の土師器盤1、「□里人歳歳歳歳歳歳歳」と記した木簡が出土した。

B－2期　流路を埋めたて整地を行なう。宮跡庭園への導水路SD06Aを掘削する。建物は2棟（SB 05、13）である。

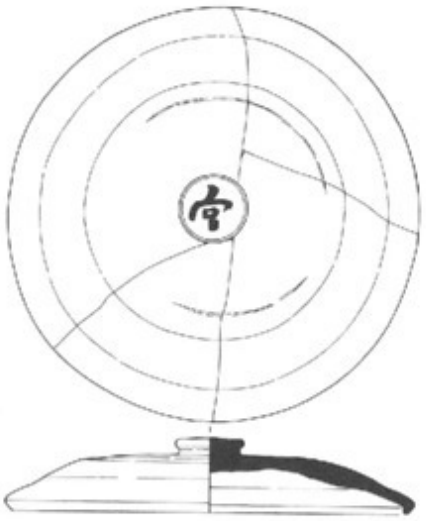
B－3期　建物は4棟（SB 01、04、07、11）である。発掘区の南では土壙1、井戸2が切り合う。SE 16の枠は4本の角材に枘穴を穿ち横桟を向かい合わせで一対ずつ入れ、桟外に縦板を交互に重ねあわせたもので一辺約90cmの正方形である。SD 06Bからは「宮」と記した墨書土器が出土した。

B－4期　建物は4棟（SB 03、08、12、14）である。井戸は埋められその上にSD 09が掘られSD 06Cに注ぐ。SD 06Cからは糸切底の須恵器が出土する。

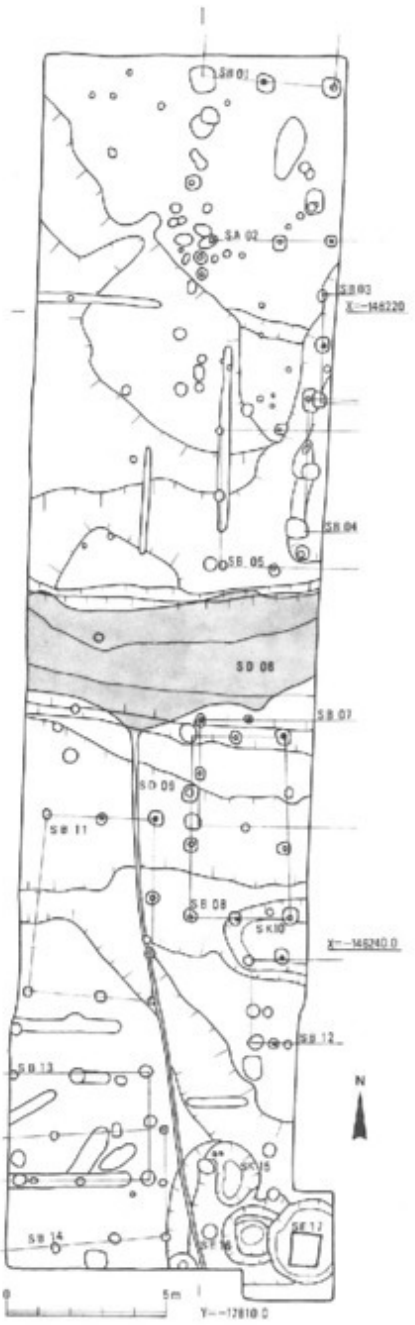
まとめ　本調査地は平城京造営以前は自然の流路が蛇行していたが、造営にともなって整地され、新たに宮跡庭園の園池の導水路SD 06が掘削される。旧水路上には建物が建ち並び、井戸も設けられた。掘立柱建物は奈良時代を通じて10棟分

あり、3期の建て替えがある。建物はいずれも柱間が6～7尺程度の小規模なもので雑舎的な建物であろう。これは本調査地が七坪内でも西南隅に近いためと考えられる。

第24図　左京三条二坊七坪発掘全体図



第26図　SD 06出土墨書土器



第25図　第141－35次発掘遺構図

7　左京三条三坊七坪の調査　第141－28次

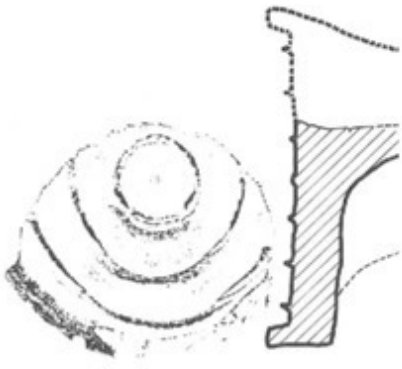
本調査はビル新築に先立つ事前調査で、遺存地割から東三坊々間路の存在が予測された。床土下の青灰粘質土面では上層遺構である巾約20㎝の南北溝8条・東西溝1条を検出した。この層は粘土と砂の細かい互層で調査地の北を流れる佐保川の氾濫による堆積と考えられる。この層の下層から奈良時代の遺構を検出。南北溝SD 2335は東三坊々間路西側溝、東肩は検出できなかったが、巾4ｍ以上、中央部約1.5ｍが一段深くなる。南北塀SA 2330はSD 2335の西3ｍにある。北側の柱穴は土壙SK 2332に破壊されたのであろう。遺物はSD 2325の溝中央から木簡、瓦、土器が出土。瓦は軒丸瓦6012Ｈ（新種）がある。木器は曲物が出土。木簡は郷里制下（霊亀六年～天平十二年）のもの。

・尾張国仲嶋郡牧沼郷新居里

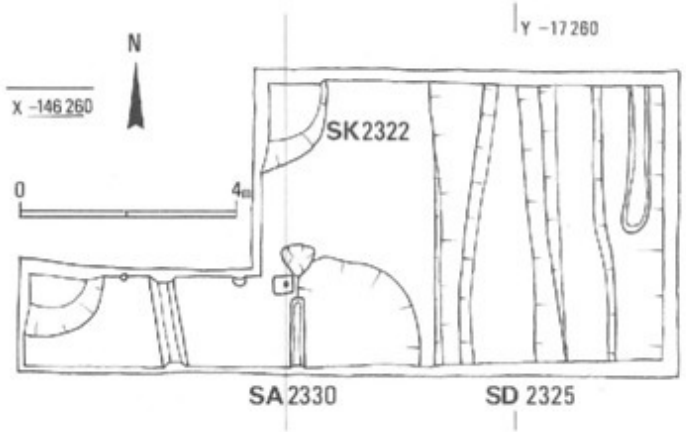
・□マ広嶋白米五斗五月一日

SD 2325と、第118－23次調査で検出した東二坊々間路西側溝との心心距離は朱雀大路の振れN 15′41″Wを加味して計算すると532.76ｍとなる。条坊計画の一坊分1800尺で除すると、1尺0.296ｍ弱となり、現在までの条坊調査による成果と合致し、SD 2325を東三坊々間路西側溝と考えることができる。この場合、東三坊々間路と同じく、巾3丈強と推定される。

東三坊々間路西側溝　X＝－146,254.563　Y＝－17,791.583



第28図　SD 2325出土軒丸瓦 ⅓

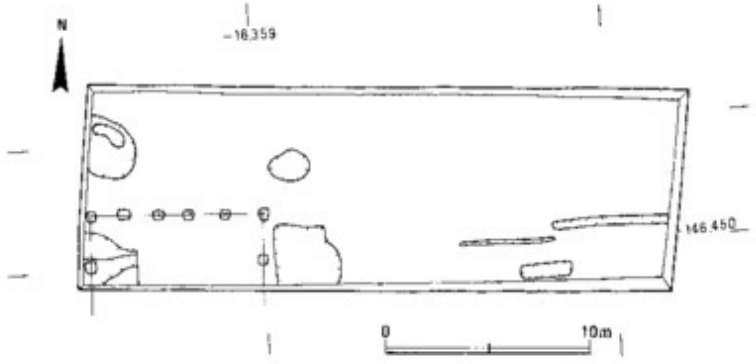


第27図　左京三条三坊七坪発掘遺構図

8　左京（外京）三条五坊四坪の調査　第141－7次

奈良市大宮町1丁目64－1, 4. 5, 6番地所在のサカイヤ地所KK所有地におけるマンション建設の事前調査として実施したものである。当該地は平城京の外京左京三条五坊四坪の東北部にあたり、東を限る南北の市道が四坪・五坪間の坪境小路に相当する。947㎡の敷地の南半部に東西30m、南北10mの調査区を設定して調査を実施した。調査区の基本層序は、現地表から30～60cmがコークスガラによる整地土、旧水田耕土及び床土（30cm）、黄褐色粘質土の遺物包含層（10cm）、黄灰色粘土地山層の順であり、旧耕土下約40cmで黄灰色粘土の地山面に達する。地山面で、奈良時代に属する東西5間の東西棟の掘立柱建物1（SB 01）と土壙3（SK 02～04）、古墳時代の溝1（SD 05）と時期不明の東西溝2（SD 06～07）・土壙1（SK 08）等の遺構を検出した。建物SB 01は、土壙SK 02～04、及び包含層出土の土器・瓦片から奈良時代前半期に造営されたものと考えられる。桁行5間で、総長8.5m。柱間寸法は1.7m等間。梁行柱間寸法は2.3mである。北側柱列東第1～第4の柱穴には径18cm前後の柱根が遺存している。最も保存状態の良好な東第3の柱根には樹皮の遺存が認められ、樹種鑑定の結果、シイの木であることが判明した。平城京内の住宅建築の用材としては、宮殿・寺院建築の場合と同じく針葉樹のヒノキが一般に用いられており、広葉樹のシイの黒木を柱材に用いたSB 01例は注目すべきものである。

調査区内にはこのSB 01以外に建物遺構はなく、京内の他の部分に比べて密度が低く、またその利用の時期が奈良時代の前半期に片寄ることが明らかになった。外京の利用状況の一端を示すものであろう。



第29図　左京三条五坊四坪発掘遺構図

9　左京四条二坊三坪の調査　第141－31次

調査地の東には菰川が南流し、対岸には推定田村第が存在する。調査は三坪の北東部に東西約25ｍ、南北約10ｍのトレンチを設定し、１月10日から１月27日まで実施した。

遺構は耕土・床土直下の地山（黄灰褐色粘質土）面で検出した。主な遺構には、掘立柱建物９棟（SB 01・02・07・10・11・12・13・14）、掘立柱塀２条（SA 05・08）、土壙１基（SK 06）のほか、旧流路（SD 03・04・15など）やその溜りがいくつかある。旧流路やその溜りは弥生時代や古墳時代後期に属し、その他の遺構は奈良時代に属す。奈良時代の遺構は大きく４期に区分できる。

A期　発掘区のほぼ中央部にある南北塀SA 08（９尺等間）を設け、その西に東西棟SB 12を配置する。SB 12は４間以上×２間で、東から２間目と４間目を仕切る。桁行・梁間とも８尺等間である。

B期　SA 08を廃して東西棟SB 01を設け、その南西に南北棟SB 10を配置する。SB 12はこの時期には廃絶していると考える。SB 01は床束が残ることから床張りの建物が、桁行７間に復原できる。南に庇が付くかもしれない。桁行・梁間とも８尺等間である。SB 10は東と西に庇が付く建物で、身舎の北１間分を仕切っている。桁行は11尺、梁間は身舎８尺等間、庇６尺である。

C期　SB 01をSB 02に建て替え、SB 12の位置にSB 13を建てた時期である。SB 02は４間以上×２間で、南に庇が付くかもしれない。柱間は桁行が９尺等間、梁間が9.5尺等間である。SB 13は３間以上×２間で、桁行８尺等間、梁間９尺等間である。

D期　SB 13とほぼ同じ位置でSB 14に建て替え、東辺はSB 02を廃して総柱建物SB 07と南北塀SA 05（６尺等間）を設けた時期である。SB 14は３間以上×２間で、桁行・梁間とも８尺等間である。SB 07は３間×２間の南北棟に復原できる。桁行は６尺等間、梁間は７尺等間である。また、SB 14の南で検出した２間以上×２間の小規模な東西棟建物SB 11（桁行５尺等間、梁間３尺等間）や方向の振

れる南北棟建物SB 09（梁間9尺等間）もこの時期に属す。

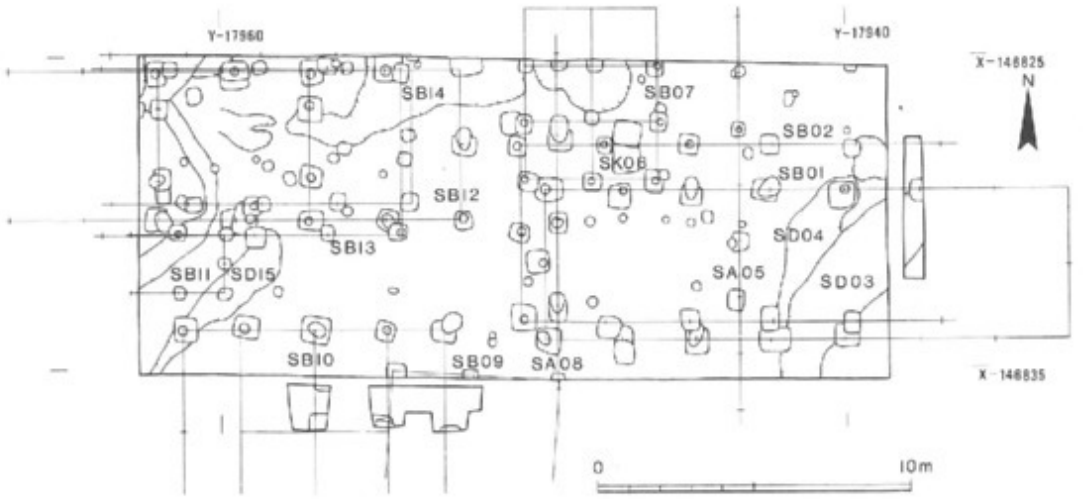
遺物は包含層が削平されていることから、柱穴や土壙SK 06から奈良時代の土師器、須恵器小片が少量出土したにとどまる。なお、SB 12の柱穴から施釉陶器片、SB 09の柱抜取穴から軒丸瓦6348型式各1点が出土した。

まとめ　A～D期の実年代については、出土遺物が少なく決め手に欠けるが、B期のSB 01の柱痕跡から奈良時代中頃の土器、C期のSB 02の柱穴から奈良時代後半頃の土器が出土しており、B期からC期への移行年代を奈良時代中頃から後半までの間に置くことができる。A期は奈良時代前半頃、D期は奈良時代末頃に比定できよう。

A期の南北塀SA 08は三坪の坪東端から四分の一に位置する。この塀が宅地の東限を示すのか、宅地内の一区画なのかは今後の調査で解明せざるをえない。

B期のSB 01・10は、その配置や規模からみて、主殿と脇殿と考えられる。SB 10の桁行を4間とみた場合でも、その南妻は坪北端から四分の一位置をこえる。この時期の宅地は少なくとも三坪の北東四分の一町を占めていたことになる。

C期はB期を継承するが、次のD期は比較的小規模な建物が建ちならび総柱の倉庫風建物が加わるなど様相が変わる。宅地内の建物配置の変化なのか、宅地割りそのものが変わったのか、これからの調査で明らかにしていく必要がある。



第30図　左京四条二坊三坪発掘遺構図

10　左京四条二坊十五坪（田村第推定地）の調査　第145次

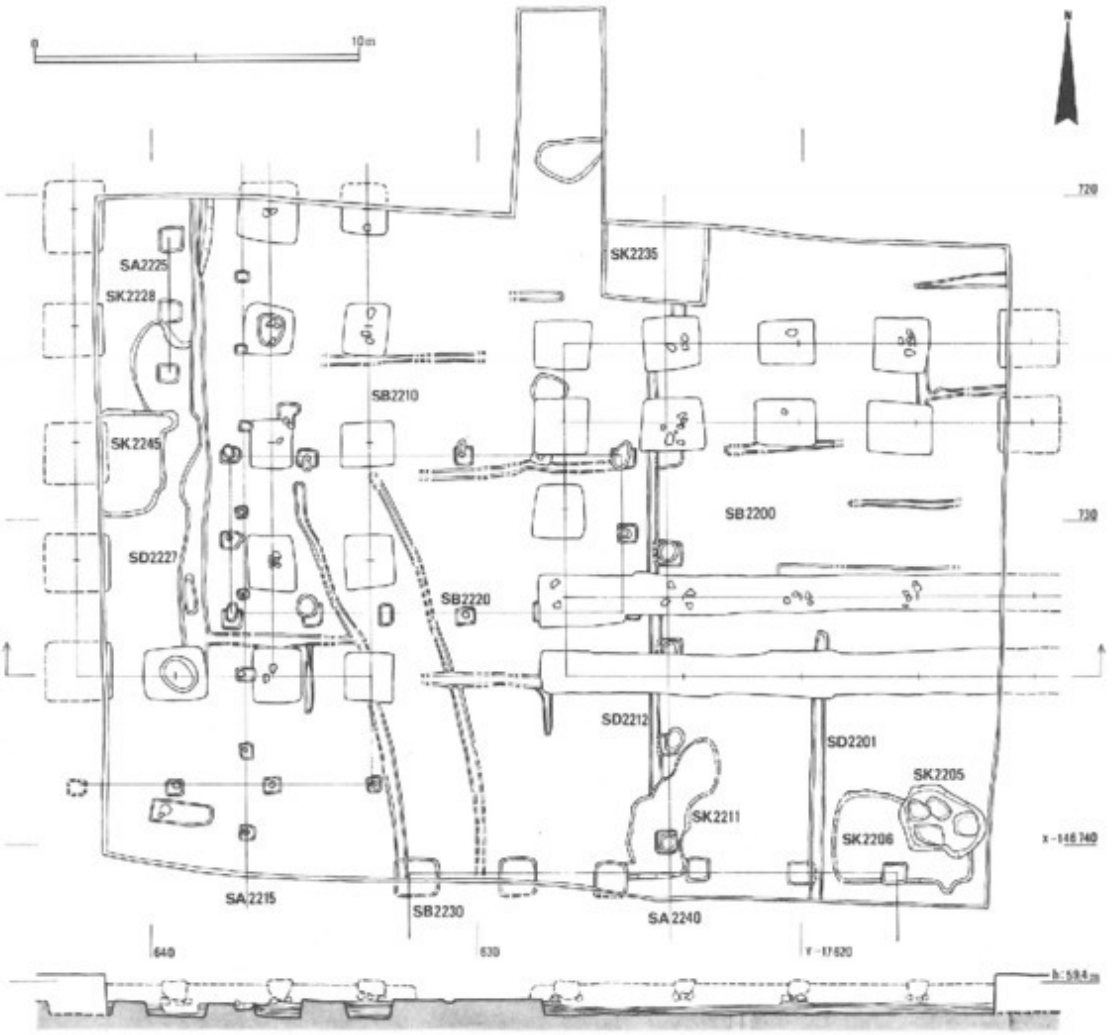
本調査は住宅地造成工事に先立つ事前調査で、十五坪内の状況を把握する目的で行なった。また調査地周辺は、岸俊男氏によって、奈良時代中頃に正一位太師（太政大臣）にまで至った藤原仲麻呂の邸宅である田村第に推定されており、田村第に関連する遺構の存否の確認も、その目的の一つであった。

調査地は南流する佐保川と菰川に挟まれた沖積地であるが、現状はスクロール化した住宅地となり、水田・更地はごく小面積になってしまっている。

遺　　構　検出した主な遺構は建物4棟・掘立塀3条・土壙6基・溝である。遺構は切り合い関係から3時期以上の変遷が認められる。

A期　掘立柱建物SB 2220は桁行5間・梁間2間、8尺等間の東西棟。柱は柱根が残存するものと、抜取られたものとがある。掘立柱建物SB 2230は桁行5間10尺等間の東西棟。北の側柱筋だけを確認した。掘立柱塀SA 2240は10尺等間の南北塀で、柱抜取痕がある。SA 2240はSB 2220と接近しすぎ、またSB 2230とも重複するため、これらの同時併存は考えられない。SB 2220とSB 2230も配置関係からみると併存は考えがたい。A期の中でも3回の変遷がみとめられる。

B期　礎石建物SB 2200は、桁行5間以上、梁間4間の南北に廂をもつ東西棟建物。桁行は12尺等間、梁間は身舎9尺等間、廂の出は8尺である。南側柱・入側柱筋は巾約1.5 mの布掘地業を行い、他は一辺約1.5 mの方形の坪掘地業を行っている。礎石はすべて抜き取られており抜取穴には礫・瓦塼類が捨てられていた。礎石建物の布掘地業の類例として、平城宮のSB 5300（第37次調査）をあげることができる。礎石建物SB 2210は桁行5間以上、梁間3間以上の少なくとも東廂をもつ南北棟建物。桁行12尺等間、梁間は身舎、廂とも10尺である。すべての柱位置には一辺約1.5 mの方形の坪掘地業が行われるが、礎石はすべて抜取られている。建物の南側には11尺の出で掘立柱の縁が付される。柱掘形は約0.6 mの方形で柱根を残すものもある。掘立柱塀SA 2225は2間の南北塀で7尺等間である。SB 2210の棟通りに位置するため、あるいはSB 2210と関連するものかもしれな



第31図　左京四条二坊十五坪発掘遺構図

い。SB 2200とSB 2210は南面の柱筋を揃え、建物の間隔は柱心心で20尺であり、一連の建物と考える。また、SB 2200・2210の地業は遺構検出面から30～50㎝の深さから行われている。SK 2205からは径が1ｍ大の三笠山安山岩3・溶結凝灰岩1を検出したが、これらはSB 2200またはSB 2210の礎石であろう。SB 2200の北側にトレンチをのばし、建物の存否をさぐったが、調査区内では確認できなかった。

C期　掘立柱塀SA 2215は9間以上の南北塀で、柱間は8尺等間である。掘形は約0.5ｍの方形で柱根を残すものもある。

遺　　物

土器・瓦が多数出土しているが、大多数が、後世の溝からの出土である。SB 2200 の南側柱筋の礎石抜取から軒平瓦 6670 A（新型式）が出土している。文様構成からみて平城宮軒瓦編手のⅢ期に相当するものであろう。土壙 SK 2206からは和同開珎が12枚、重なった状況で出土した。

ま と め

岸氏の考察によれば、田村宮・藤原仲麻呂の田村第は左京四条二坊九～十六坪で、坊の東半を占める。この地域での調査は従来行なわれておらず、本調査が初めてである。田村第と本調査の成果はいかに関わるのであろうか。

今回検出したB期の建物SB 2200、2210 は京内では例をみない大規模なものであり、B期の時期は、建物が切りこむ整地土・溝から出土した土器、礎石抜取から出土した瓦からみて奈良時代中頃と考えることができる。次に、北方の現奈良市役所の調査で検出した左京三条二坊十坪と十五坪の坪境小路心から、朱雀大路の方眼北に対するN 15′ 41″ Wの振れを加味して今調査地近くでの十・十五坪の坪境小路心を推定すると註2のようになる。小路溝心心巾6 m として、延喜左右京式京程条にみられる犬走3尺・垣基5尺・溝巾の半分1.5尺と溝心心巾の半分3 m を加算してみると、もし、SB 2210に西廂が10尺の出で設けられていれば、側柱筋は築地とほぼ接することになる。西廂がなかったとしても軒の出を6尺としてみると、建物と築地の軒先はほぼ接してしまう。このような情況はB期においては、十・十五坪間の坪境小路は存在せず、少なくとも東西に接する十・十五坪の2坪は区画されず、一連の宅地であった可能性がきわめて高い。

平城京の宅地の班給基準については、知られておらず、表2に示した藤原・難波京のものから類推せざるをえない。1町以上の宅地は難波京に例がなく、藤原京の場合を準用すれば、従四位下以上ということになる。仮にこの宅地が2町以上に広がるとすれば、今調査地は仲麻呂の田村第の一部となる可能性が大きい。しかし、藤原南家・北家が、居住地の位置関係からの呼称であるとすれば、この地を仲麻呂の父、右大臣武智麻呂以来の南家の宅地と考えることもできる。だが、

武智麻呂は3兄弟とほぼ時を同じくして天平9年（739）に死亡しており、遺物からみた年代観よりは若干さかのぼるのも事実である。また、田村第は天平宝字8年（764）の仲麻呂斬死以後も、宝亀6年（775）から延暦3年（784）まで田村旧宮・田村後宮・田村第などの名称が『続日本紀』にあらわれ、そこで宴会が行なわれた記事が認められる。仲麻呂斬死以後も、旧田村第は使用しつづけられたのであろう。

このように、B期の建物には上述の三つの可能性が考えられるのである。そのいずれにしても、最低2町分の宅地という大規模宅地内における機能分化を考えざるをえないであろう。そのような観点からみれば、今調査地は所謂「コの字」配置を想起させる整然とした配置の大規模な礎石建物群であることから、政所的な機能を有していた可能性があろう。家令職員令によれば、二位の家政機関は小司に準じた規模を有するのである（表2）。ちなみに、田村第の文献的初見は天平勝宝4年（752）4月の大仏開眼会の際であるが、その2年前に仲麻呂は従二位に任じられている。

1　岸俊男「藤原仲麻呂の田村第」『日本古代政治史研究』1966.『藤原仲麻呂』1969.

2　左京三条二坊十・十五坪間小路心　X＝－146,190.580　Y＝－17,653.825
　　左京四条二坊十・十五坪間小路心（推定）X＝－146,730　Y＝－17,651.364

表1　藤原京・難波京の宅地班給例

藤原京の宅地（持統5年12月）			難波京の宅地（天平6年9月）	
右大臣（従二位）		4町		
直広弐（従四位下）以上		2町	三位以上	1町以下
大参（正五位上）以上		1町	五位以上	½町以下
勤（正六位上）以下	上戸	1町	六位以上	¼町以下
〃	中戸	½町		
〃	下戸	¼町		

表2　家令職員令

	家令	扶	従	書吏
一位	1	1	大・少	大・少
二位	1		1	大・少
正三位	1			2
従三位	1			1

第32図　十五坪出土軒平瓦

11　左京四条三坊十二坪の調査　第141－29次

マンション建設予定地の事前調査。調査地は表記の場所にあたり、幅5ｍ、長さ20ｍの東西トレンチを設定した。旧水田耕作土上に約1.4ｍの盛土があり、耕作土下の床土・遺物包含層はともに浅く、遺構面は耕作面下約30㎝に検出した。

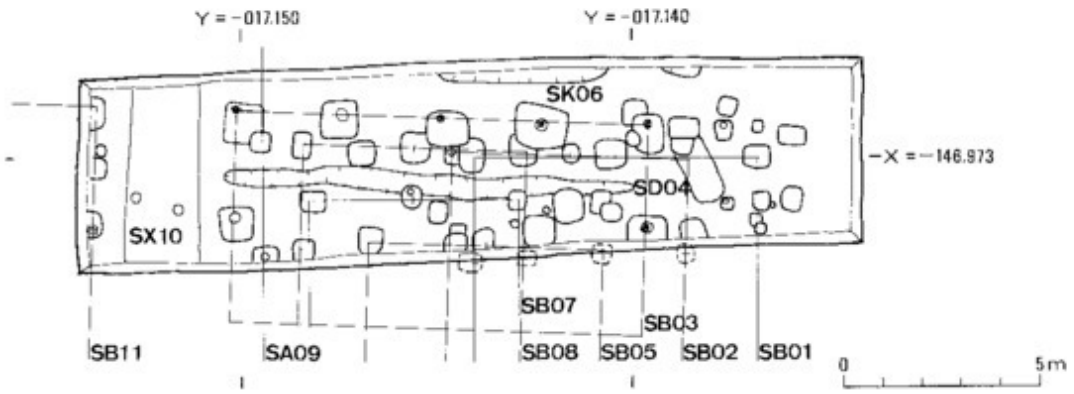
検出した主な遺構は、掘立柱建物7棟、溝1条、土壙1基等である。

掘立柱建物はSB 01・02・03・05・07・08の6棟が同位置で重複しており、少くとも6期の改築が認められる。これら6棟のうち、SB 03を除く5棟が南北棟で、柱掘形の大きさからみて小規模な建物と思われる。SB 03の柱掘形は最も大きく、柱根を残す。柱根には下端部で15㎝厚、上端部で5㎝厚の根巻粘土を施す。SB 03とSB 11は北側の柱筋を一致させた同時期の建物と推定される。SB 03の坪内の位置は、坪を四等分した東北4分の1町のほぼ中央にあり、したがって、SB 03を$^{1}/_{4}$町宅地の主屋、SB 11を副屋とする配置が考えられる。

	桁行×梁間 間	柱間寸法(尺) 桁行		梁間	
SB01	－ × 2		9	12	南北棟
02	－ × 2		8	10	南北棟
03	4 × (2)	9	8.5	9	東西棟
05	〃 × 2		－	10	南北棟
07	－ × 2		〃	9	南北棟
08	－ × 2		9	9.5	南北棟
11	－ × －		10	－	南北棟

発掘区西端に検出した溝状遺構SX 10は、幅1.9ｍ、深さ0.3ｍ程の溝状掘込みと、固く締った埋土の状況から掘込地業と考えられる。SX10とSA 09は坪内を4等分する位置にあるものとすれば、$^{1}/_{8}$町を限る塀跡とすることができる。

出土遺物は土器の細片が多かったが、すべて奈良時代のものである。



第33図　左京四条三坊十二坪発掘遺構図

12　左京九条三坊三坪の調査　第148次

調査地は三坪の北半中央部にあたる。調査地の層序は、耕土・床土下に中世の遺物を含む灰褐色砂質土（厚さ30～40㎝）があり、その下は地山の灰色砂や黄褐色粘質土の遺構面となる。遺構面は西と南に向って次第に低くなっている。

検出した主な遺構には、掘立柱建物9棟（SB 01・02・06・07・09・10・11・14・15）、掘立柱塀1条（SA 05）、土壙2（SK 03・04）、溝3条（SD 08・12・13）がある。これらは古墳時代と奈良時代とに区分できる。

古墳時代の遺構　調査区の南端部で検出したSK 04は不整形な土壙で、南西方向に流れ出る溝を伴なう。布留式土器が少量出土した。SK 03や調査区の西端中央で検出した総柱建物SB 07も同じ時期と考えられる。SB 07は桁行3間2.2ｍ等間、梁間2間2.9ｍ等間である。SD 08・13はSB 07の北と南にある溝状遺構である。

奈良時代の遺構　大きくはA・B両期に区分できる。A期には、調査区中央部で検出した5×5間の東西棟SB 06と、これに中軸線を揃えて北約50尺に位置する7×2間の東西棟SB 10とがある。SB 06は桁行が9尺等間、梁間が身舎6尺等間、庇10尺等間である。身舎には2時期の床束が残り、床の張り替えを行ったことがわかる。SB 10は桁行8尺等間、梁間9尺である。

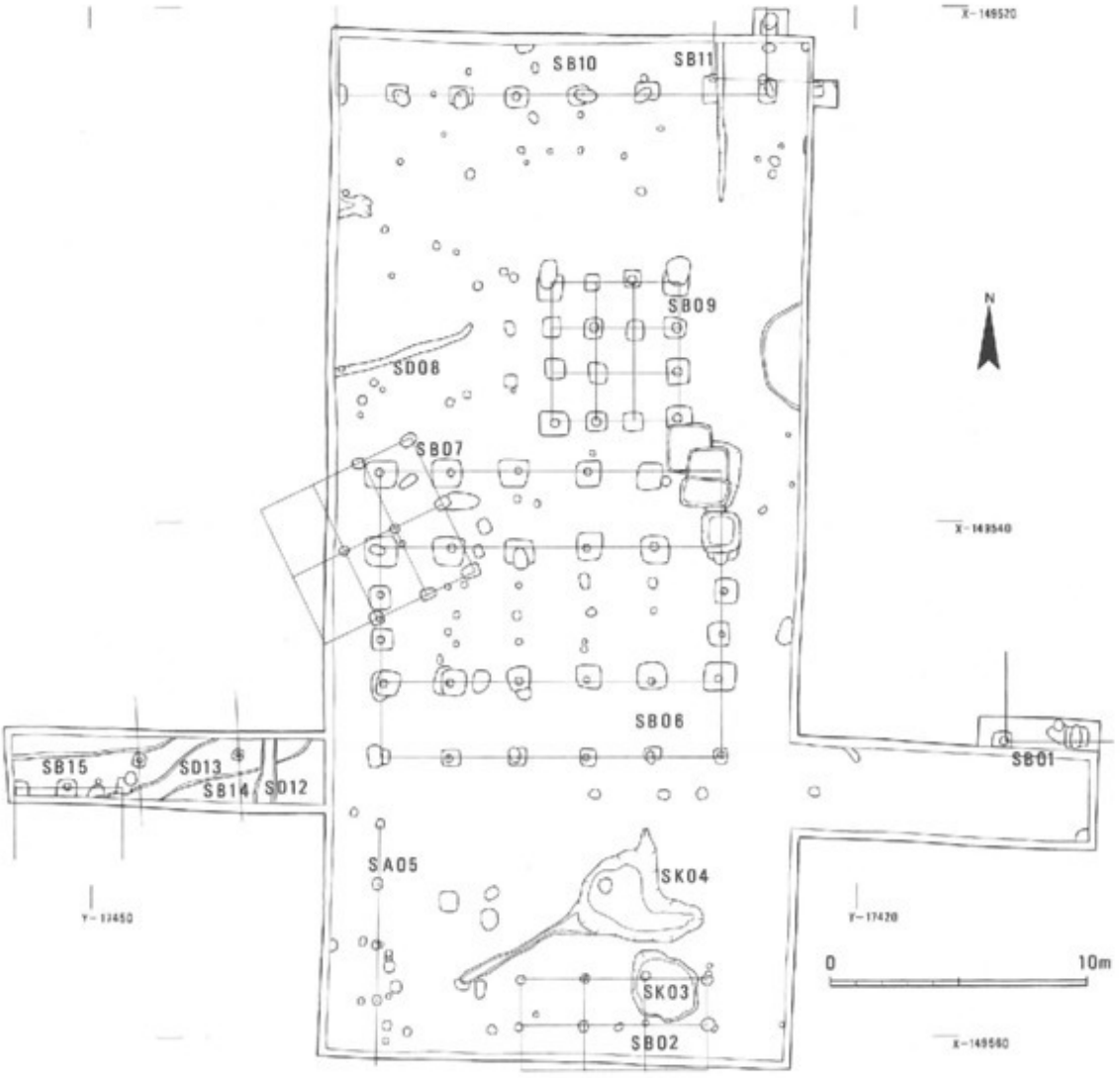
このほかSB 06の北約2ｍには3×3間の総柱建物SB 09（桁行6尺等間、梁間6・5・6尺）、東約11ｍと西約10ｍには南北棟と考えられるSB 01（梁間9尺）やSB 15（梁間7尺等間）があるが、SB 06とは近接しすぎていたり、柱通りが揃わなかったりする点から一時期の計画配置とみるのには問題が残る。その細分については今後の課題としたい。なお、SB 06の西にある南北溝SD 12も出土遺物からみてA期に属す可能性があるが、性格は明らかでない。

B期には調査区南端で検出した3×2間の総柱建物SB 02（桁行8尺等間、梁間6尺等間）、北端のSB 11（柱間7尺）、西端の南北棟SB 14（柱間13尺）のほかに南北塀と思われるSA 05（4間分検出、7.5尺等間）がある。

遺物は奈良時代の遺物包含層が削平されたためか土師器・須恵器及び瓦の小片

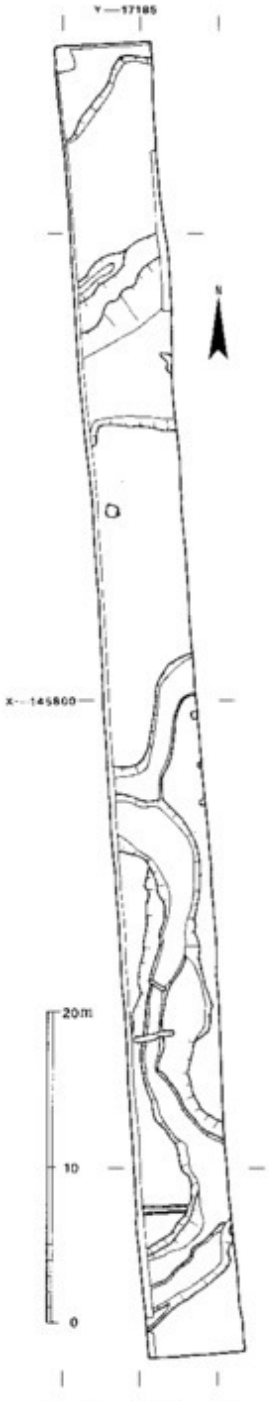
が少量出土したにすぎない。このうちには軒丸瓦6285Aが1点ある。

まとめ　A期のSB 09の柱抜取穴から奈良時代中頃の土器、B期のSB 02の柱穴から奈良時代後半頃の土器が出土しており、A期は奈良時代前半、B期は奈良時代後半に比定できる。このうちA期はSB 06・10を南北に並べ、しかもSB 06をほぼ坪の中心に位置させていることから、一町の宅地を占有し、建物を整然と配置していたことが推測される。B期の建物は小規模でまとまりに欠け、様相が一変する。三坪の特殊事情なのか否か周辺の調査をまって解明する必要がある。



第34図　左京九条三坊三坪発掘遺構図

13　九条大路および京南辺部の調査　第141－8次



第35図　発掘遺構図

北和木材協同組合が計画した資材置場造成に伴う事前調査である。調査地は羅城門跡の東方約250ｍに位置し、平城京九条大路および京南条里にかかわる遺構の存在が予測されたが、検出したのは奈良時代の東西溝１および古墳時代の溝１のみで、京南辺を画する施設や京南条里に関する遺構は発見できなかった。

奈良時代の東西溝は発掘区北端近くで検出したもので、幅約６ｍ、深さ0.5ｍ内外の浅いＵ字形をなす素掘り溝である。位置的にみて九条大路南側溝の可能性も捨て切れないが、京の外濠としては浅過ぎよう。埋土から若干の瓦片が出土しており、奈良時代の溝であることには間違いないのだが。この東西溝の下層には、厚くかつ幅広く砂と粘土が互層をなし、もと自然の流路があったと思われる。西壁土層の観察によると、幅約16ｍ、深さ1.5ｍほどあるが、無遺物のため年代はよくわからない。

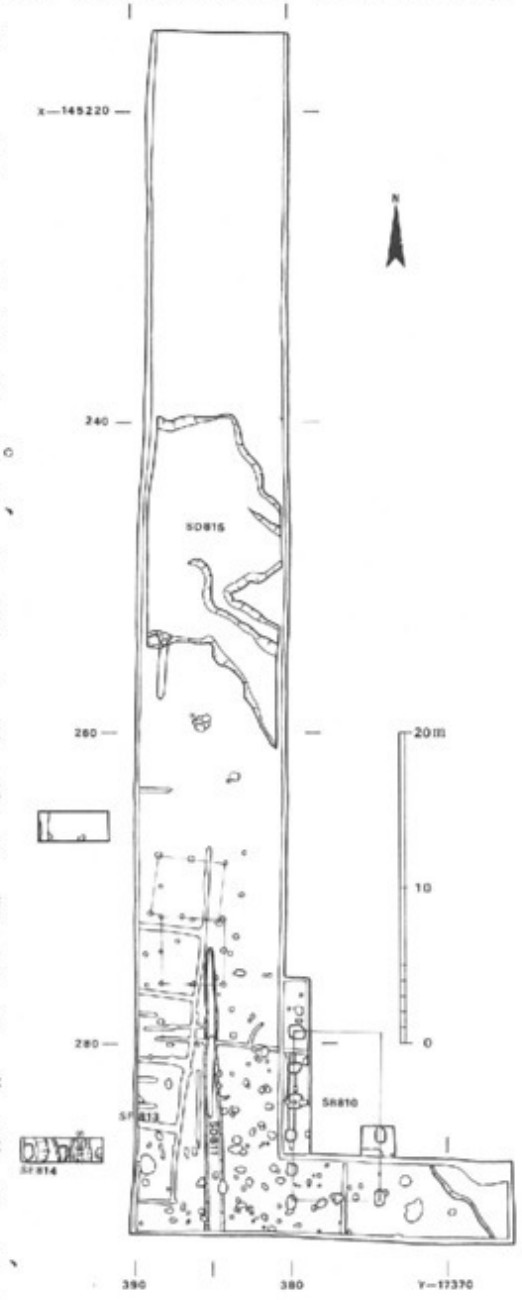
発掘区の南半部は、古墳時代の流路によって占められていた。複雑に曲折し、各所で支流を受け入れており、どちらの方向に流れていたかは不明である。埋土から古墳時代の土師器（布留式の古い段階のもの）や流木が出土した。土師器にはＳ字状口縁をもつ小形丸底椀、小形丸底壷、小形器台、円筒形の頸部から水平に広がり、さらに外反しながら立ちあがる複合口縁をもつ壷形土器、甕などがある。流木は樹種鑑定の結果、コナラ亜属に属する樹木であることが判明した。

14　右京一条二坊六・十一坪の調査　第142次

商業ビル建設に伴う事前調査。調査地は右京一条二坊六坪と十一坪にまたがり、二条条間路南側溝および六・十一坪境の坊間路等が予想された。また、敷地東側に接して秋篠川が南流し、東部は氾濫で遺構が破壊されている可能性があった。

検出した主な遺構は、奈良時代の掘立柱建物1、井戸1、南北道路および両側溝、平安時代頃と思われる掘立柱建物2以上と小柱穴群多数、旧河川1などがある。調査区北半では、後世の削平のため遺構は皆無であり、条間路南側溝は確認できなかった。

掘立柱建物SB 810は桁行5間（10.8m）、梁行2間（5.8m）の南北棟建物で、柱間寸法は桁行7尺等間、梁行10尺等間の大規模なものである。柱掘形も方0.7～0.9mと大きい。南北溝SD 811は発掘区のほぼ中央南部で約18m検出した。以北は削平のため痕跡をとどめない。断面U字形をなす素掘りの溝で、南端で幅1.2m、深さ0.2mを測る。南北溝SD 812は西南トレンチで一部分を検出した。幅約0.7m、深さ0.1mの浅い素掘りのU字溝である。SD 811から出土した土器は平城宮土器編年Ⅲ～Ⅴ期のもので、奈良時代の溝であることが確実であること、SD 811の方位がほぼ国土方眼と一致すること、SD 812との心心距離が約8.6mと3丈に近く、



第36図　右京一条二坊六・十一坪発掘遺構図

坊間路としてふさわしいこと、また第103－14次調査で判明している西一坊大路心からSD 811・812の心までの距離が約270ｍであることから、両溝で挟まれた部分は西二坊間路（SF 813）とみなせよう。路面幅は約7.6ｍとなる。

SE 814は西南トレンチ西端で検出した井戸である。その東半部を発掘し得ただけなので全体の規模は不明だが、かなり大きめの掘形内に4隅に杭を打ち縦板を組んだ井戸枠をもったものと思われる。深さは現地表から2.6ｍ以上ある。井戸枠内埋土から奈良時代後半の土器が出土している。

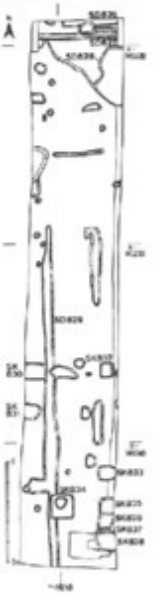
発掘区の南$^{1}/_{3}$ほどには、坊間路路面上を含めて、多数の柱掘形や土壙が存在する。掘形の中には柱根の遺存するものもあるが、すべて径20㎝以下の小形のもので、建物としてまとめられるのは分布の北部にあるSB 816・817の2棟に過ぎない。これら柱穴群は京廃絶後のものであるが、瓦器を含むものは少なく、大部分は平安時代の内におさまるものと思われる。

出土遺物には瓦塼類、土器類などがある。軒瓦は6点あり、軒丸瓦3（6133型式2、6225Ｃ型式1）、軒平瓦3（6761型式2、6663Ａ型式1）で、西隆寺創建瓦である6761型式2点の存在が注目される。他は平城宮所同瓦の仲間である。土器は多量に出土し、特にSD 811、SE 814からは平城宮土器編年Ⅲ～Ⅴ期を中心としたものが出土した。ほかに、SD 811から土馬が1点、また小柱穴からは土師器のほか黒色土器や瓦器が若干出土した。

15　右京一条二坊三坪の調査　第141－14次

駐車場建設に伴う事前調査。当該地は右京一条二坊三坪にあたり、一条条々間路の存在が予想された。発掘区は東西5ｍ、南北27.5ｍに設定し、条間路の検出を目指した。検出遺構は溝4条－土壙40基がある。SD 826・827は一条々間路南側溝の推定位置にあるが、深さが僅か5㎝と浅い上に遺物がなく、南側溝と積極的に認定できない。

SK 834は古墳時代の土壙で、埋土から布留式土器が少量出土。総じて遺物の出土量が乏しいため、各遺構の時期を明確にできない。



第37図　三坪遺構図

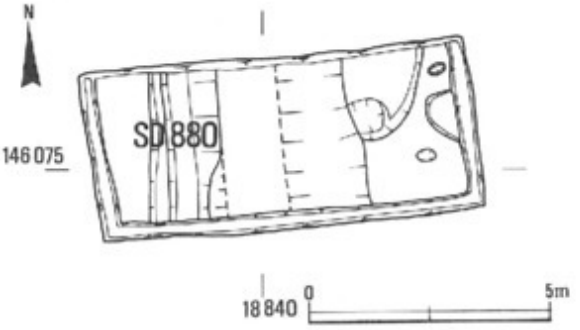
16　右京三条一坊八坪の調査　第141－4次

本調査は、住宅改築に伴う事前調査である。当該地は右京三条一坊八坪および西一坊々間路東側溝推定地にあたる。発掘面積の関係から、西一坊々間路の検出を目的に、東西8m、南北3.5mの発掘区を設定した。発掘区には宅地造成による盛土が約1mあり、以下旧耕土、床土、および暗青灰粘土、青灰粘土と移行する。奈良時代の遺構は暗青灰粘土層の上面で検出した。

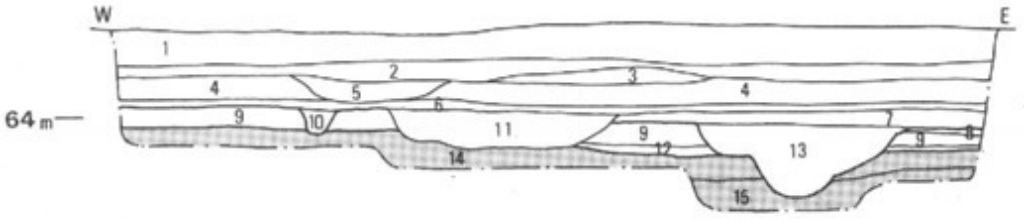
検出遺構は、西一坊々間路東側溝と考える南北溝SD 880と、小掘形3である。SD 880は幅約1.8m、深さ0.7mの素掘で、溝の両肩には一段段がつく。土層断面の観察によると、SD 880は地山の青灰粘土層を埋めた青灰色又は灰色粘質の整地層を切りこんでいる。護岸等の施設は検出できなかった。溝の埋土は瓦片を多量に含む。堆積の状況からみて、急激に埋没したようである。

出土遺物には軒平瓦6663－A型式1点、須恵器2点等がある。

平城宮南面西門（若犬養門）の中軸線が西一坊々間路心に当ると仮定すると、SD 880と坊間路心との距離は約10.8mとなり坊間路の幅員は溝心々で約21.7m（73尺）に復原できる。

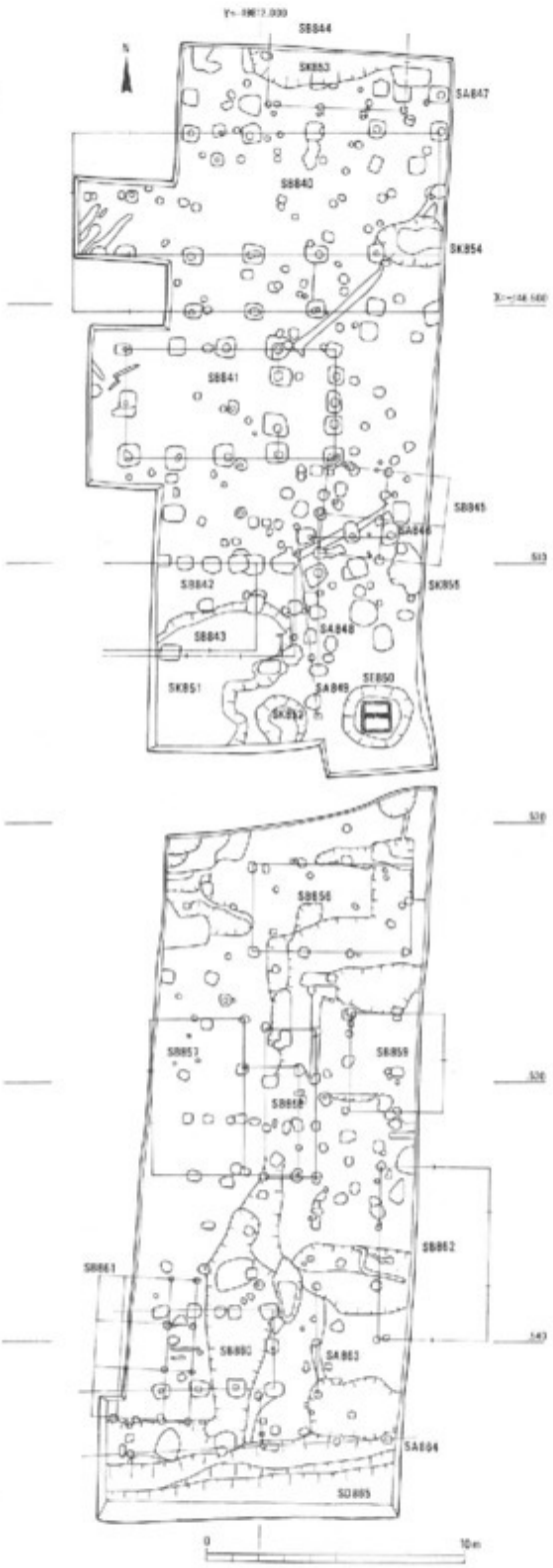


第38図右京三条一坊八坪発掘遺構図



1 置土
2 褐色砂質土
3 黄灰砂質土
4 暗灰砂質土
5 黄灰砂質土
6 黒色砂質土（木質多シ）
7 暗青灰粘質土
8 暗青灰砂質土
9 暗青灰粘土　この上面が奈良時代の遺構面
10 暗灰粘土
11 暗灰砂（近世の溝）
12 灰色粘土
13 灰褐粘質土（西一坊坊間路東側溝）
14 青灰粘質土
15 黒褐粘土　地山

第39図　発掘区南壁土層東西断面図



第40図　右京三条三坊五坪発掘遺構図

17　右京三条三坊五坪の調査

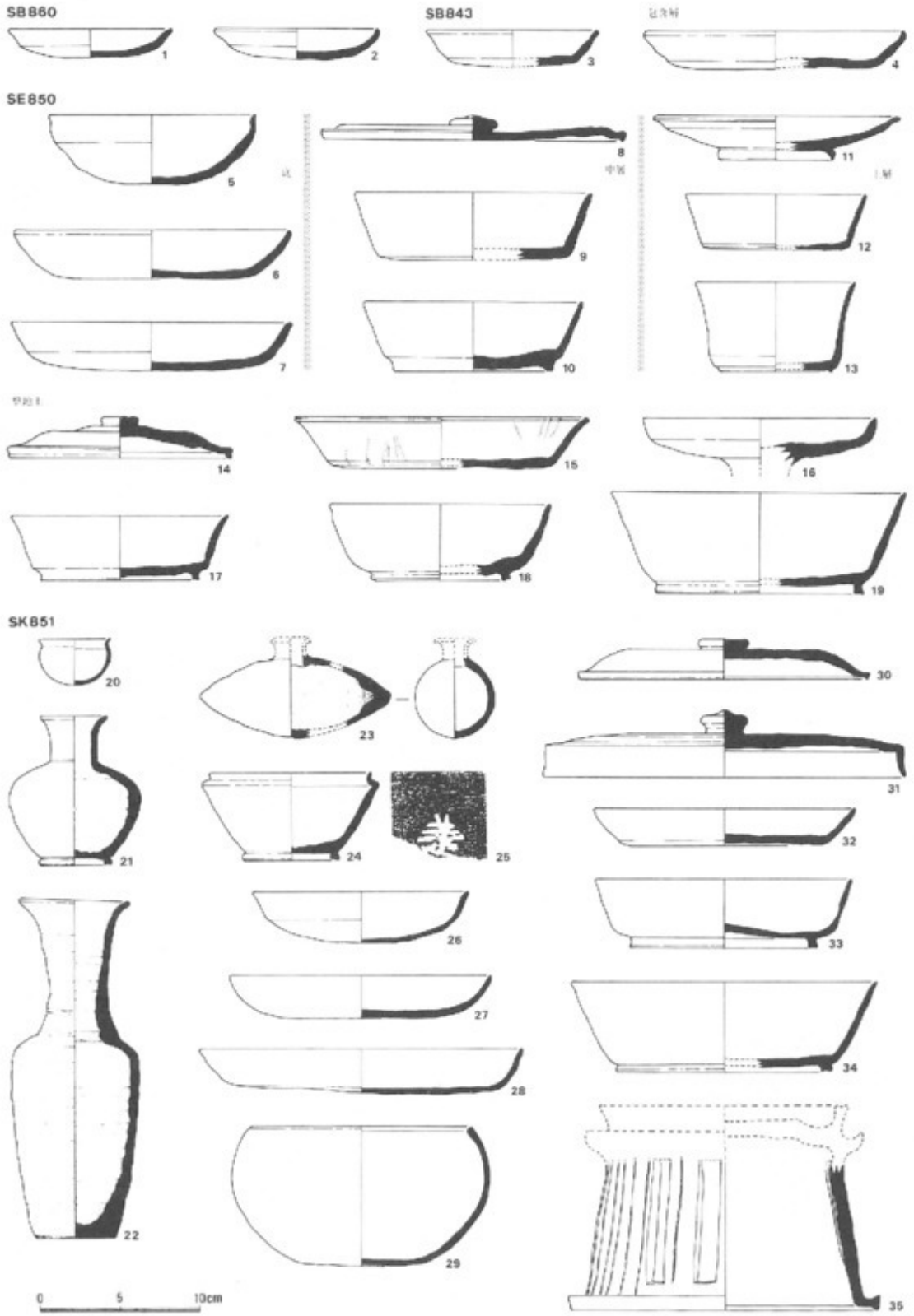
第 141－26次

マーケット建設に伴う事前調査。三条大路北側溝と五坪の遺構検出をねらいに発掘した。検出遺構は奈良から鎌倉時代に及び、掘立柱建物11、塀５、土壙などがある。主に奈良・平安時代の遺構について述べる。

北区　奈良後半に南廂建物SB 840が主屋的位置を占める。次に東西棟SB 841が建つ。東１間分に間仕切の柱がある。東西棟SB842は前者に、SB 843は後者と併存すると考える。SB 843を切る土壙SK 851の出土遺物からみて、以上の建物は平安初期に廃絶した。井戸SE 850は二期に亙る。

南区　東半部に８世紀中葉の整地層があり、SB 859などはこの層上にある。SB 860を除き遺物に乏しいが、いずれも平安時代に降ると考える。SB 860は４間以上２間の東西棟。東北隅の柱掘形から地鎮に用いた平安末の杯が12点出土。SB 857は３間２間の南北棟。東に２間分の廂がつく。SB 859はＬ字状の塀の可能性もある。発掘区が挟く、遺構配置は不明な点が多い。

目的であった三条大路北側溝は中世の溝SD 865と重複、未検出である。中世の遺構は他にSB 861・862・864・865。SA 863・864・849などがある。柱掘形は小さい。



第41図　発掘区出土土器　土師器1－7　20，26－29　須恵器8－10，12－19
灰釉11，21，22，23，24，30－34　25須恵器杯蓋内面刻印　陶硯35

18　右京六条三坊十坪の調査　第147次

本調査は、国家公務員合同宿舎建設にともなう事前調査である。調査地は薬師寺西方の丘陵地であり、丘陵地における奈良時代の居住地造営の状況把握を目的とした。調査は、建物建設予定地を中心とし、東北部に主調査区1カ所、西半部に小トレンチ2カ所を設定して進めた。

主調査区は、後世の大規模な削平を受け、検出面はおおむね粘土質の地山であり、奈良時代の遺構は井戸と土壙各1を検出したにとどまった。井戸は正方形（1辺1.6m）の掘形に竪板を組んだものであり、改修が行われている。枠板は東面と南面にのみ残っている。調査中に、西・北面の壁面の崩壊があり、検出面から3.2mの深さまで掘り下げたものの、井戸底に至らなかった。調査終了後、チェンブロックによって引き抜いた枠板は幅25cm、長さ5.7mという長大なものであった。埋土から8世紀半ばの土器類若干と、重圏文軒平瓦1点が出土した。

土壙は円形（直径3m、深さ1.6m）で、井戸の東北5mの位置で検出した。埋土中から八世紀前半の土器片が大量に出土したが、土壙の性格は明らかでない。あるいは、井戸として掘りかけたものであったかもしれない。西方の調査区では、北トレンチで小規模な柱掘形（1辺0.3～0.4m）を5個検出したが、建物としてまとめることはできなかった。南トレンチでは奈良時代の土器の包含層が部分的に残っていたが、後世の溝や土壙などによる攪乱がいちじるしい。

第42図　十坪検出の井戸

調査地は、総体的に後世の削平がいちじるしい。しかし、この地域で井戸や、土器を多量に含む土壙を検出したことは、この地が生活の場として活用されていたことを示す。遺憾ながら建物遺構を検出することはできなかったが、それは後世の削平が掘立柱掘形をも全く残さないほどいちじるしいことを示している。かろうじて残った井戸は、調査で確認した深さより、少なくとも1m加えねばなるまい。

Ⅲ　京内寺院の調査

1　薬師寺中門の調査

薬師寺中門跡の調査は、1954年に浅野清氏をはじめとする諸先学によって部分的な調査が行われたが、このたび中門の建物復原に際し、全面的な調査を行うこととなった。発掘区の面積は、中門全域と南面東回廊の一部を含む計670㎡。

中門の遺構

建物・基壇規模　中門の遺構面は、遺存の良好な箇所で現地表下約45㎝にあり、平均約50㎝の基壇土が遺存していた。礎石はすべて抜き取られているが、各々の礎石抜取穴の中に数個の根石を検出した。

これらの礎石抜取穴から明らかとなった中門の建物規模は東西24ｍ（81尺）南北7.4ｍ（25尺）で、桁行5間、梁行2間に復原できる。柱間寸尺は、桁行中央3間が17尺等間、両端間が15尺等間、梁行が12.5尺等間である。この寸法は、1954年の調査によって得た成果と一致し、長和4（1015）年に製作された『薬師寺縁起』（以下『縁起』と略す。）の記載寸尺のうち、桁行寸尺「長五丈一尺」と相異することを再度確認した。

基壇は西端の礎石抜取穴以西が現代の池によって大幅な撹乱をうけているうえに、後述するように外装の凝灰岩も圧倒的に後補のものが多い。しかし、その平面規模は東西27.53ｍ（93尺）、南北13.32ｍ（45尺）に復原できる。従って、建物規模を考慮するならば、基壇の出は平方向が10尺、妻方向が6尺となる。

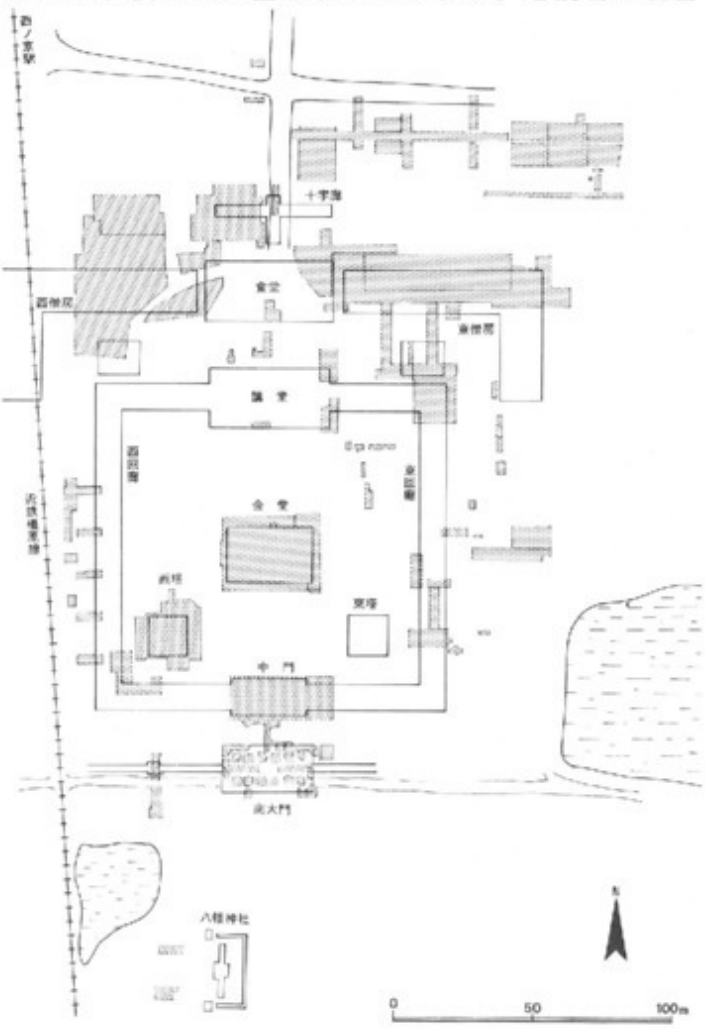
また、平面規模の確認に加えて、今回は断割調査によって基壇の築成状況を把握した。その結果、基壇は全域に及ぶ掘込地業を行わず、整地した地表面の直上にやや不規則な版築工法によって築成していることが判明した。とりわけ築成途上で、礎石据え付け位置にあたる部分を広範囲にわたって掘削し、ここに大量の瓦で根がためを行っている。同時にこれらの工程に、明確な修復の痕跡は認められない。従って、今回の調査で確認した建物及び基壇規模が創建当初を伝えるも

のと考えて、ほぼ大過ないであろう。

基壇外装　基壇回わりの凝灰岩化粧は、北面では一部遺存するのみであるが、南面では比較的残りが良好である。しかし、それらの大半は規格、積み方がともに不揃いで、後補のものである可能性が高い。とりわけ基壇東南隅部の凝灰岩は、転用材であるうえに裏込めには焼土を混じており、『縁起』に記す天禄4（973）年の火災焼失後、再建時に積みかえたものと考えられる。唯一創建当初の基壇化粧として、南面の東から2間目に4個の凝灰岩列を検出した。この裏込めは均一な黄灰砂質土で、焼土などの混入も認められない。またこれらの凝灰岩の上面には、風化してはいるものの、縦6cm、横6cmの面とりが認められ、地覆石と羽目石とが一石の造り出しであったことを示している。

石階　石階の痕跡として、中門の中央3間の南面に長さ5mにわたって、幅約27cm、厚さ5cmの板状の凝灰岩列を検出した。これは先述の創建当初の地覆石列に対応し、創建時の石階第1段目の踏石の底部が遺存したものと考えられる。これによって石階は踏面が27cm、蹴上げが21cmの4段に復原し得る。従って基壇の高さはおよそ80cmとなる。

この石階の南には、石階の東西幅員に呼応して、薄い凝灰岩の敷石遺構が存在



第43図　中門・回廊発掘位置図

する。遺存状況はかなり不良で、南大門から中門にかけての舗装敷石の底部が遺存したものであろう。

また、中門の中央間に相当する部分で、基壇に対して南折して存在する縦10cm、横15cm、長約50cmの1対の凝灰石を検出した。この2つの石は、位置及び形状から石階の耳石の残闕とも考えられるが、創建当初の石階第1段目踏石より更に高い位置に存在する。従って当初中央3間であった石階を、後に中央1間に縮少している可能性がある。

台石・台座　中門の前面両端間のほぼ中央部で、礎石様の花崗岩2対を基壇土に覆われた状態で検出した。この石は直径80cm、短径70cm、厚さ70cmの上面の平らな不整球形で、上面の中央には、径25cm、深約30cmの枘穴がうがたれている。この4個の枘穴の中からは焼土とともに約200点の塑像の断片が出土した。また同じく中門前面両端間に、この石をL字形にとり囲む幅約90cmの凝灰岩縁石列を検出した。この石列は基底部が部分的に残存し、縁どられた内部に紛末状の凝灰岩が堆積するのみで、遺存状況はそれほど良好ではないが、縁石列の外縁は柱通りよりやや内側に位置し、中門の建物構造とは直接関係のない内部の装飾的施設であろうと考えられる。すなわち『縁起』からは、中門に二王像をはじめ計16躰の仏像が安置されていたことが知られ、この2対の石とL字形の凝灰岩列は、前者が二王像各足の台石、後者がそれ以外の仏像の安置されていた台座と推定される。そして台石の枘穴から出土した焼土と多数の塑像の断片を考慮すれば、『縁起』に記す天禄4（973）年の火災焼失以前の二王像は塑像であった可能性が高いと言える。

雨落溝　中門及び回廊の南面には、雨落溝の遺構と考えられる玉石列及び凝灰岩列が重複し、加えてある時期の洪水を物語る厚い砂層や、天禄4（973）年の火災を示す焼土層が堆積するなど、複雑な様相を呈している。しかし、天禄4年の火災を介して、南面雨落溝は概ね2時期存在することが判明した。

創建当初の姿を復原する遺構は検出できなかったが、地覆石列、石階との関係から考えて、おそらく創建時には南面雨落溝は存在しなかったと考えられる。そ

の後、径30～40㎝の上面の扁平な玉石と板状の凝灰岩で雨落溝を敷設するが、基壇化粧の下層にまで及ぶすり鉢状の厚い砂の堆積層が示すように、ある時期大規模な洪水の影響を受けている。これにより雨落溝は底石を残して破壊され、基壇化粧の大半も倒壊したのであろう。この砂層の直上には厚さ10㎝の焼土層があり、洪水の直後、すなわち天禄4（973）年に中門が火災によって焼失したことを示している。検出した凝灰岩基壇化粧の大半は、この後に積み替えた復興時のものである。

再建後の南面雨落溝は幅約1mで、基壇掘部を径10～20㎝大の玉石列で補強し、南岸は径30～40㎝大の玉石で護岸している。しかしこの溝は雨落溝としては不相応なほど広く、この地域の基幹排水路の機能もあわせたものと考えられる。

北面雨落溝は、部分的に玉石の抜取痕跡を検出したのみで、大半は素掘り溝として検出した。

また中門北面のやや西寄りの雨落溝北側で径約20㎝大の玉石敷を検出した。1976年の調査でも西塔の基壇四周に同様の玉石敷を検出しており、中門の北面にも帯状の玉石敷舗装がなされていたものと考えられる。

回廊の遺構

建物・基壇規模　南面西回廊は、現代の池ですべて削平されて検出できなかった。南面東回廊は、礎石、礎石抜取穴、及び基壇地覆石列、南北両雨溝等を検出した。

今回検出した遺構から、南面東回廊の建物、基壇規模は、桁行12～13尺、梁行2間、10尺等間の複廊で、基壇の幅員が33尺、従って基壇の出は6.5尺に復原できる。このうち桁行方向の柱間寸尺については、1968年に行った東面回廊の調査で14尺であることが判明しており、今回の調査結果と相異する。また、1969年の調査で明らかとなった南面西回廊の礎石抜取穴と、今回の中門との位置関係からも、やはり14尺で割りつけることは不可能である。それ故、おそらく中門の両脇において柱間寸尺の調整を行ったものと考えられる。

また、回廊基壇は中門基壇に対して勾配をもってとりつくことが判明した。その理由として、まず第一に両者のとりつき部の断面土層観察の結果、両基壇の間

に明確な高低差が認められないこと、第二に回廊の地覆石列が、中門とのとりつき部から回廊の2間目に至る区間で、東に向って1.6％の急勾配で下っていること、等三に中門から数えて2間目の回廊の礎石抜取穴が一様に約50㎝の深さをもつのに比して、第1間目の礎石抜取穴が削平をうけて基底部を遺存させるのみであることなどを指摘しうる。同時に南面東回廊西南端の柱位置では、根石とその東の掘形に落しこまれた厚さ65㎝の礎石を検出したが、両者を旧状に復原するならば、中門基壇の復原高よりやや低い位置に相当することも、その傍証となる。

なお、この礎石からは回廊の柱の直径を凡そ45㎝に復原することが可能である。

基壇化粧　検出した基壇化粧はすべて地覆石列で、凝灰岩が用いられている。全体的に摩滅が著しいが、中門との南面とりつき部においては明確なつくり出しのある地覆石とその前面に転倒した長辺95㎝、短辺70㎝の羽目石とを検出した。これによって、中門の地覆石と羽目石とが一石から成るのに対し、回廊では別の石材を用いていたことが判明した。これらの基壇化粧は、後述するように洪水や火災の影響を受けて一部欠失したり転倒したりしているが、概ね創建当初の姿を伝えるものである。

雨落溝　北面雨落溝は、最近の攪乱を受けているため明確な痕跡を検出し得なかった。

南面雨落溝の変遷は、ほぼ中門のそれと呼応している。すなわち創建当初存在しなかった南面雨落溝は、天禄4（973）年に相前後して発生した洪水及び火災の教訓を得て玉石列で敷設されていることが判明した。しかし、中門のように創建後、洪水にみまわれるまでの期間に雨落溝の存在する時期があったかどうかは不明である。検出した南面雨落溝の遺構は、粘質土の整地層に敷設された径約30㎝の南岸玉石列で、一部欠失している。この整地層の下層には、天禄4（973）年の火災を物語る焼土の堆積があり、その直下には地覆石列下層に及ぶ厚さ40㎝の砂の堆積層がある。この砂層によって地覆石列は一部南に転倒しており、中門南面と同様に火災焼失直前に、この付近が大規模な洪水の影響をうけたことを示す。

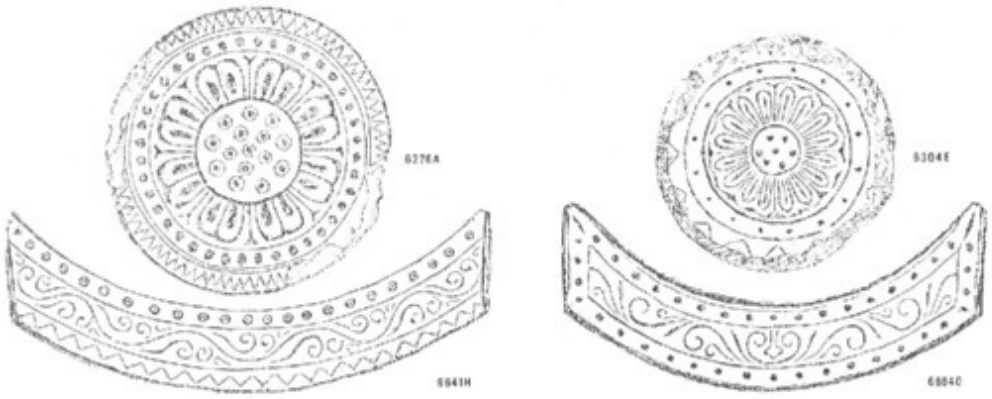
火災後に敷設された雨落溝の上層は、凹凸の激しい厚さ30～50㎝の砂で覆わ

れており、再び洪水によって基壇の大半と雨落溝の一部が破壊されたことを示す。その後は基壇は構築されなかったと考えられるが、回廊礎石はなお遺存していたであろう。

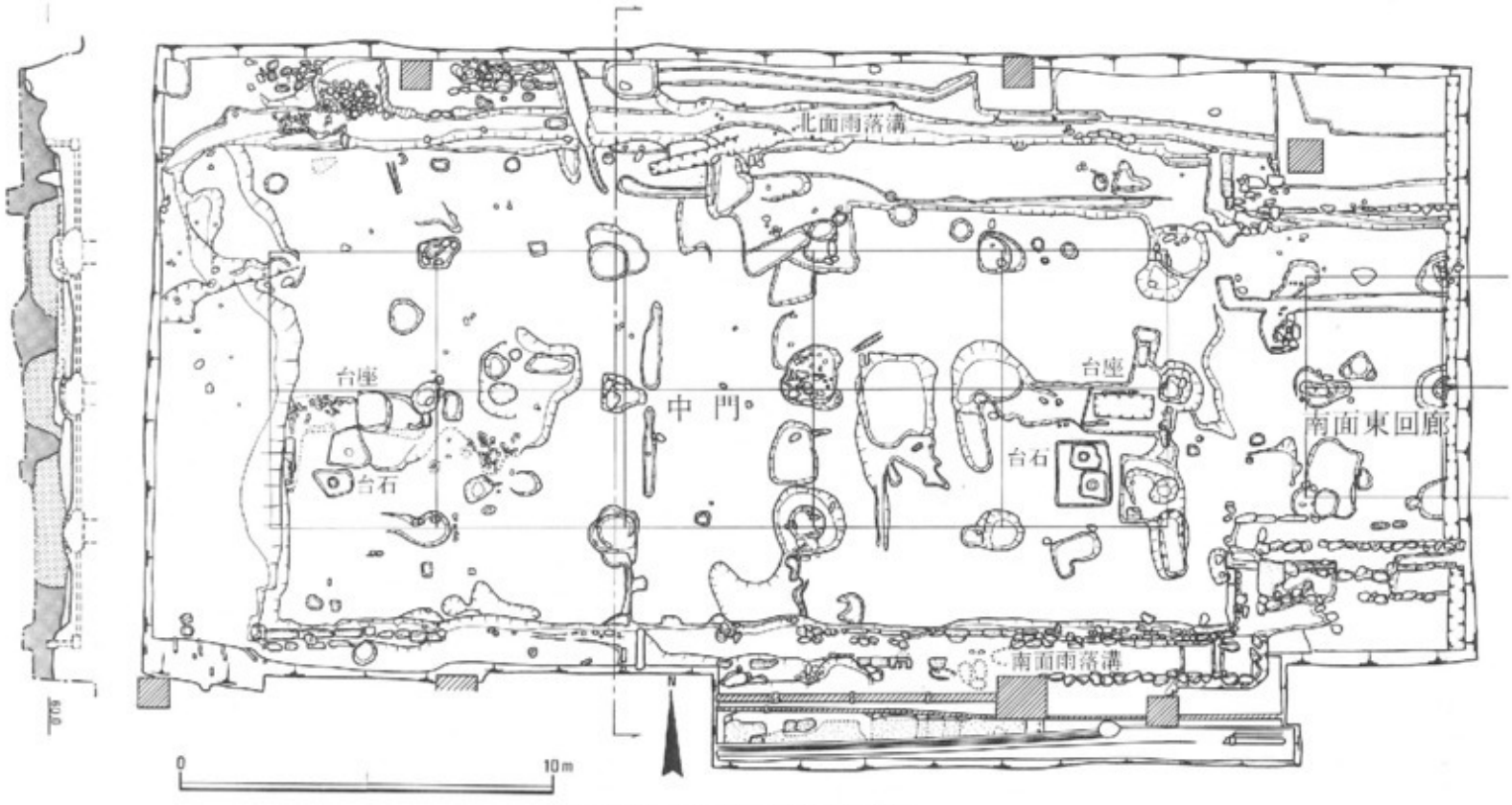
また、南面雨落溝の北約1mの位置にもう一条の溝を検出した。この溝は幅約50cm、北岸が直方体の凝灰岩列、南岸は玉石列で、時期的に最も新しいものである。1954年の調査では、この溝と回廊中軸との距離が12尺に相当することから、基壇幅24尺の単廊の存在の可能性を示唆している。しかし、これに伴う北側の雨落溝は検出していないし、単廊の存在を裏付ける礎石及びその抜取痕跡等も、今回の調査では確認し得なかった。しかも従来の各回廊におけるいづれの調査でも同様の溝は検出していない。また、この溝は複廊回廊の礎石にほぼ接しているため、最終期の回廊に伴う雨落溝と考えることも困難である。それ故、回廊の建物が失われ、基壇も破壊された後、土塁状に遺存した基壇痕跡の南面に敷設された排水溝と考えるのが妥当であろう。。

遺　　物

まず挙げられるのは、台石枘穴から出土した約200点の塑像断片である。しかし二王像の全体的な意匠及び形状を復原し得る量ではない。土器の大半は中門、回廊の南面から出土。ともに雨落溝下層の砂の堆積層からの出土が多く、土器の年代は10世紀後半が多い。雨落溝とその上層からは中世土師器、瓦器が多量に出土。この土器の時期差に天禄4（973）年の火災を比定することができる。



第44図　中門・回廊所用軒瓦



第45図　薬師寺中門・回廊発掘遺構図

また、複廊回廊の南側雨落溝の北1mに存在する東西の石溝からは、13～14世紀頃の瓦器片が出土し、この溝が最終期のものであることを示す資料を得た。

瓦塼類で計800～900袋出土し、軒瓦215個体、他に道具瓦、平安期鬼瓦、近世鬼瓦等を含む。なお中門基壇築成時の根がための瓦には圧倒的に本薬師寺式の軒瓦が多い。

ま と め

今回の調査は、南面東回廊の一部を含む中門の全域に及び、部分的な調査に終始した1954年の調査に比して得た成果も多い。建物基模、基壇規模及びその構造、そして基壇化粧の詳細はもとより、中門の内部意匠が明らかとなり、とりわけ『縁起』に記す計16躰の仏像の安置場所を推定し得た。しかも、このうち創建当初の二王像が塑像であったことをほぼ確定づけたことは、特筆に値するであろう。

また、回廊と中門とのとりつき状況についても明らかとなった点は多く、総じて復原のための貴重な成果を得たといえる。

このうち、特に考慮しなければならないのは、中門の構造上の問題である。先述の如く、中門の基壇の出は平方向が10尺で、妻方向が6尺、切妻造であることがわかる。しかも梁間1間分に対する平方向の基壇の出の比率が1.25とかなり大きく、従って平三斗組では軒を支えるうえで難点がある。むしろ出組の方が構造的に適しているといえる。しかし、奈良時代の切妻造の門遺構で出組構造を示すものには類例がない。東大寺転害門は現在出組の構造をもつが、天平時代には平三斗組であったことが、昭和修理の際に明らかとなった。他に5間×2間の切妻造であったことを想像させる奈良時代の門遺構として、大安寺中門が挙げられるが、梁間1間に対する平方向の基壇の出の比率が1.40であり、薬師寺中門における比率よりも更に大きな数値を示す。それ故、即断は避けなければならないが、このような規模をもつ奈良時代の門の中には、出組の構造をもつものも存在したことを暗に示しているともいえる。

2　薬師寺旧境内の調査　第141－22次

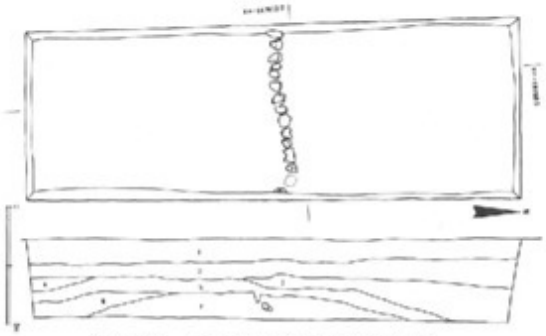
本調査は、畑地造成にともなう事前調査である。調査地は薬師寺旧境内の東北部分にあたり、秋篠川の西岸20ｍの旧水田である。この地は従来の研究では薬師寺賤院推定地の南辺にかかり、平城京の条坊では六条々間の北側溝の推定地でもある。これらの遺構検出を目的に南北９ｍ、東西３ｍの発掘区を設定し発掘調査した。

調査地の土層は上から、①水田耕土・床土、②暗灰粘質土、③青色粘質土、④青灰色砂質土、⑤青灰色粘質土、⑥暗青灰色粘質土、⑦暗灰色砂となる。③・④層以下南と北に傾斜する堆積を示す。②層からは近世の遺物が出土したが、③・④層は無遺物層であった。⑤・⑥層には中世の遺物が含まれ、⑦層からは鎌倉時代の軒瓦や瓦器が出土した。

検出遺構は石列１条である。この石列SX 01 は７層中において検出したもので、東西方向にのび、両端は発掘区外にのびる。石列は挙大の野面石を並べたもので、直線はなさず、ゆるくＳ字状に屈曲する。発掘区の関係から、この石列の未端を追求することができず、従ってその性格は不詳である。その年代は、伴出遺物から鎌倉時代と見做せよう。

なお、石列の下層は、現地表下２ｍまで砂の堆積を確認したが、以下は調査不能であった。このため当初予想した薬師寺関係の遺構および条坊関係の遺構は解明するに至らなかった。

第47図　第７層出土軒平瓦

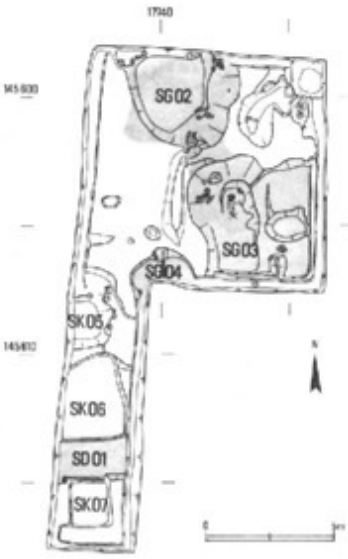


第46図　薬師寺旧境内発掘遺構図

3　法華寺旧境内の調査(1)　第141－1次

本調査は宅地造成に伴う事前調査。当該地は左京二条二坊九・十坪々境にあたり、昭和55年の第123－4次調査で当該地の西隣を発掘して、法華寺と阿弥陀浄土院を画する塀および溝を検出した。

発掘区の層位は、耕土、床土、中世土器および木炭を多量に含む灰褐色砂質土、灰色・黒色粘質土、および地山の灰白色粘土層と移行する。奈良時代の遺構面は灰色・黒色粘質土層である。検出遺構は、園地1、井戸状土壙3、溝1がある。東西溝SD 01は幅約2m、深さ0.2～0.5mの素掘で、第123－4次で検出した法華寺と阿弥陀浄土院を画する溝に連なる。SG 02～04は平面不整円形の園地。深さ0.7mで、護岸には径0.5m以下の河原石を用いるが、大半は失われていた。この園地は変形しながら中世まで存続したようで、SG 04西側に中世の護岸石が一部残っていた。土壙SK 05～07は一辺が2～3mの隅丸方形の土壙で、深さは1m前後ある。SK 06、07はSD 01の溝肩を切っている。出土遺物には、多量の瓦、土器、木器がある。瓦は奈良時代から中世にわたり、軒丸瓦15、軒平瓦19がある。うち、平城宮軒瓦編年II期の軒瓦が4割を占める。他に二彩、三彩丸瓦各2、緑釉水波文塼1、篦描塼1点がある。土器は土師器64点、須恵器78点、その他28点がある。木器は花文を墨書した有孔円板1、「采女」と記す習書木簡1、折敷底板1、加工棒・加工板26がある。折敷はSG 02から、他はSD 01出土。



第48図　法華寺旧境内発掘遺構図

今回の調査では、第123－4次調査で検出した法華寺と阿弥陀浄土院を画す溝を検出したが、前回と異なり溝に伴う塀は検出できなかった。しかし溝に近接して園池が営まれており、それが中世まで存続したことが注目できる。下限の年代は鎌倉時代中期の叡尊等による法華寺復興期と一致し、その復興状況の一端を窺うことができる。

4　法華寺旧境内の調査(2)

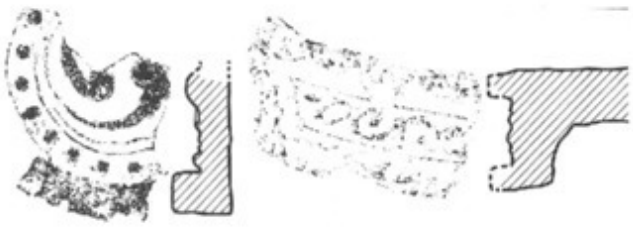
この調査は法華寺地蔵堂建設にともなう事前調査である。調査地は、数年前、法華寺境内に移された横笛堂の跡地である。この地は法華寺東面回廊の外側の位置に想定される。

調査地の土層は地表下30～40㎝がバラス混りの硬い土で全面をおおわれており、寛永通宝などを含んでいた。その下はバラス混り黄褐粘土（厚さ10㎝）があり、その上に据えた大小の石からなる根石状の石組（径0.6～0.7ｍ）があらわれた。建物の根石であることも考え、発掘区を四方に拡張して調査を続けたが、少なくとも石組から3ｍ以内には対をなす石組みは存在せず、根石の可能性は薄らいだ。バラス混り黄褐粘土の下は暗褐土（厚さ50㎝）で、瓦・土器など中世遺物を含み、その下は黄褐粘土の地山となっている。

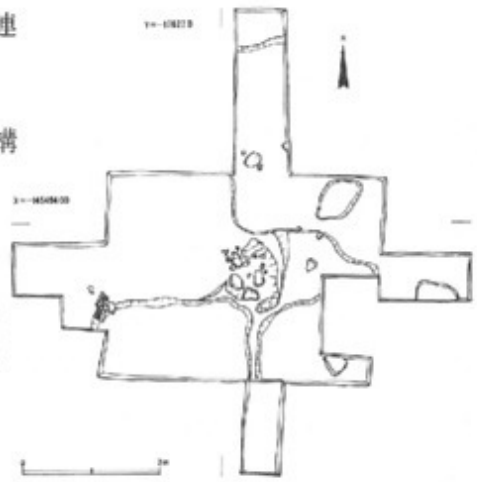
以上のように石組みの性格ははっきりしない。ただ土層・遺物からみて、石組みの設けられた年代は近世初頭を遡るものではない。

ところでこの石組みは移転前の横笛堂のほぼ中央部にあたる。横笛堂の建築は元禄年間頃の創建とみられているから、年代的には石組みとの関連を考えさせる。しかし、横笛堂は床張りの建物であり、また本尊の横笛地蔵も床の上に安置されており、石組みを、仏像の台座の基礎施設と考えることも出来難い。このような点からみて、石組みは、直接、横笛堂との関連をもたないものと思われる。

なお、調査地における奈良・平安時代の遺構については手懸かりを得られなかった。



第50図　横笛堂跡地軒瓦

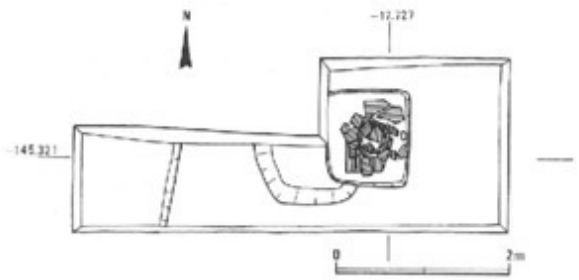


第49図　横笛堂跡地発掘遺構図

5　法華寺旧境内の調査(3)　第141－3次

奈良市法華寺町870番地の塚本宗敬氏所有地における住宅建設の事前調査である。当該地は法華寺旧境内の西北部に位置する。現況は庭木の仮植地になっており、調査は西方の隣家に接する南北5ｍ、東西1～2ｍ、約7㎡の小範囲に限られることになった。

調査区の土層は、上部0.5ｍが宅地のための整地土。その下部0.5ｍが古代―中・近世の瓦を含む遺物包含層であり、地表下1ｍで灰白色粘土の地山面に達する。地山面で、方1ｍの柱穴1と井戸1を検出した。柱穴は、底面に瓦片を敷き、中央部に径37㎝の柱痕跡を残す。瓦から奈良時代に属するものと考えられる。この地区に大規模な掘立柱建物のあることが明らかになった。調査区北端で検出した井戸は、下層の遺物包含層から出土した瓦片から中世以降のものと判断される。井戸枠等の施設は全く遺存しなかった。



第51図　法華寺旧境内発掘遺構図

6　法華寺旧境内の調査(4)　第141－6次

店舗付住宅新築に伴う事前調査として実施したもので、調査地は法華寺旧境内の東端にあたり、東二坊大路西側溝の検出が期された。発掘区の中央から東にかけて大きな掘込みがあり、南北溝の西半部と思われたが、内部の堆積土に含まれていたのはすべて中・近世の遺物であった。出土遺物としては、軒丸瓦6320 A型式1点、軒平瓦中世1点・近世1点、中・近世の土器類数十点がある。

7　東大寺旧境内の調査　第141－32次

本調査は社員住宅の建設に伴う事前調査。当該地は史跡東大寺旧境内にあり、転害門の北、西面大垣の推定地にあたる。

この地は、春日山山麓から西に緩やかに延びる丘陵上にある。調査地の旧地形の東端と西端の比高差は0.6ｍにも及ぶ。このため、古代から今日迄幾層に及ぶ整地が繰り返し行われ、調査地西端ではそれが１ｍにも及ぶ。遺構は出土遺物とこれら整地層との重複関係から、おおきく古代、中世、近世、近現代に区分できる。

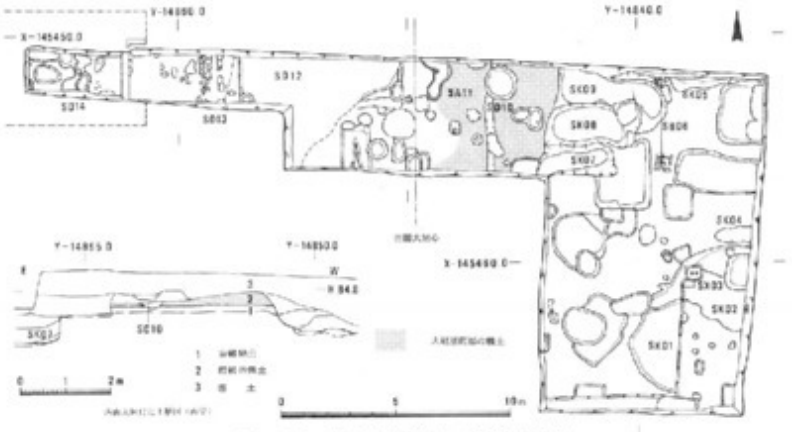
検出遺構は、東大寺造営前の旧河道、東大寺西面大垣基底部、同東雨落溝、玉石組水路（近世）、土壙群、建物、泉水など多種におよぶ。ここでは奈良時代の遺構に限定して説明しよう。

SD 12　発掘区内を東北から西南にかけて斜行する幅約7ｍの旧河道。埋没直前には幅が4ｍに縮少し、深さも0.3ｍとなっていた。

SA 11　東大寺西面大垣の基底部。黄褐色粘土の地山面を削り出し、その上に暗褐色砂質土を積み固める。暗褐色砂質土は最大厚0.3ｍであるが、東西幅は両側が撹乱され明らかでない。

SD 10　西面大垣東側溝、幅約0.35、深さ0.05ｍ程度が残る。この溝は、大垣築土の暗褐色砂質土を切りこむ。その位置は転害門棟通りから約3.2ｍ東にあたる。

なお大垣から西の発掘区では近世の撹乱によって顕著な遺構は検出できなかった。



第52図　東大寺旧境内発掘遺構図

未記載調査一覧

次数	調査位置と目的	検出遺構	備考
第141	平城宮第二次内裏北方	市庭古墳の外提の一部と濠を埋める	埴輪小片出土
—24次	官衙　市庭古墳の周濠	整地土を確認	
30	平城宮北面大垣	水上池の提の基底部をなす築土層を	築土中より土師片が、
	北面大垣の構造確認	確認	整地土中より軒平瓦
			6561 型式が出土
11	平城宮北50m	近世の土壙3、小ピット2、溝1、	
	大蔵省関係遺構の確認	検出	
34	平城宮北方	遺構残存せず、地山を確認	
	大蔵省関係遺構の確認		
38	大蔵省関係遺構の確認	遺構残存せず、地山を確認	
25	朱雀大路の規模確認	朱雀大路の東側溝および東築地を検	土器・瓦片出土
		出	**平城京朱雀大路発掘調**
			査報告 1983
20	左京一条二坊九坪	遺構残存せず、地山を確認	土師器・須恵器少量
18	左京一条二坊十坪	〃	〃
33	左京一条二坊坊間路	南北に並ぶ小柱穴3を検出	〃
第144	外京二条六坊十一坪	奈良時代の門跡1、土壙1、平安時	
—1次	（奈良女子大構内）	代掘立柱建物1、井戸1、鎌倉時代	**奈良女子大学構内遺跡**
		井戸1、江戸時代井戸2	**発掘調査概報Ⅱ予定**
第141	左京四条四坊九坪	四坊々間路両側溝および九坪内の掘	**平城京左京四条四坊九**
—9次		立柱建物8、塀5、溝1条、土壙9	**坪発掘調査報告**
23次	左京九条三坊、九条々	九条々間路・東堀河とそれに架かる	土器・木製品・金属器
	間路と東堀河の検出	橋を検出。橋材が多量に出土	等　**平城京東堀河一左**
			京九条三坊の発掘調査
36	羅城門北の朱雀大路遺	佐保川の氾濫による砂の堆積。奈良	土師器・須恵器・瓦片
	構の検出	時代遺物を包含	および中世の漆器出土
37	五徳池西における九条	九条大路路面と側溝を検出	側溝より土師器・須恵
	大路検出		器出土
			市道九条線関係遺跡発
			掘調査概報Ⅰ
10	右京六条四坊七・十坪	中世に削削された南北溝を検出。中	軒丸瓦6348A・6313
		世城郭の一部か	A、瓦器片出土
	法華寺伽藍の検出	地山面を確認	奈良時代の土師器・高
			杯1を検出
12	西大寺旧境内	地山の落ちと、小穴を検出	瓦片・土器片少量出土
	金堂院回廊の検出		
次数外	法隆寺		
	法隆寺関連遺構の検出	若草伽藍の北を画する塀等検出。奈	**法隆寺発掘調査概報Ⅱ**
		良時代から近世に至る各種遺構多数	予定

木彫面　表紙カット

平城宮第139次調査（1982年6月）で、内裏東北方の東大溝から出土した。全長16.6㎝、幅8.6㎝、厚さ1.7㎝。

ヒノキの白木作りの面である。内側に空洞がある材（径約10㎝）から倒卵形の板を削りとり、大胆な刀づかいで人面を表わす。額にそって1条の溝をめぐらせ、頭頂をV字状に切り欠くのは、頭巾をかぶる表現か。額の溝の中央から両頬にかけて弧状に彫りこんで髪を表わす。この彫りこみは眉の表現をも兼ねるらしく、目の上の彫りは大きい。目は上・下のまぶたを彫り、瞳を小さくえぐる。耳は弧線で表わす。右耳から右頬にかけてゆがんでいるのは、原材自体のゆがみによる。鼻は上半扁平、下半のみが高まる。鼻の下の上半は低く作り、下半を高め、その中央に人中を彫る。唇は、弓なりの彫りと真直ぐな短い彫りでしめしている。削り細めた顎の下端近くに横溝を彫る。以下をあごひげとして表わす意図か、あるいは装着用の溝か。8世紀前半。

昭和57年度　平城宮跡発掘調査部発掘調査概報

1983. 5

奈良国立文化財研究所

Preliminary Report
of
Archaeological Excavations

carried on from April 1982 to March 1983

1983

Nara National Cultural
Properties Research Institute